貝塚市埋蔵文化財調査報告第15集

加治神前畠中遺跡発掘調査概報

都市計画道路鳥羽畠中線建設に伴なう発掘調査

1988.3.31

貝塚市教育委員会

はじめに

貝塚市は北を大阪湾に面し、南を和泉山脈に接し、白砂青松の海岸部と山紫水明の丘陵部との調和のとれた自然環境に恵まれております。歴史的にも古い伝統をもち、市域におきましても、数多くの文化遺産が点在しております。

このような悠久の太古から受け継がれてきた先人の足跡が窺える同市にも、開発の波が徐々に押し寄せ、特に地中に埋蔵された文化財は壊滅の危機にさらされていることは必至であります。

本書は都市計画道路鳥羽畠中線建設工事に先立って実施されました発掘調査の成果を報告するものであります。本調査におきまして僅かではありますが、古代における人々の生活様相の一端を覗視することができましたことは、貝塚市域を含めた泉州地方の歴史を知る上でたいへん貴重な資料になるものと思われます。本書が今後みなさま方のご研究に対する一助となれば幸いかと存じます。

尚、調査ならびに本報告書作成にあたりまして、関係者各位をはじめ地元の方々には多大なるご指導とご協力をいただきましたことを深く感謝いたします。

昭和63年３月

貝塚市教育委員会

教育長　岡　根　和　雄

例　　言

1．　本書は都市計画道路鳥羽畠中線建設に伴なう発掘調査の報告書である。

2．　調査は貝塚市建設部道路課の依頼により、遺構確認調査を昭和61年７月10日より８月30日にかけて実施し、以後本格的調査を昭和61年12月１日より昭和62年１月31日、同年２月１日より３月31日、同年７月１日より９月30日の３期間に分けて実施した。

3．　調査は貝塚市教育委員会社会教育課西岡巖、嘱託池田毅、前川浩一を担当者として実施した。なお作業の実施、本書作成にあたっては、下記の諸氏の協力を得た。

調査補助員	大嶋　毅	岸本由紀子	小林　修	田代自子	中辻澄子
	西野貴也	古谷　務	南　珠美	南　　昇	森脇　徹
	山下展功	山西宏司	山本和枝		

4．　本書作成にかかる編集・執筆は池田が行ない、また各図面・図版の作成は上記諸氏の参加・協力のもと、池田・前川がこれにあたった。

5．　本書における遺物番号は、実測図・表・図版のすべてにわたって統一した。

目　　次

はじめに
例　　言
目　　次（本文目次、図版目次、挿図目次）

第１章　調査に至る経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 3
第３章　調査成果 …… 5
　第１節　基本層序 …… 5
　第２節　検出遺構 …… 6
　第３節　出土遺物 …… 25
第４章　結　　語 …… 46

【図　版　目　次】

図版１　遺　構
　全　景（航空写真）

図版２　遺　構
　全　景（航空写真）

図版３　遺　構
　全　景（航空写真）

図版４　遺　構
　1.　掘立柱建物（ＳＢ－１）及び溝（ＳＤ－３）付近全景
　2.　溝（ＳＤ－３）及び井戸（ＳＥ－２）付近全景

図版５　遺　構
　1.　掘立柱建物（ＳＢ－１）
　2.　井戸（ＳＥ－２）

図版６　遺　構
　1.　溝（ＳＤ－８）付近全景
　2.　溝（ＳＤ－８及びＳＤ－13）付近全景

図版７　遺　構
　1.　溝（ＳＤ－13）遺物出土状況
　2.　溝（ＳＤ－26）遺物出土状況

図版８　遺　構
　1.　掘立柱建物（ＳＢ－２及びＳＢ－３）付近全景
　2.　同　上

図版９　遺　構
1. 掘立柱建物（ＳＢ－２及びＳＢ－３）
2. 掘立柱建物（ＳＢ－４）
図版10　遺　構
1. 土坑（ＳＫ－４）遺物出土状況
2. 同　上
図版11　遺　構
1. 掘立柱建物（ＳＢ－６）付近全景
2. 掘立柱建物（ＳＢ－７）付近全景
図版12　遺　構
1. 掘立柱建物（ＳＢ－７）及び溝（ＳＤ－405）
2. 同　上
図版13　遺　構
1. 土壇付近全景
2. 掘立柱建物（ＳＢ－９）付近全景
図版14　遺　構
1. 掘立柱建物（ＳＢ－９）
2. 柱穴(Pit－104)遺物出土状況
図版15　遺　構
1. 土　壇
2. 古道確認立ち割り部分
図版16　遺　構
1. 掘立柱建物（ＳＢ－８）
2. 溝（ＳＤ－101）
図版17　遺　構
1. 溝（ＳＤ－101)付近全景
2. 同　上
図版18　遺　物
1. 石　鏃
2. 削器・石錐
図版19　遺　物
古墳時代前期・古墳時代後期～飛鳥時代出土遺物
図版20　遺　物
土坑（ＳＫ－４）出土遺物
図版21　遺　物
平安時代前期出土遺物
図版22　遺　物
平安時代前期出土遺物
図版23　遺　物
溝（ＳＤ－８）出土遺物
図版24　遺　物
第３層出土遺物
図版25　遺　物
1. 掘立柱建物（ＳＢ－９）柱穴内出土炭化米
2. 同　上

【挿　図　目　次】

図1.　貝塚市遺跡分布図
図2.　調査地位置図
図3.　遺構配置図　(1)
図4.　遺構配置図　(2)
図5.　遺構配置図　(3)
図6.　遺構配置図　(4)
図7.　土層断面柱状模式図
図8.　掘立柱建物　ＳＢ－１
図9.　掘立柱建物　ＳＢ－２
図10.　掘立柱建物　ＳＢ－３
図11.　土坑ＳＫ－４遺物出土状況及び完掘断面図
図12.　古道確認立ち割り断面図
図13.　石　鏃
図14.　石　鏃
図15.　削器・石錐
図16.　古墳時代前期出土遺物
図17.　古墳時代後期～飛鳥時代出土遺物
図18.　土坑ＳＫ－４出土遺物
図19.　土坑ＳＫ－４出土遺物
図20.　溝ＳＤ－13出土遺物
図21.　平安時代前期出土遺物
図22.　漁撈具
図23.　石帯（丸鞆）
図24.　溝ＳＤ－８出土遺物
図25.　溝ＳＤ－８出土遺物
図26.　第３層出土遺物
表1.　石鏃法量表
表2.　須恵器坏身法量表
表3.　小皿・皿・坏・椀法量表
表4.　和泉地方緑釉陶器・円面硯・石帯出土地名表

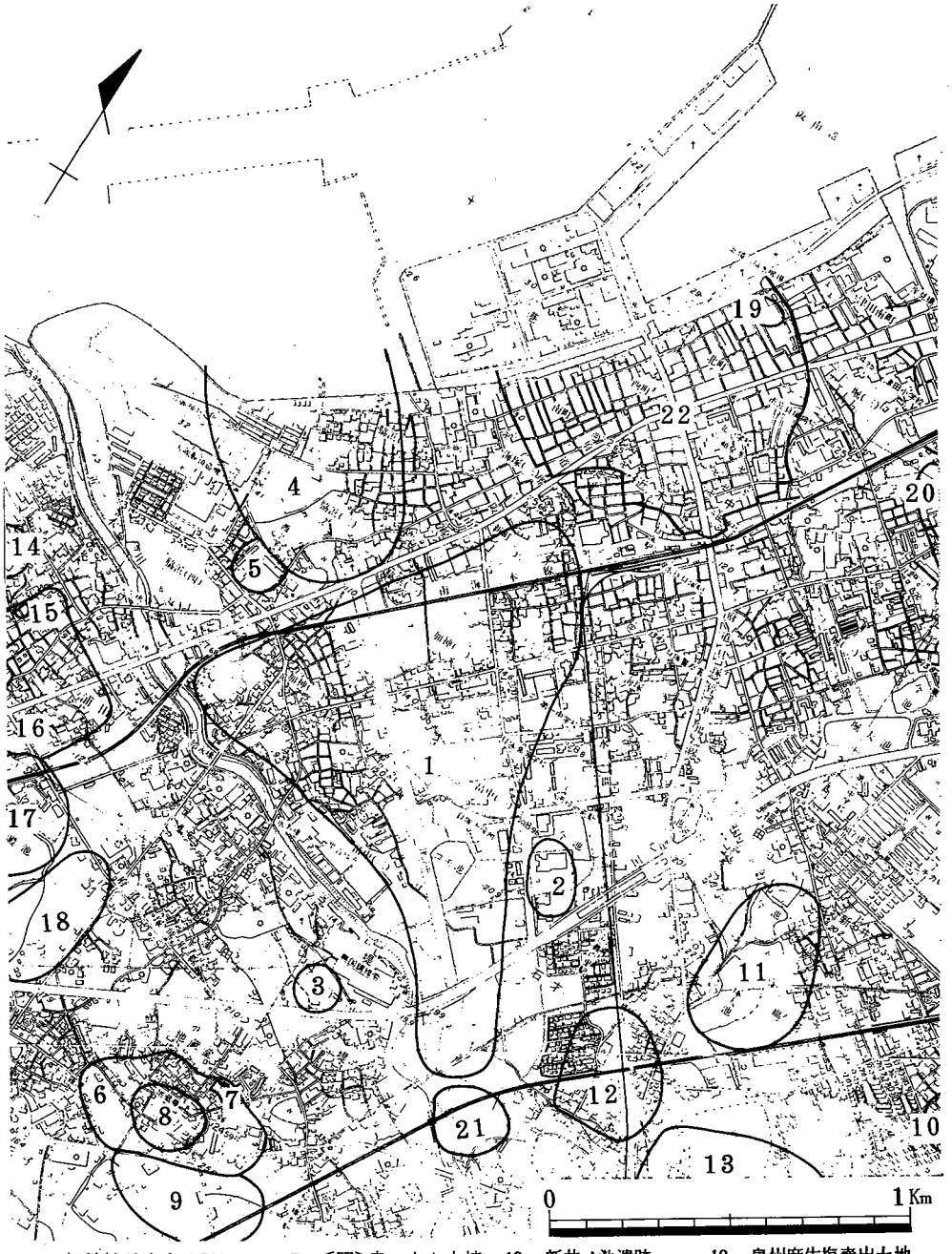
第1章　調査に至る経過

今回、調査を実施したのは、貝塚市畠中に所在する、都市計画道路鳥羽畠中線建設予定地内である。

貝塚市では事業の一環として、市道鳥羽畠中線延長工事が計画されており、当地域が加治神前畠中遺跡の周知範囲内であるということから、道路建設担当の同市建設部道路課より、埋蔵文化財の有無の確認について、協議の申し入れがあった。

同遺跡は以前より、同市教育委員会をはじめ、大阪府教育委員会、㈶大阪文化財センター、㈶大阪府埋蔵文化財協会によって、数回にわたって調査が行なわれており、縄文時代から近世に至る複合遺跡であることが明らかにされている。そのため、遺跡保存への配慮の必要から、調査に関する協議を重ねた上で、昭和61年7月10日より、当地域のほぼ全域にわたって幅約2mの試掘トレンチを設定し、遺構の確認を行ない、同年8月30日に調査を終了した。

試掘調査の結果、古墳時代前期から中世に至るまでの遺構及び遺物を確認したため、当地域のほぼ全域、延べ約3,800㎡を調査するに至った。本調査は南北約300mの細長い調査区域を南部、中央部、北部の3ブロックに分けて行ない、昭和61年12月1日～昭和62年1月31日に南部の約1,000㎡、昭和62年2月1日～3月31日に中央部の約1,300㎡、昭和62年7月1日～9月30日に北部の約1,500㎡を調査した。以後、遺物等の整理作業にあたり、昭和63年3月31日にすべて完了した。



1. 加治神前畠中遺跡
2. 今池遺跡
3. 堤 遺 跡
4. 脇浜遺跡
5. 長楽寺跡
6. 地蔵堂遺跡
7. 〔国〕史　丸山古墳
8. 地蔵堂廃寺
9. 王子遺跡
10. 秦 廃 寺
11. 新井・鳥羽遺跡
12. 石才遺跡
13. 新井ノ池遺跡
14. 沢共同墓地遺跡
15. 沢西出遺跡
16. 沢 城 跡
17. 澱池遺跡
18. 窪田遺跡
19. 泉州麻生塩壺出土地
20. 堀 遺 跡
21. 橋本遺跡
22. 貝塚寺内町遺跡

図1．貝塚市遺跡分布図

第2章　位置と環境

貝塚市は大阪府の南西部に位置し、北西から南東方向の細長い行政区域をもつ。同市は北から海岸平野部、丘陵部、和歌山県との境界をなす和泉山脈中の山間部によって構成されている。

丘陵部縁辺から海岸平野部にかけては、市域中央部を流れる近木川、岸和田市との境界付近を流れる津田川、泉佐野市との境界をなす見出川などによる段丘地形の発達した地域で、これらの河川間の洪積段丘上に、古くから集落が形成され、遺跡も多く確認されている。

加治神前畠中遺跡は近木川右岸の高位段丘上に位置し、海岸部の府道堺阪南線付近から、丘陵部西端のＪＲ阪和線付近に至る東西約1.5 km、南北約１kmの範囲をもつ遺跡である。

今回の調査地は、近木川と津田川に挟まれた洪積台地の南縁に位置し、洪積段丘面が僅かに起伏をもつ微丘陵状を呈している。

当地域及び周辺地域における人間の生活・活動の痕跡は、旧石器時代に既往して認められる。旧石器時代と次の縄文時代に相当する遺跡は現在のところ未確認であるが、王子遺跡、新井ノ池遺跡、少し離れた海岸地山遺跡などで旧石器時代のものと考えられる石器類が出土しており、また、縄文時代のものと考えられる石鏃などの石器類や土器片が、市域数ヶ所の遺跡から出土している。これらは後世の堆積層からの出土で、同時代の相当層からの出土は王子遺跡のもののみであるが、周辺地域における旧石器、縄文時代の遺跡の存在を肯定的にするものと思われる。

弥生時代の遺跡はその数こそ僅少ではあるが、周辺地域における存在は明確にされている。沢遺跡で弥生時代前期の土器を包含する溝状遺構を検出している他、石才南遺跡で弥生時代後期に属する集落の一部を確認している。市域におけるその他の数ヶ所の遺跡においても、土器片や石器類が出土しているが、集落の存在を明らかにするには至っていない。

古墳時代に入り、中央集権が確立、強化され、古墳が盛んに築造されるという政治的・社会的動向は、当地域においても如実に反映している。現在のところ市域唯一の前方後円墳である丸山古墳（全長66m）をはじめ、その周辺に小古墳が確認されている。また、津田川左岸の堀遺跡において、古墳時代前期に属すると考えられる竪穴式住居が４棟確認され、集落の存在が明らかとなっている。

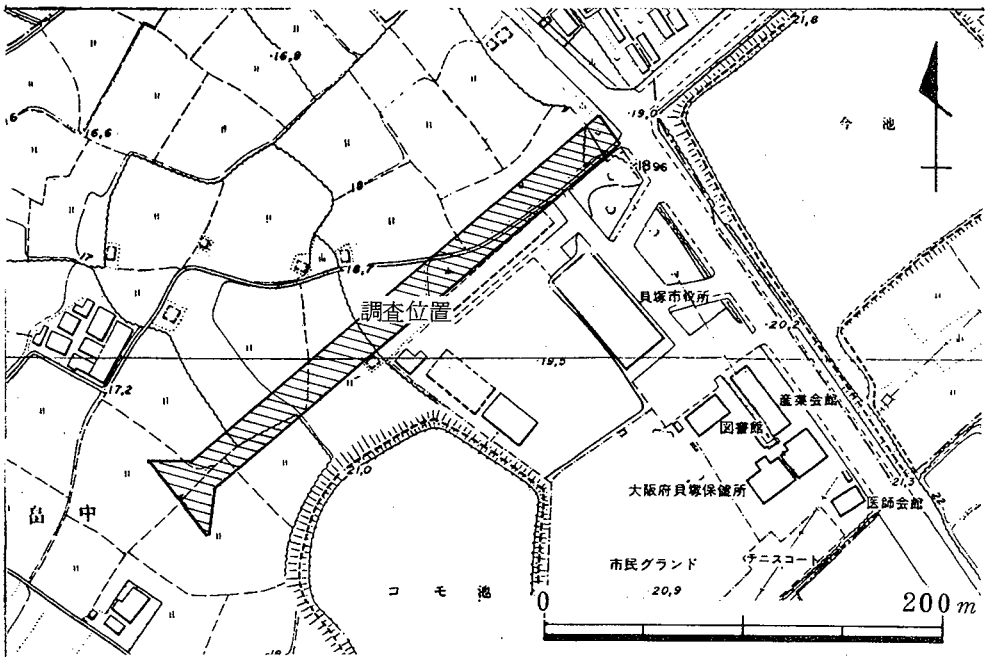


図2. 調査地位置図

奈良時代から平安時代にかけては、熊野街道敷設による交通網の発達、条里制施行による地割の充実によって、集落の立地、形態が大きな変貌を遂げ、寺院等の築造も多く見られるようになる。このような事象から、市域における遺跡数も以前の時期のものよりも増大する。

平安時代後期から中世にかけては、荘園制度の整備化が進み、集落の拡大、あるいは集村化を見るようになる。また、寺社等の築造も増加し、これらの寺院を中心とした町並を形成する過程を近世に向けて辿ることになる。市域における寺内町の発達もその顕著例である。

第3章　調 査 成 果

第1節　基本層序（図7）

当調査地における現地表面から洪積層面（地山面）までの深さは、最深部で0.85m、最浅部で0.2mである。現地表面の標高は、T.P+17.2m～T.P+18.6mで、洪積層面の標高は、T.P+16.6m～T.P+18.1mとなっており、共に調査区中央部のⅧ－Ⅷ′付近が最高部となり、最低部は調査区南端である。

当調査地の堆積層は大別して4層に分層することができる。層序は上層より、第1層、第2層の順とし、各層位ごとに概説しておく。尚、土層断面図は調査区域が細長のため、便宜上、断片的に柱状模式図（図7）として表した。

第1層：現代耕作土で、調査区域のほぼ全域に存在する。層厚は平均して0.15mである。

第2層：淡灰褐色土。調査区域のほぼ全域にわたって0.05～0.15mの層厚で存在する。土器の小細片を僅かに包含するだけで、性格は明らかでないが、染付類などの陶磁器類の包含比率が高いため、近世以降の堆積層と推測される。

第3層：暗黄灰色土。調査区域のほぼ全域に存在し、最厚部で0.5 m、最薄部で0.05mの層厚を測る。前世遺物の混入が若干あるが、瓦器類を中心とした中世遺物を包含する層である。

第4層：紫灰色土と黒茶色土の2種類が確認されている。これらの包含遺物による時期的差異は認められなかった。

紫灰色土はⅣ－Ⅳ′北側からⅤ－Ⅴ′とⅥ－Ⅵ′との中間部付近にかけてのみ存在し、層厚は平均0.05mである。

黒茶色土はⅥ－Ⅵ′南側からⅪ－Ⅺ′付近にまで、一部途切れる区域を有するものの、かなり広範囲にわたって存在する。最厚部で0.25m、最薄部で0.05mの層厚を測る。また、Ⅸ－Ⅸ′より北側では細礫の混入が増加する。

この2種類の層は、多少の前世遺物の混入があるものの、須恵器類の形式から、平安時代前半期の包含層と考えられる。

洪積層面（地山面）は本調査における大半の遺構のベースになる層で、調査区域内においては灰黄色粘土層、濃茶色粘土層、濃灰茶色礫層によって構成されている。

Ⅶ－Ⅶ′以南と、土壇南側は灰黄色粘土層、Ⅷ－Ⅷ′周辺とⅨ－Ⅸ′北側からⅩ－Ⅹ′付近及び調査区域北端部、SD－101 付近の一部は濃茶色粘土層で、残りの地域は濃灰茶色礫

層である。

第２節　検出遺構（図３～６）

調査区域のほぼ全域において、古墳時代前期から近世に至るまでの各種遺構を検出したが、特に調査区域中央部のＶ－Ｖ′からⅧ－Ⅷ′付近にかけて集中している。

検出遺構は掘立柱建物・溝・土坑・井戸・柵列状遺構など、集落に関連するものの他に、土壇、古道なども確認されている。また、性格不明の不整形遺構が比較的多く、これらの検討、解釈が大きな課題点である。

以下、主要遺構のみ概説しておく。

1.　掘立柱建物（ＳＢ）

・ＳＢ－１（図８）

調査区域南端部のＩ－Ｉ′付近で検出した２間×２間の掘立柱建物で、桁行5.2m、梁間3.9ｍを測り、桁行方位は北北西である。柱穴間隔は桁行2.6ｍ、梁間1.9ｍで、柱穴掘形の平面形は隅丸方形と不整楕円形の２種類である。

柱穴規模は大小の差があるものの、径が約0.4～0.5ｍ、深さが約0.3～0.4ｍで、埋土は暗茶色土である。

柱穴内からの出土遺物が全くなく、存在時期は不明である。

・ＳＢ－２（図９）

調査区域のほぼ中央部、Ｖ－Ｖ′北側の遺構集中地域内で検出した２間×１間の掘立柱建物で、桁行4.3m、梁間3.5mを測り、桁行方位はほぼ真北である。柱穴間隔は桁行2.2ｍで、柱穴掘形の平面形は隅丸方形と不整円形の２種類である。柱穴規模は大小の差があるものの、径が約0.45m～0.8m、深さが約0.45m～0.6ｍで、埋土は暗茶灰色土である。

柱穴内からは土師器・須恵器の細片が出土しただけで、時期比定は不可能であるが、第４層の下位で検出したため、平安時代前半期か、それ以前の時期に属する遺構と考えられる。

・ＳＢ－３（図10）

調査区域中央部の遺構集中地域内で、ＳＢ－２と並列して検出された２間×２間の掘立柱建物である。規模は桁行4.3m、梁間3.5mで、桁行方位はほぼ真北である。柱穴間隔は桁行2.2ｍ、梁間1.5ｍ～２ｍで、柱穴掘形の平面形は円形と楕円形の２種類である。柱

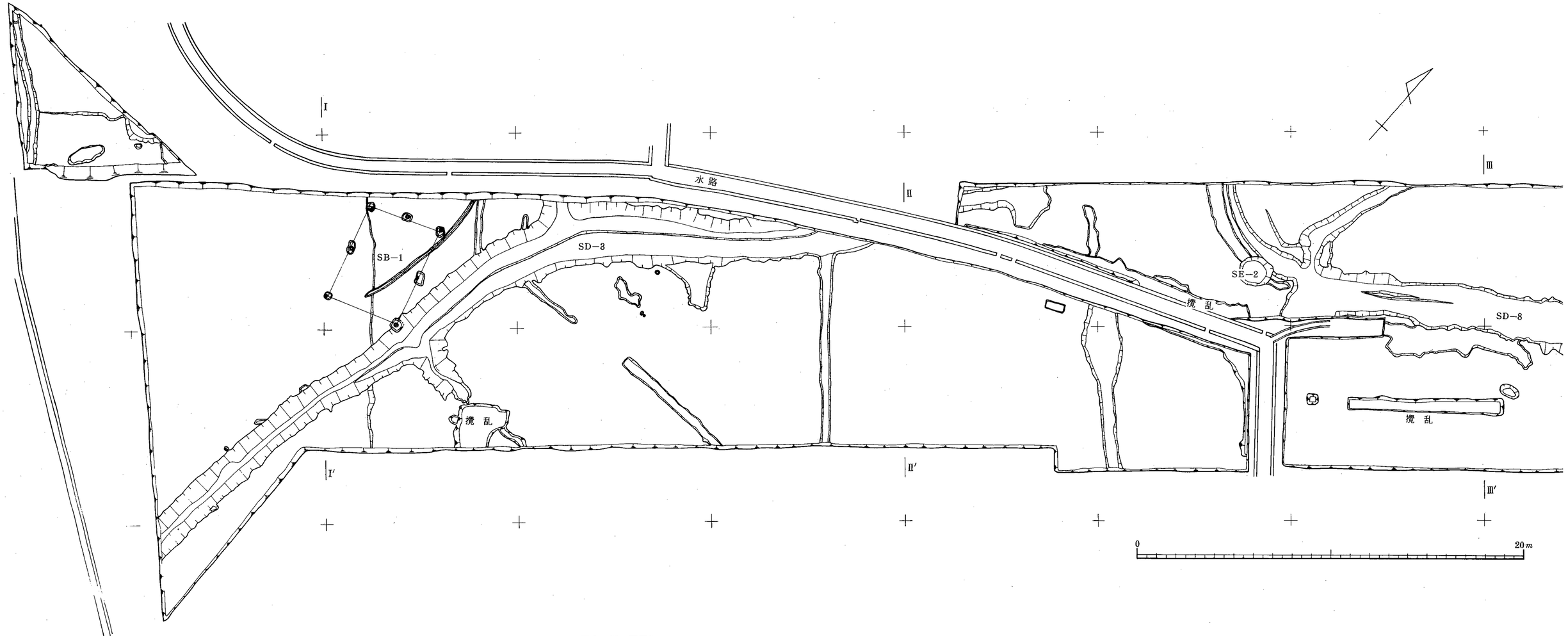


図3．遺構配置図 (1)

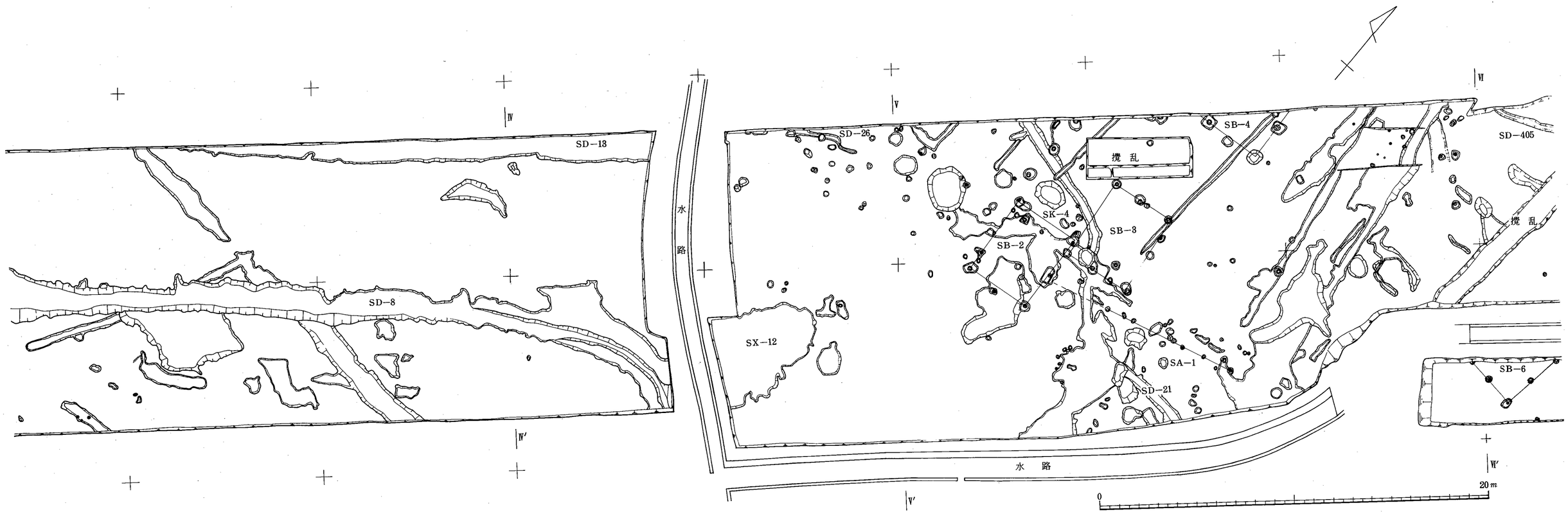

SD−13
SD−8
Ⅳ
Ⅳ′
水路
SX−12
SD−26
Ⅴ
Ⅴ′
SK−4
SB−2
SB−3
攪乱
SB−4
SA−1
SD−21
水路
SD−405
攪乱
SB−6
Ⅵ
Ⅵ′
0
20m

図4．遺構配置図 (2)

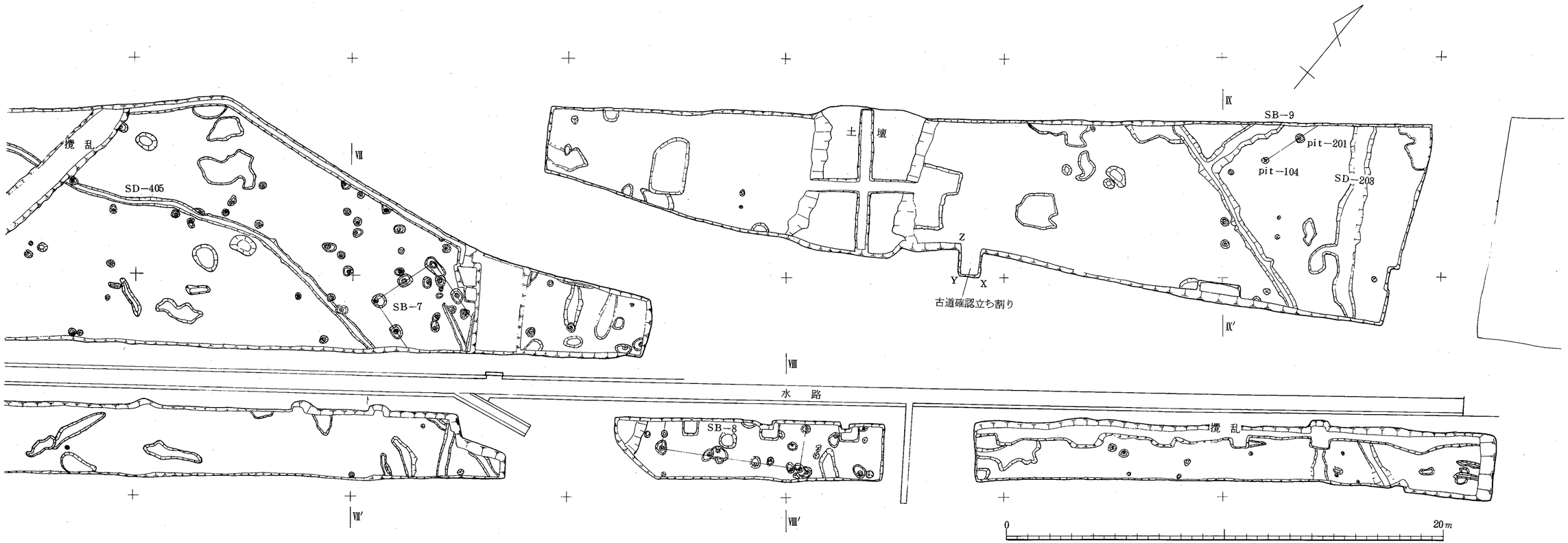

攪 乱
SD−405
Ⅶ
SB−7
土 壇
Z
Y
X
古道確認立ち割り
Ⅸ
SB−9
pit−201
pit−104
SD−203
Ⅸ′
Ⅷ
水 路
SB−8
攪 乱
Ⅶ′
Ⅷ′
0
20m

図５．遺構配置図 (3)

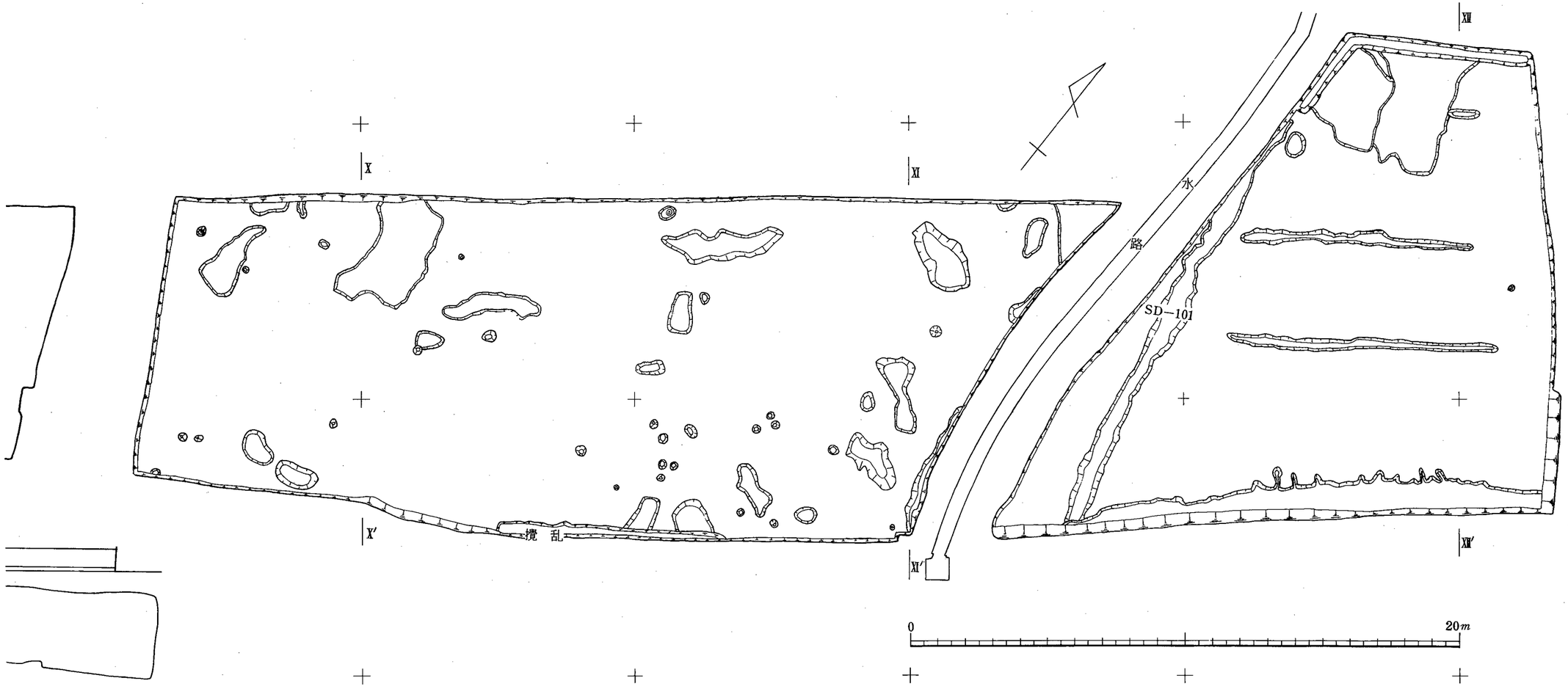


図6．遺構配置図 (4)

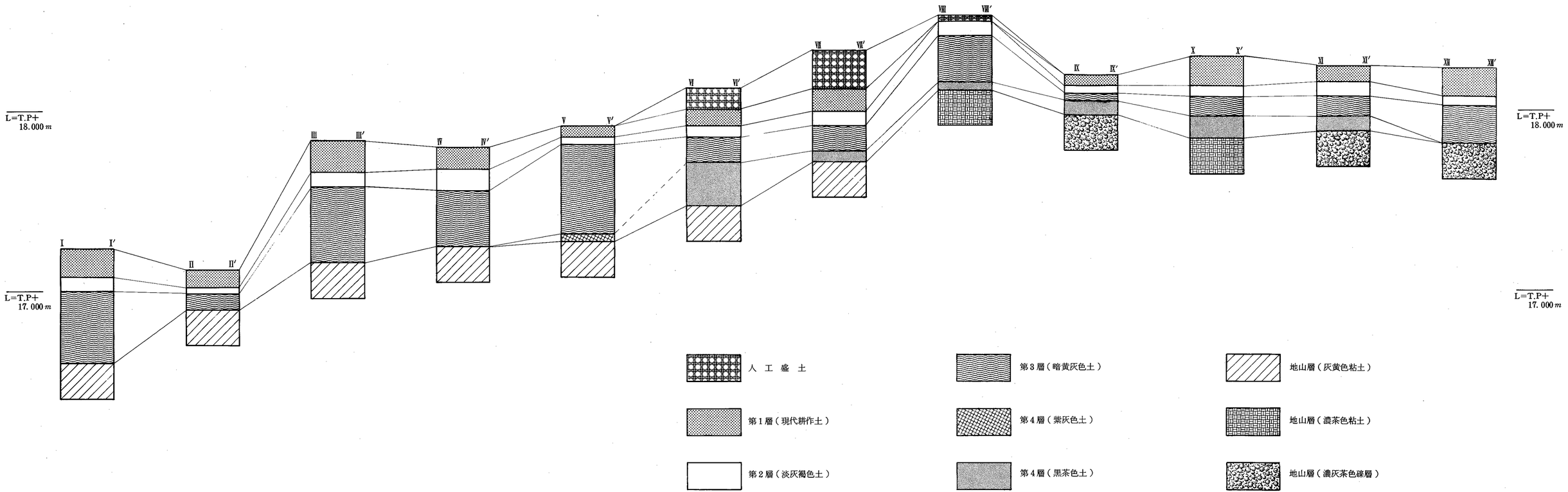


図7．土層断面柱状模式図

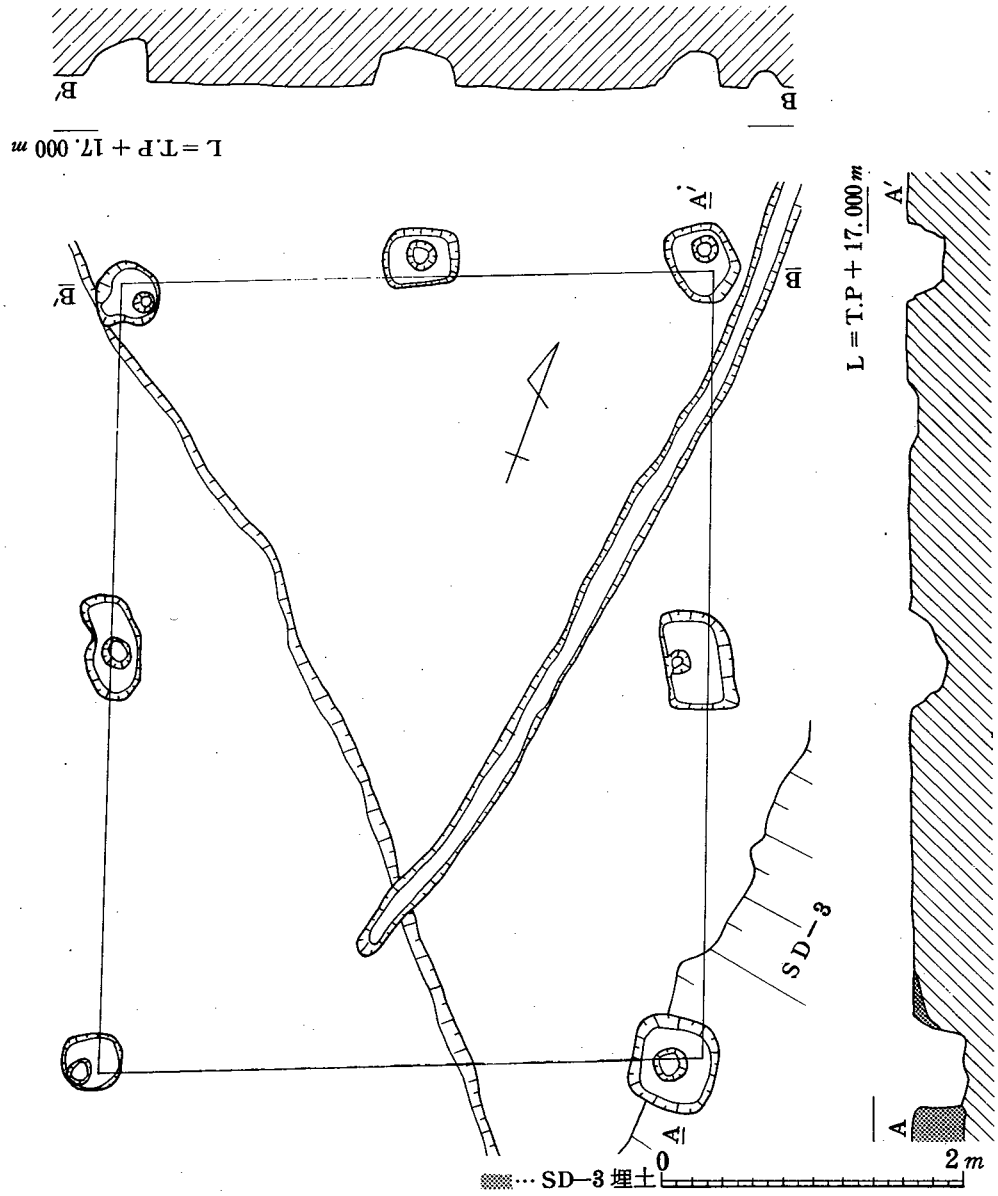


図8.　掘立柱建物ＳＢ－８

穴規模は径が約0.４～0.65m、深さが約0.２～0.３mで、埋土は暗黄灰色土である。

柱穴内からは須恵器坏身や土師器甕などが出土しているが、細片ながら第４層の包含遺物と同一形態を呈し、この建物が平安時代前半期に属することを裏付けている。

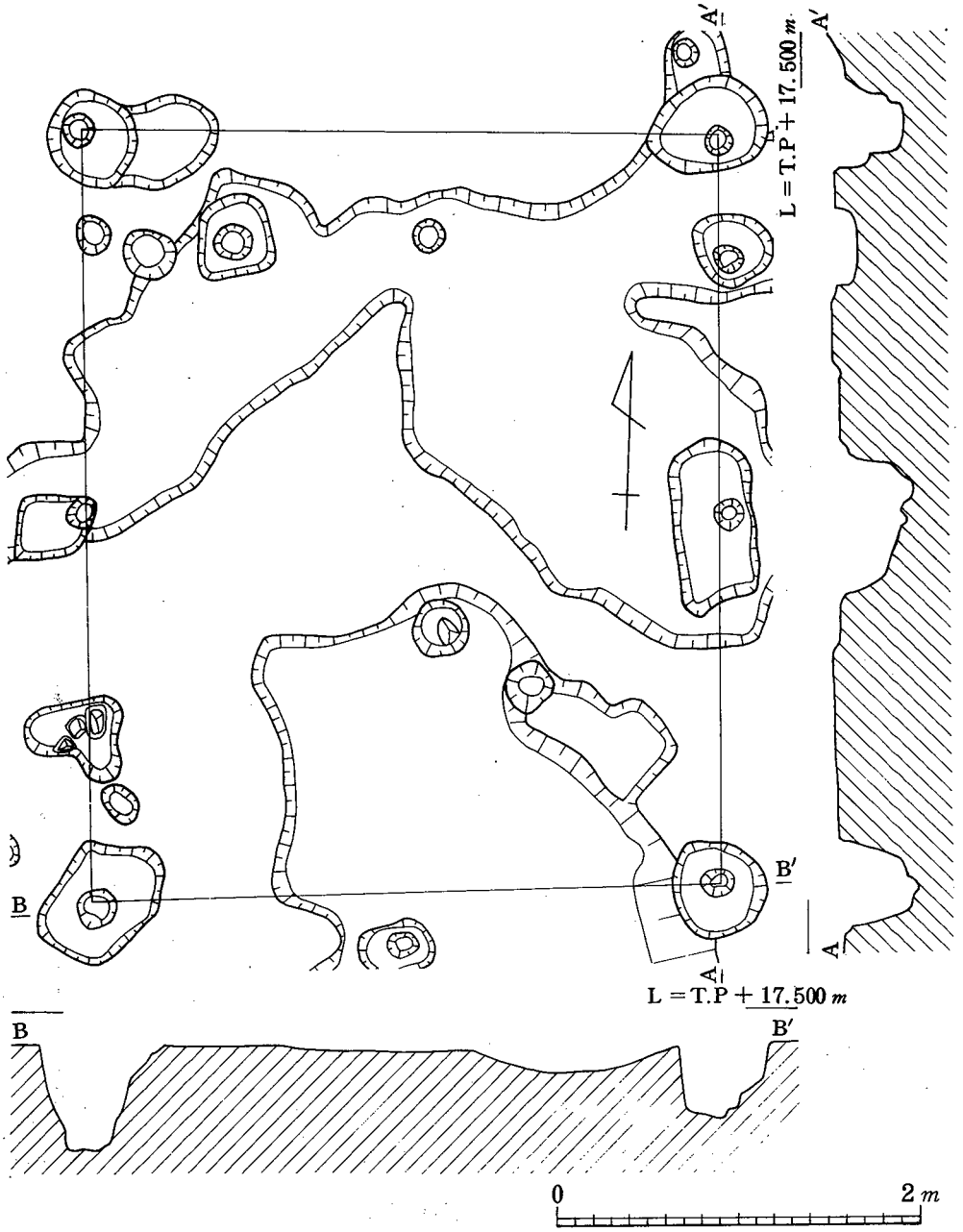


図9. 掘立柱建物ＳＢ－２

• ＳＢ－４

調査区域のほぼ中央部、 Ⅵ－Ⅵ′南側の西壁面近くで検出した掘立柱建物で、建物の大半が壁面内に続くため、規模は不明である。柱穴は３ヶ所のみ検出しており、柱穴間隔は

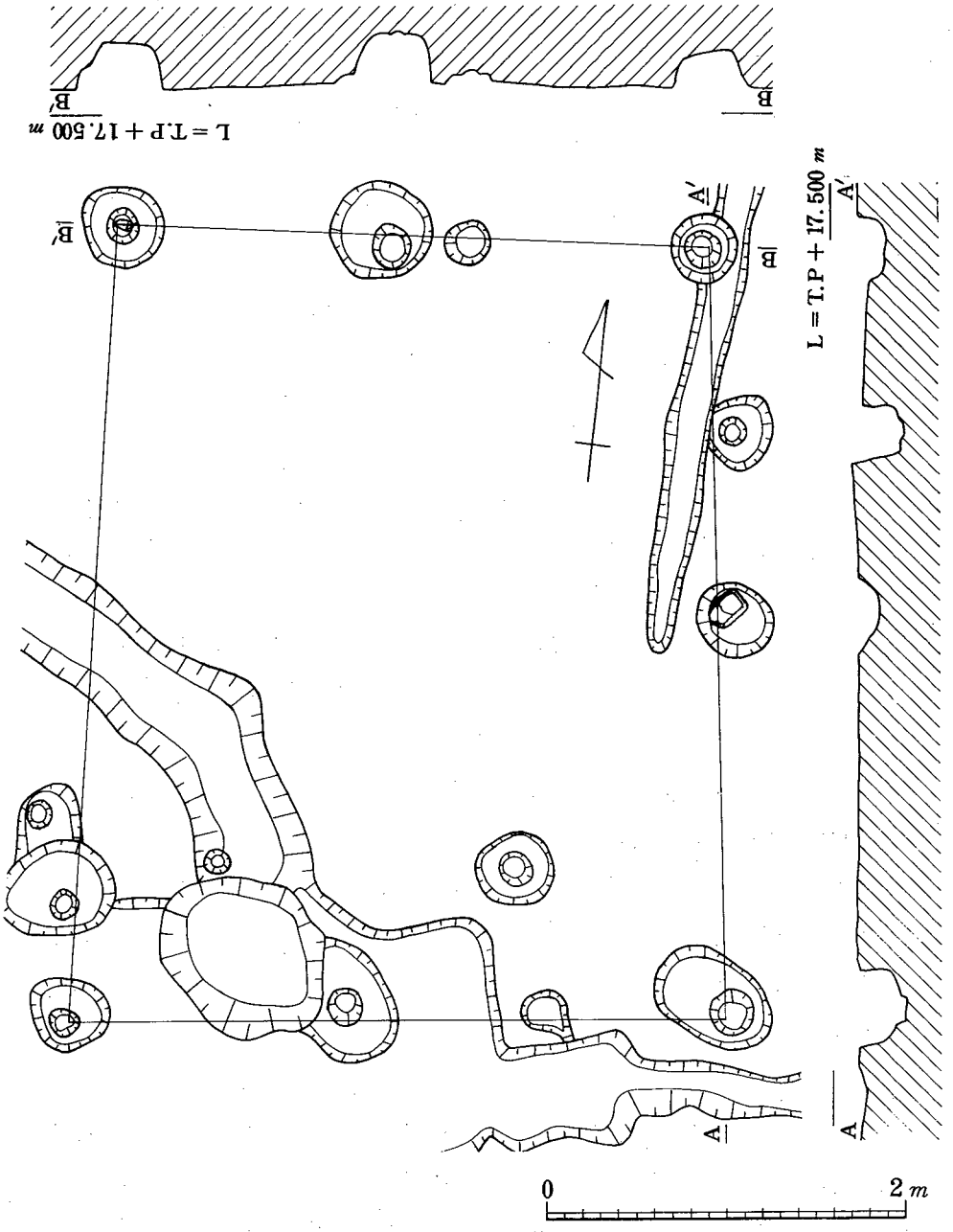


図10. 掘立柱建物ＳＢ－３

東西方向が３ｍ、南北方向が1.９ ｍで、柱穴掘形の平面形は隅丸正方形である。柱穴規模は一辺が約0.７ ｍ、深さが約0.25ｍで、埋土は黒茶色土である。

柱穴内より第４層包含遺物と同時期と考えられる土師器甕の体部片が出土しており、この建物を平安時代前半期に比定することができる。

・ＳＢ－６

調査区域中央部のⅥ－Ⅵ′付近で検出した掘立柱建物で、建物自体が現水路方向に延びるため、規模は不明である。柱穴は５ヶ所のみ検出しており、柱穴間隔は東西方向が1.5m、南北方向が1.7ｍで、柱穴掘形の平面形は円形と不整楕円形の２種類である。柱穴規模は大小の差はあるものの、径が約0.3～0.55m、深さが約0.15mで、埋土は灰褐色土である。

柱穴内より土師器細片が出土したのみで、建物の存在時期は不明である。

・ＳＢ－７

調査区域中央部のⅦ－Ⅶ′北側で検出した掘立柱建物で、建物自体が現水路方向に延びるため、規模は不明である。柱穴は５ヶ所のみ検出しており、柱穴間隔は東西方向が1.7m、南北方向が1.6ｍで、柱穴掘形の平面形は円形と楕円形の２種類である。柱穴規模は大小の差はあるものの、径が約0.5～1.1ｍで、深さが約0.2～0.3ｍで、埋土は黒褐色土である。

柱穴内より細片ではあるが、土師器片、黒色土器片、須恵器片が出土しており、また、第４層下位での遺構検出ということから、時期比定の目安になるものと思われる。

・ＳＢ－８

調査区域中央部のⅧ－Ⅷ′付近で検出した掘立柱建物で、建物自体が現水路方向に延びるため、規模は不明である。柱穴は５ヶ所のみ検出しており、柱穴間隔は東西方向が2.15m、南北方向が1.9ｍで、柱穴掘形の平面形は不整楕円形である。柱穴規模は大小の差はあるものの、径が約0.4～0.6ｍ、深さが約0.1～0.4ｍで、埋土は灰褐色土である。

柱穴内より土師器皿、黒色土器椀などが出土しており、これらは平安時代前半期の土器形態の特徴をもつ。

・ＳＢ－９

調査区域北部のⅨ－Ⅸ′付近で検出した掘立柱建物で、建物の大半が西側壁面内に存在すると思われ、規模は不明である。柱穴は２ヶ所（Pit-104 、Pit-201)のみ検出しており、柱穴間隔は南北方向に1.8ｍで、柱穴掘形の平面形は不整円形である。柱穴規模は径が約0.3～0.4ｍ、深さが約0.25mで、埋土は黒褐色土である。

Pit-104 から古墳時代前期に比定しうる高坏、小型壷が各１点出土した他、Pit-104 、Pit-201 の両柱穴の柱あたり内より炭化米が塊状になって出土しており、建物の性格裏付けに関与しうる遺物だと言えよう。

2. 溝（ＳＤ）

・ＳＤ－３

調査区域南端から北東方向に延び、Ⅱ－Ⅱ′付近の調査区域西側壁面内に続く大規模な溝である。規模は検出総延長約50m、幅約1.５～３ｍ、深さ約0.６ｍで、埋土は上層が黒茶色土、下層が茶灰色粗砂である。断面はＵ字状を呈し、二段落ち込みとなっている。また、派生部分を有するが、その性格については不明である。

溝内からは上層、下層共に土師器の小細片が出土したのみで、遺物による時期比定は不可能である。

・ＳＤ－８

調査区域中央部、Ⅳ－Ⅳ′付近の東側壁面内から南西方向に延び、Ⅱ－Ⅱ′とⅢ－Ⅲ′の中間部付近の西側壁面内に続く溝である。第３層を遺構面ベースとし、出土遺物の時期的範囲が広く、溝内の堆積砂層が複雑なことから、長期間にわたって営まれた溝と考えられる。地山面における検出規模は、総延長約55m、幅約２ｍ、深さ約0.15m～0.４ｍで、埋土は上層位が暗茶灰色砂質土で、下層位が淡茶灰色細砂である。

溝内からは前世遺物を若干含むものの、中世から近世に至るまでの遺物を確認しているが、時期的範囲が広く、これらの遺物による詳細な時期比定は困難である。

・ＳＤ－１３

調査区中央部、Ⅳ－Ⅳ′付近の西側壁面際で検出した溝状遺構で、西側肩部を検出し得なかったので規模については不明である。埋土は第４層と同じ紫灰色土で、出土遺物は須恵器坏、坏蓋などが確認されているが、第４層の包含遺物とほぼ同時期のものと考えられる。

・ＳＤ－２１

調査区域中央部、遺構集中地域のＶ－Ｖ′北側をＳ字状に蛇行、横断する溝である。規模は検出総延長約17m、幅約0.６ｍ、深さ約0.２ｍで、断面はＵ字状を呈し、埋土は濃茶灰色土である。

溝内からは土師器甕・須恵器坏蓋などの遺物が出土しており、型式的に７世紀初頭のものと考えられる。

・ＳＤ－２６

調査区域中央部のＶ－Ｖ′南側で検出したＳ字状を呈す溝状遺構である。規模は検出総延長約3.５ｍ、幅約0.３ｍ、深さ約0.１ｍで、断面は浅いＵ字状を呈し、埋土は第４層と

同じ紫灰色土である。

溝内からは第４層の包含遺物と同時期とみられる須恵器坏身が出土しており、この溝を平安時代前半期に比定しうるものである。

・ＳＤ－４０５

調査区域中央部、遺構集中地域内のⅦ－Ⅶ′付近の東側壁面から、東西方向にＳ字状を呈し、Ⅵ－Ⅵ′付近の西側壁面に延びる溝である。規模は検出総延長約30m、幅約０.４ｍ、深さ約0.15mで、埋土は茶褐色土である。

溝内からは古墳時代前期に属すると考えられる高坏脚部が出土している。

・ＳＤ－２０３

調査区域北部のⅨ－Ⅸ′北側を横切る溝である。規模は検出総延長約16m、幅約１ｍ、深さ約0.15mで、埋土は黒褐色土である。

溝内からは古墳時代後期に属すると考えられる須恵器坏身が出土している。

・ＳＤ－１０１

調査区北端部のⅪ－Ⅺ′北側で検出したほぼ南北方向に走る溝である。規模は検出総延長約16.5m、幅約１ｍ、深さ約０.２ｍで、埋土は黒褐色土である。

溝内からは古墳時代前期に属すると考えられる壷や高坏脚部などが出土している。

3.　土坑（ＳＫ）

・ＳＫ－４（図11）

調査区中央部、遺構集中地域内のＶ－Ｖ′北側で検出された平面形が不整楕円形を呈す土坑状遺構である。規模は長径1.６ ｍ、短径1.２ ｍ、深さ0.３ ｍで長軸方位は西北西である。断面は扁平な逆台形状を呈し、埋土は暗茶褐色土である。

土坑内からは須恵器坏、土師器甕などの日常雑器類が恰も投棄されたような形で数多く出土している。

4.　井戸（ＳＥ）

・ＳＥ－２

調査区域中央部のⅢ－Ⅲ′南側で検出した素掘りの円形井戸である。規模は直径１.６ｍ、深さは湧水が著しいため未確認である。壁面は垂直かやや外側に抉れるような形状を呈し、埋土は上層が濃茶灰色細砂、下層が暗灰色礫層となっている。第３層を遺構面ベースとし、

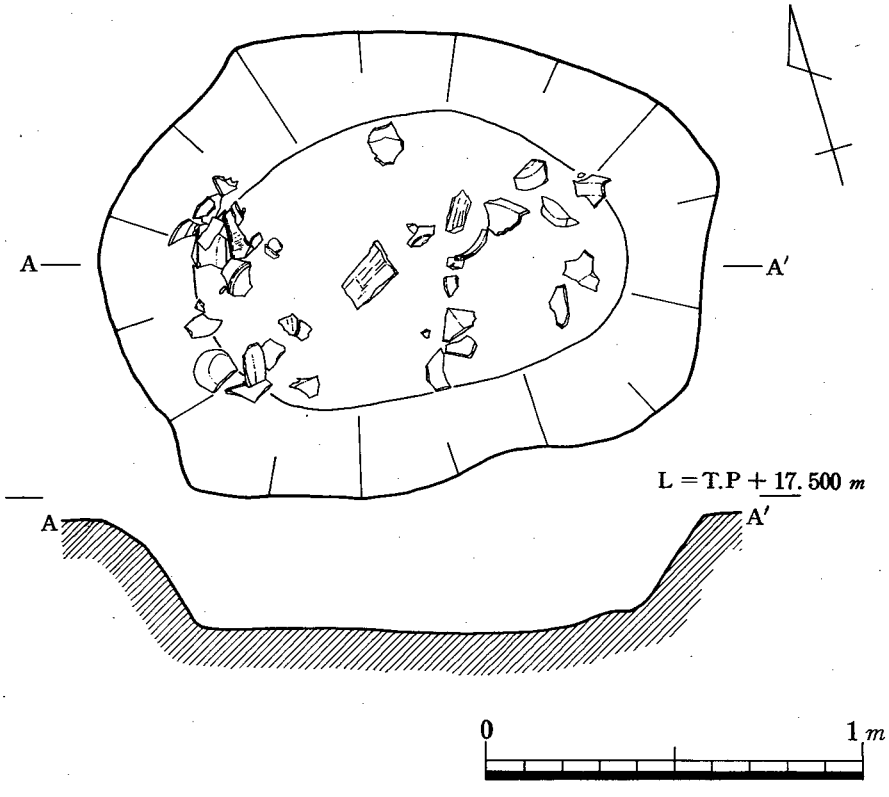


図11. 土坑ＳＫ－４遺物出土状況及び完掘断面図

上層より染付などの陶磁器類が出土しているため、近世以降の所産であると考えられる。

5. 柵列状遺構（ＳＡ）

・ＳＡ－１

調査区域中央部、 遺構集中地域のⅥ－Ⅵ′南側で検出した延長方位が東北東から西南西の柵列状遺構で、規模は検出延長約７ｍ、柱穴間隔1.３～1.５ｍである。柱穴掘形の平面形は不整円形で、柱穴規模は径約0.２～0.35m、深さ約0.15mを測り、埋土は灰褐色土である。

数ヶ所の柱穴から土師器の細片を検出したのみで時期比定は困難であるが、位置と方向性から、ＳＢ－３、ＳＢ－４などの遺構との関連が窺える。

6. 性格不明遺構（ＳＸ）

・ＳＸ－１２

調査区域中央部のＶ－Ｖ′南側で検出した不整形落ち込み状遺構である。遺構自体が現水路方向に延びるための規模については不明である。埋土は第４層と同じ紫灰色土で、出土遺物の形態から、第４層とほぼ同時期に比定できる。

7. 土　　壇

調査区域中央部のⅧ－Ⅷ′付近に存在する方形壇状遺構である。後世の撹乱により、築造時の原型は不明であるが、残存規模が長辺が約８ｍ、短辺約５ｍ、高さ約0.4 ｍで、平面長方形の整然としたものである。暗茶灰色礫層と暗茶褐色礫層による版築状の締りのある構築で、これらの封土は周辺の洪積層土を依用したと考えられる。封土中に遺物はなく、時期及び性格は不明である。

8. 古　　道（図12）

調査区域内を斜め横切る幅約３ｍの現代道路が、かなり古くから存在していたという口伝に基づき、現道路側辺に立ち割り部分を設け、土層断面による観察を行なった。

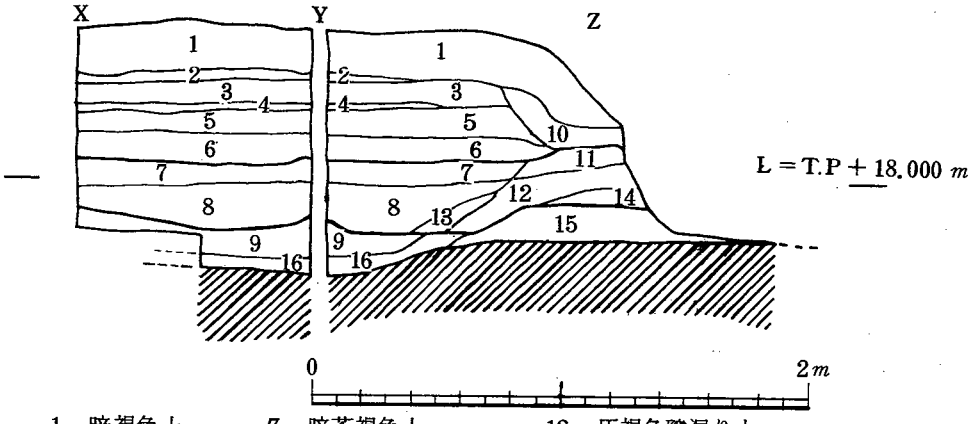
その結果、現道路面から地山面までの間で、２時期にわたる古道が確認された。新旧による分類上、古い方からⅠ期、Ⅱ期と呼称することにする。

Ⅰ期の古道は洪積層土を依用したと考えられる幅約0.７ｍ、高さ約0.２ｍの塁状の土堤を具備したもので、土堤頂部の標高がＴ．Ｐ＋17.9ｍで、道路面はそれより0.05ｍ低くなっている。道路中央部分の洪積層（地山層）が掘り窪めたようになっており、掘り出した洪積層土を土堤築成に用いた後、窪みに精製土を入れ、整地した築造手順が推測できる。

道路部分最下層の暗灰色礫混り粘質土中より黒色土器（Ａ類）の小細片が出土しており、築造時期が黒色土器存在期か、それ以降と推定される。

Ⅱ期の古道の築造方法もⅠ期のものとほぼ同じと考えられ、土堤頂部の標高がＴ．Ｐ ＋18.150ｍで、道路面はそれより0.05ｍ低くなっている。

道路面をなす暗茶褐色土中より瓦器の小細片が出土しており、瓦器存在期か、それ以降に構築されたと推定される。



1. 暗褐色土
2. 淡黄褐色土
3. 淡灰褐色土
4. 茶褐色土
5. 淡灰褐色土
6. 暗灰褐色土
7. 暗茶褐色土
8. 暗茶褐色粘質土
9. 灰褐色粘質土
10. 淡黄褐色土
11. 淡黄褐色礫混り土
12. 灰褐色礫混り土
13. 淡灰褐色土
14. 黒褐色細礫混り粘質土
15. 茶褐色礫混り粘質土
16. 暗灰色礫混り粘質土

図12. 古道確認立ち割り断面図

第3節　出　土　遺　物

本調査で出土した遺物は、量的にはそれほど多くなく、特に遺構埋土内よりの出土遺物が少ない。包含層（第3・4層）遺物の出土傾向は、調査区域南端部から中央部にかけては密で、北部はやや疎である。

本調査で得られた遺物は、旧石器時代から近世に及ぶ時期的範囲をもつが、主として古墳時代前期から中世のものが大部分をしめ、調査区域内で検出した遺構の属する時期とほぼ合致する。しかしながら、小細片の遺物が大半を占め、図示し得たものは比較的少なかった。

遺構埋土内の出土遺物は、各時期における検出遺構の数に比例する傾向を示し、平安時代前期に属する遺物が最も多く検出されている。

以下、時代毎に主要な遺物を概説しておく。

1. 旧 石 器 時 代

本調査においては同時代に属する遺構は検出されなかったが、当初より洪積層（地山）として扱ってきた灰黄色粘土層、濃灰茶色礫層内よりサヌカイト小剥片を検出した。

この資料のみでは同時代の人間活動の直接的裏付けにはならないが、周辺地域における同時期のものと考えられる石器類の出土などから、当地域及びその周辺での同時代におけ

る人間活動存在の可能性を留意しておきたい。

2. 縄文・弥生時代（図13～15）

旧石器時代と同様に本調査においては、同時代に属する遺構の検出はみられなかったが、後世の遺構・包含層中より、同時代のものと考えられる石器類が数点出土した。これらは当地域における同時代の人間の生業活動を示唆するに十分な遺物であると言えよう。

・石　鏃（1～8）

すべて平安時代以降の遺構・包含層中より出土しており、いずれも材質はサヌカイトで色調は黒灰色である。個々の法量については表1に示す通りである。

いずれも無茎で、平面形が三角形又は細長三角形を呈す。1～6は凹基、7・8は平基の形式で、凹基鏃のうち逆刺部分の明瞭なものは1～4である。

調整方法はいずれも、深形あるいは浅形の両面細部調整を行なった後、縁辺部位に極浅形両面細部調整により整形され、いずれの石鏃も基辺や側辺の一部に階段状細部調整が施されている。

・削　器（9）

半月形を呈し、弧状の刃部をもつサイドスクレイパーである。材質はサヌカイト、色調は黒灰色を呈し、法量は最大長6.6 m、最大幅3.5 cm、最大厚0.7 cmである。

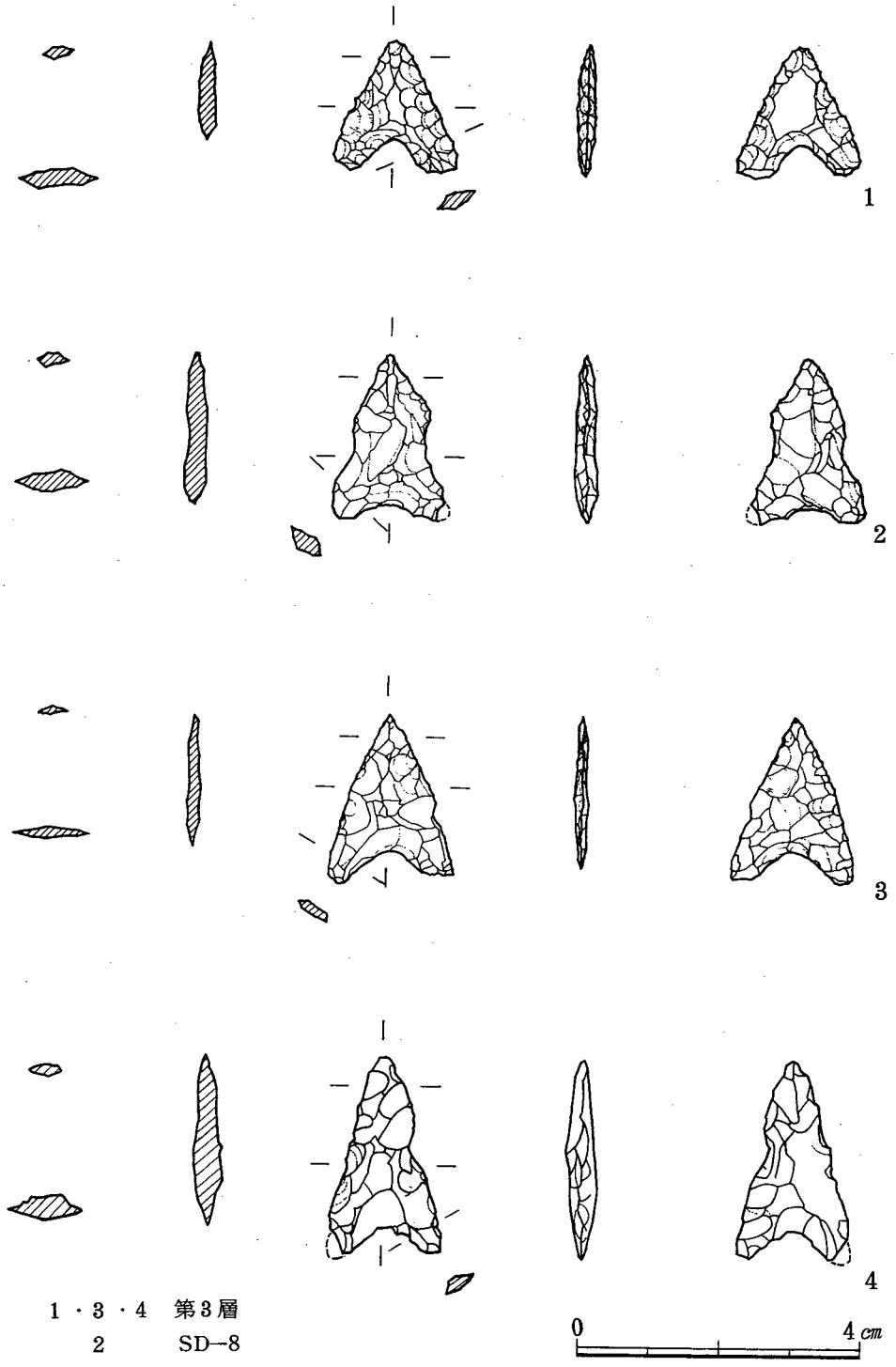
調整方法は深形の両面細部調整を行なった後、刃部及び背部に連続的な極浅形細部調整により整形されている。

・石　錐（10）

錐端部欠損。頭部は不整な扇状を呈し、断面は菱形である。錐部は細長の逆三角形状を呈し、断面は不整な菱形である。材質はサヌカイト、色調は黒灰色を呈し、法量は残存長

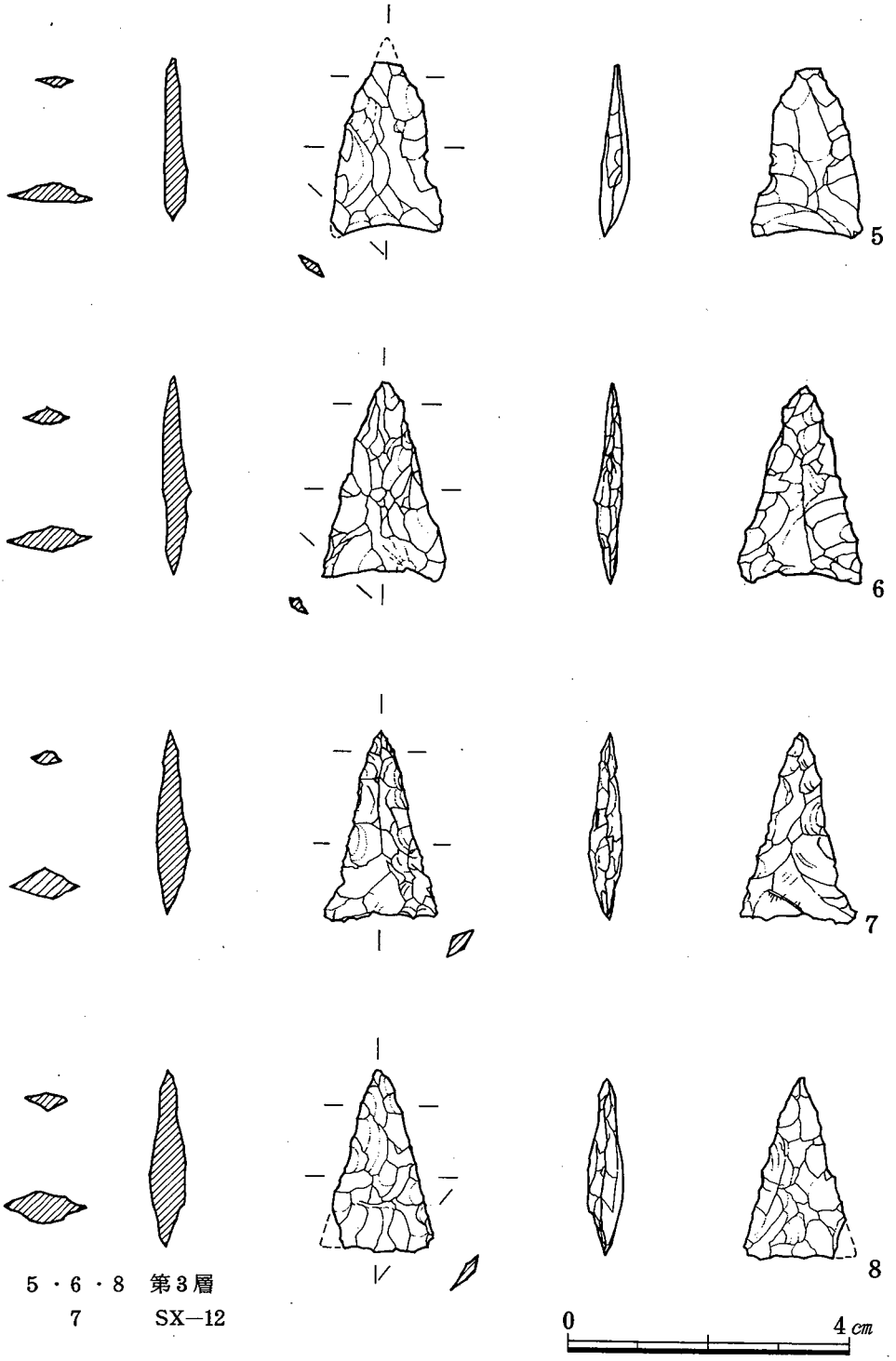
No.	最大長（残存長）	最大幅（残存幅）	最大厚	No.	最大長（残存長）	最大幅（残存幅）	最大厚
1	1.85	1.75	0.25	5	2.45	1.6	0.3
2	2.3	1.6	0.3	6	2.8	1.75	0.4
3	2.35	1.75	0.2	7	2.7	1.6	0.5
4	2.75	1.6	0.35	8	2.55	1.45	0.5

表1．石鏃法量表（単位cm）



1・3・4　第3層
2　　SD−8

図13. 石　　鏃



5・6・8　第3層
7　　SX—12

図14. 石　　鏃

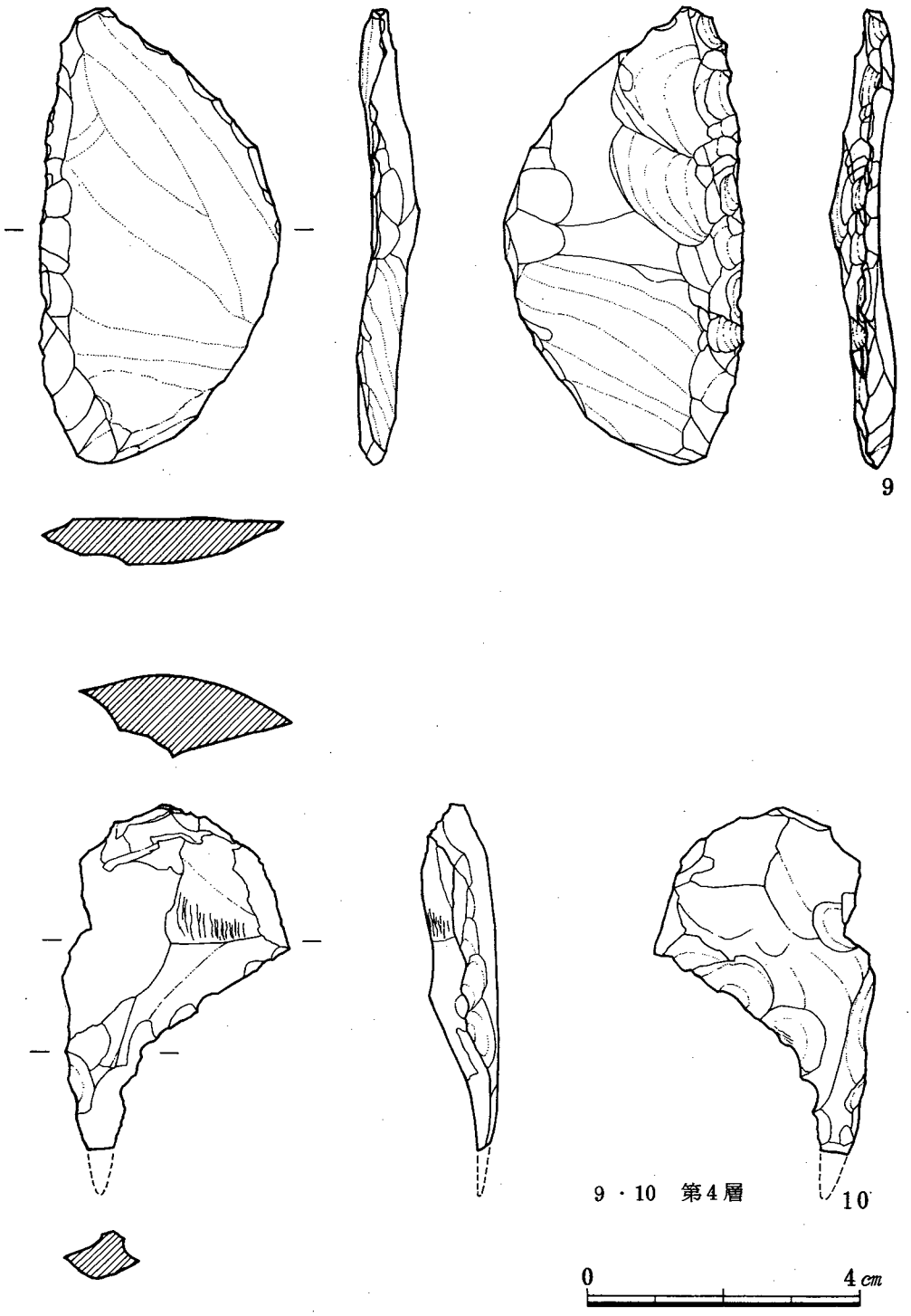


図15. 削 器・石 錐

5.0 cm、最大幅3.25cm、最大厚1.0 cm、錐部残存長1.7 cm、錐径約0.7 cmである。

調整方法は深形の両面細部調整を行なった後、縁辺部位に浅形又は極浅形細部調整により整形されており、頭部の一部に階段状細部調整が施されている。

3. 古墳時代前期（図16）

本調査においては、ＳＢ－９、ＳＤ－101 、ＳＤ－405 などの同時期に属すると考えられる遺構が検出されており、これらの遺構や後世の包含層中より土師器高坏、壺などの遺物が出土している。また、ＳＢ－９の柱穴（Pit-104 、Pit-201)内より土器類と共に炭化米が塊状となって出土した。

・高　坏（11～13）

11・12は脚部の柱部から裾部上位のみ、13は坏部のみの残存である。11・12は共に細身を呈し、柱部中位に膨みをもつ。色調は共に内外面淡茶色で、残存高はそれぞれ6.2 cm、7.6 cmを測る。調整は裾部が横方向のナデ、柱部外面が縦方向のナデで、柱部内面は粗雑なナデで一部にヘラ工具の当り痕を有する。尚、11は摩滅の為、調整がやや不明瞭である。

13の形状は口縁部が坏底部から外上方に外反しながら立ち上がり、端部は鋭い。また、口縁部と坏底部との境に稜を有す。

色調は内外面暗赤褐色で、復元口径22.2cm、残存高7.3 cmを測る。調整は内外面剥離が著しいため不明である。

・小型壺（14）

底部から体部中位にかけてのみ残存しており、形状は底部がほぼ平坦で、体部が底部から外上方に内弯しながら立ち上がる。

色調は内外面黄褐色で、残存高は4.0 cmを測る。調整は内外面摩滅が著しいため不明である。

・壺（15）

口縁部から頸部上位にかけてのみ残存しており、形状は口縁部が頸部から外上方に外反しながら立ち上がり、端部は内側に屈曲して更に外上方に外反しながら延びる。

色調は内外面淡茶色で、復元口径22.6cm、残存高5.4 cm、浮文径1.6 cmを測る。調整は内外面横方向のナデであるが、大部分が剥離のため不明瞭である。また、技法の特徴としては口縁端部外面に粗雑な櫛描波状文を施した後、その上に円形浮文が付されており、浮文は複数付されていたと考えられるが、１つのみ残存している。

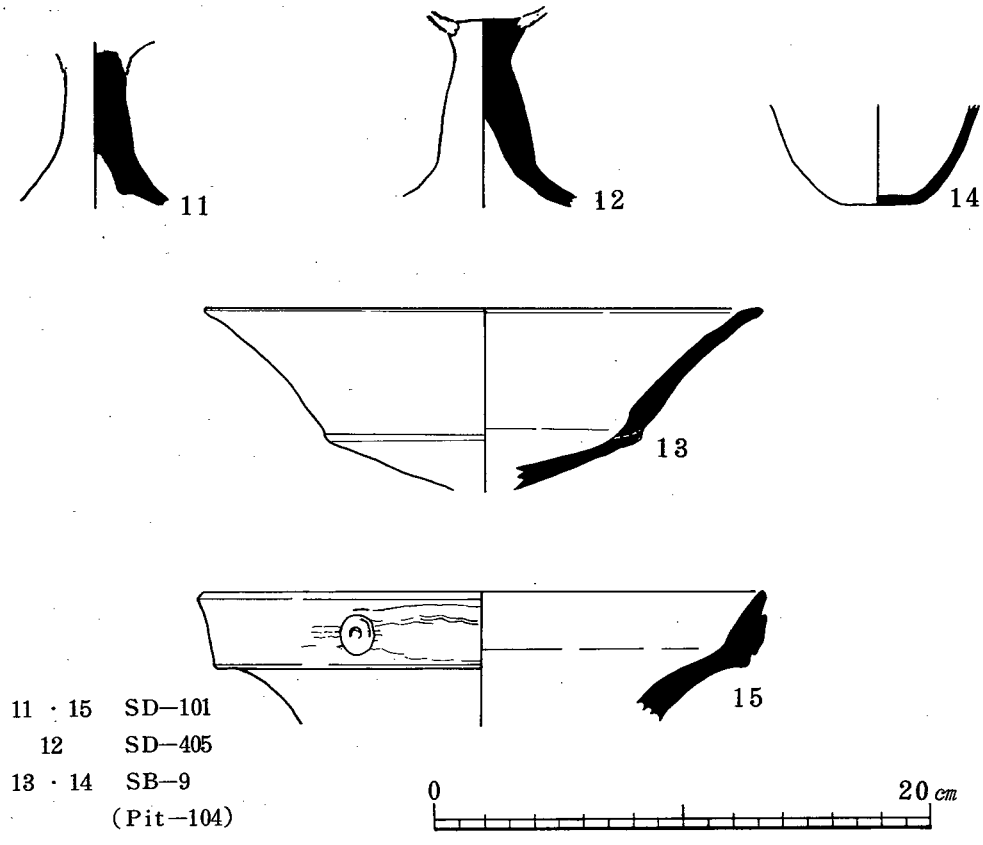


図16. 古墳時代前期出土遺物

4. 古墳時代後期〜飛鳥時代（図17）

本調査においては、ＳＤ－21、ＳＤ－203 などの同時期に属すると考えられる遺構が検出されており、これらの遺構や後世の包含層中より土師器甕・須恵器坏蓋・坏身などの遺物が出土している。

・須恵器坏蓋（16・17）

17は完形、16もほぼ完形に近い状態で出土した。共に比較的小型のタイプで、16の形状は天井部が多少の凹凸を有するもののほぼ平坦で、口縁部は天井部から外下方に内弯しながら下がり、端部は内側に屈曲する。17は天井部がほぼ平坦で、中央部に直径1.7 cm、高さ0.9 cmの宝珠様つまみを付す。口縁部は天井部から外下方に内弯しながら下がり、端部は外反し、やや厚い。口縁端部内面にやや内傾する短いかえりを有し、かえりの端部は鋭い。

色調は共に内外面濃灰色で、法量は16が口径10.4cm、器高3.1 cmで、17は口径10.5cm、

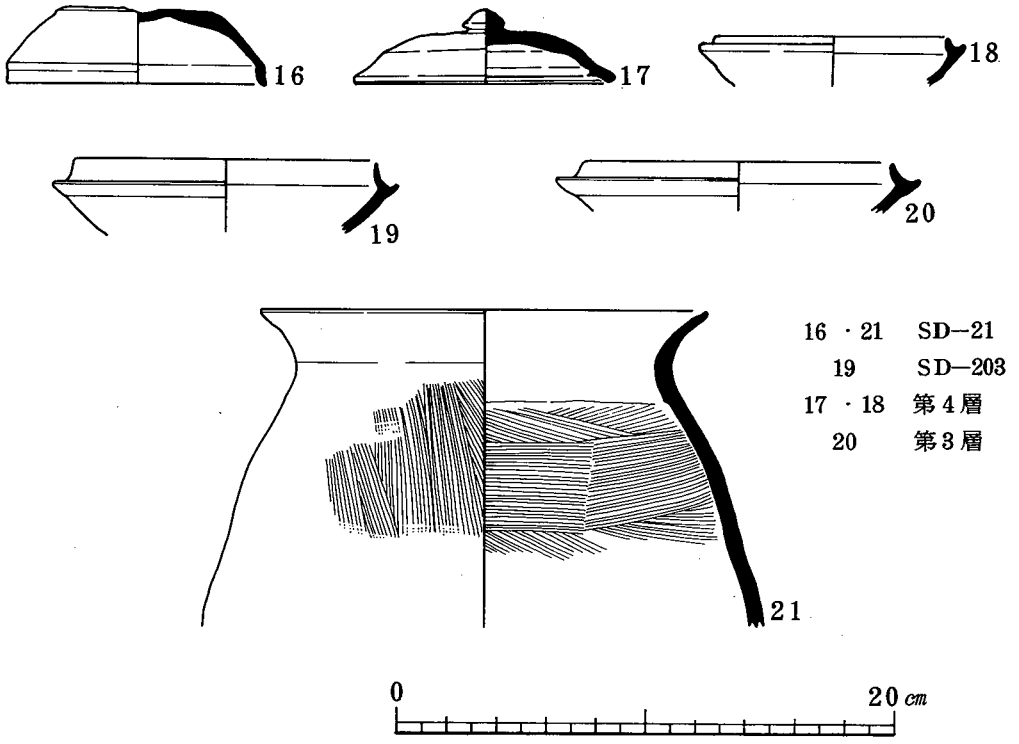


図17. 古墳時代後期～飛鳥時代出土遺物

器高3.0 cmである。調整は共に内面天井部が不定方向のナデの他は回転ナデで、17の外面天井部は回転ヘラ削りである。

・須恵器坏身（18～20）

いずれも立ち上がり部・受け部から底部上位にかけてのみ残存しており、18は他に比べてやや小ぶりで、立ち上がり部も短い。

形状はいずれも底部が受け部より内下方に内弯しながら下がり、立ち上がり部は受け部より内上方に外反しながら立ち上がり、端部はやや鋭い。受け部は外上方向きで、先端は丸く仕上げられている。

色調はいずれも濃灰色で、法量は18が復元口径9.4 cm、残存高2.0 cm、19が復元口径12.0cm、残存高2.9 cm、20が復元口径12.2cm、残存高2.0 cmを測る。調整はいずれも内外面回転ナデで、立ち上がり部はオリコミ手法による。

・土師器甕（21）

口縁部から体部中位にかけてのみ残存しており、形状は体部が頸部から外下方に内弯し

ながら下がり、口縁部は頸部から外上方に外反しながら立ち上がり、端部内面に僅かな突起を有する。

色調は内面が黒褐色、外面が黄灰色で、法量は復元口径17.7cm、残存高12.7cmを測る。調整は体部内面が横又は斜方向の刷毛目、体部外面は縦又は斜方向の刷毛目が施されており、口縁部は内外面摩滅が著しく不明である。

5. 平安時代前期（図18～23）

本調査においては同時期に属すると考えられる遺構が最も多く検出され、これらは調査区域の中央部に集中している。

遺構埋土内の遺物が比較的少ない本調査においては、他時期の遺物に比べて種類が豊富でその数も多い。土師器皿・甕・高坏・黒色土器椀・須恵器坏蓋・坏身などの日常雑器の他に、円面硯、緑釉陶器などの泉南地域では出土例の少ない器種や土錘・蛸壺などの漁撈具などが、同時期に属すると考えられる遺構や第4層から出土している。その他、特殊遺物としては装身具とされている石帯（丸鞆）の出土がある。

・須恵器坏身（22～29・37・44～46）

22～25及び28・29は高台を有しない器種で、26・27及び37・44～46は底端部に高台を付す器種である。法量については表2に示す通りである。

高台を有しない器種の形状は、底部が28は平坦で、他は浅いU字状を呈す。口縁部はいずれも底端部から外上方に内弯しながら立ち上がり、端部はやや鋭い。また、29の端部については僅かな外反がみられる。

No.	口径（復元口径）	器高（残存高）	高台径（復元高台径）	No.	口径（復元口径）	器高（残存高）	高台径（復元高台径）
22	15.5	4.4	—	28	14.1	3.85	—
23	13.4	3.9	—	29	14.9	6.0	—
24	13.6	4.2	—	37	11.9	3.45	8.6
25	13.8	3.3	—	44	15.5	3.8	11.7
26	15.1	4.2	11.1	45	16.0	5.3	10.6
27	15.4	4.1	11.0	46	12.8	3.7	8.2

表2．須恵器坏身法量表（単位cm）

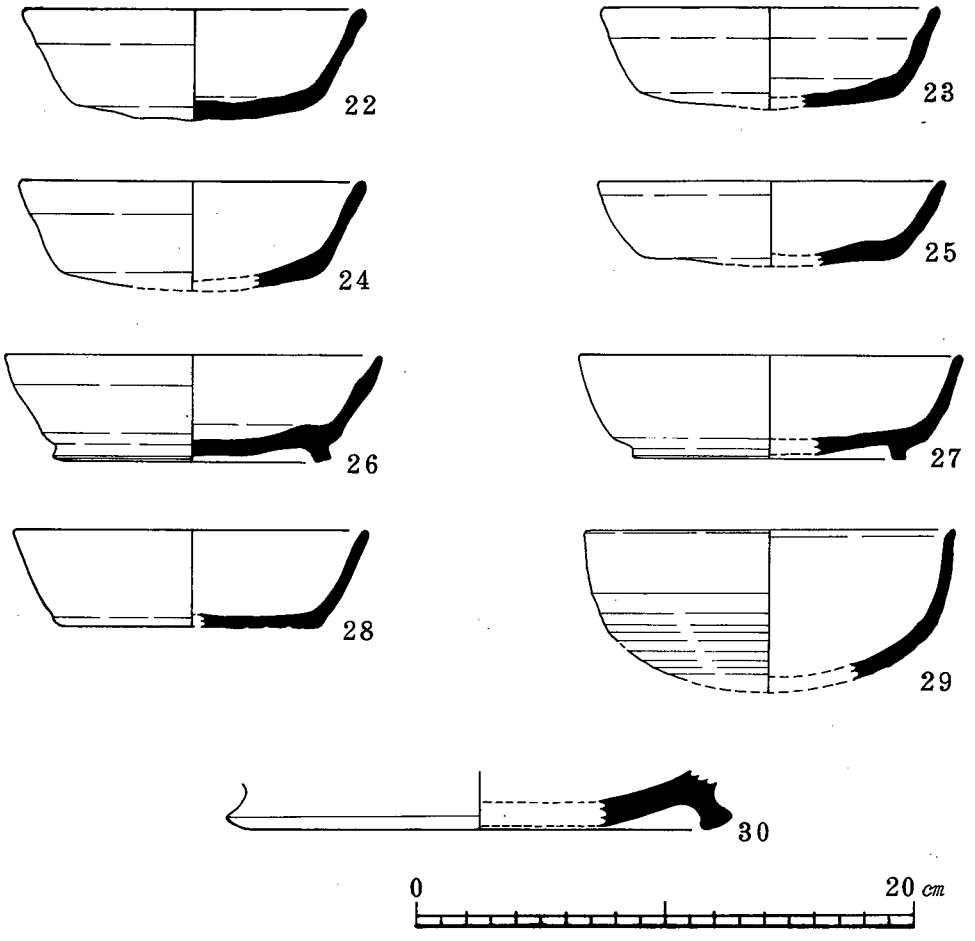


図18. 土拡ＳＫ－４出土遺物

色調は22～25が内外面淡灰色、28は内外面灰色、29は内外面白灰色である。調整は口縁部内外面が回転ナデ、底面内面は不定方向のナデ、底部外面は回転ヘラ削りで、22～25は回転ヘラ削りの後、粗雑な不定方向のナデが施されている。尚、28・29は丁寧なヘラ削りが施されており、特に29は削りによる僅かな稜が多くみられる。

高台を有する器種の形状は、底部が26は浅いＵ字状で、他は平坦である。口縁部はいずれも底端部から外上方に内弯しながら立ち上がるが、26・45はほぼ直線的である。いずれも底端部に断面台形状の高台を付し、26のみ八の字型に付されている。尚、45・46は底端部から口縁部にかけてのみ残存しており、底部の形状調整は不明である。

色調は27・37・44～46が内外面灰色、26はやや焼成不良のため内面が暗橙色、外面が白灰色である。調整はいずれも口縁部が回転ナデ、底部内面は不定方向のナデ、底部外面は

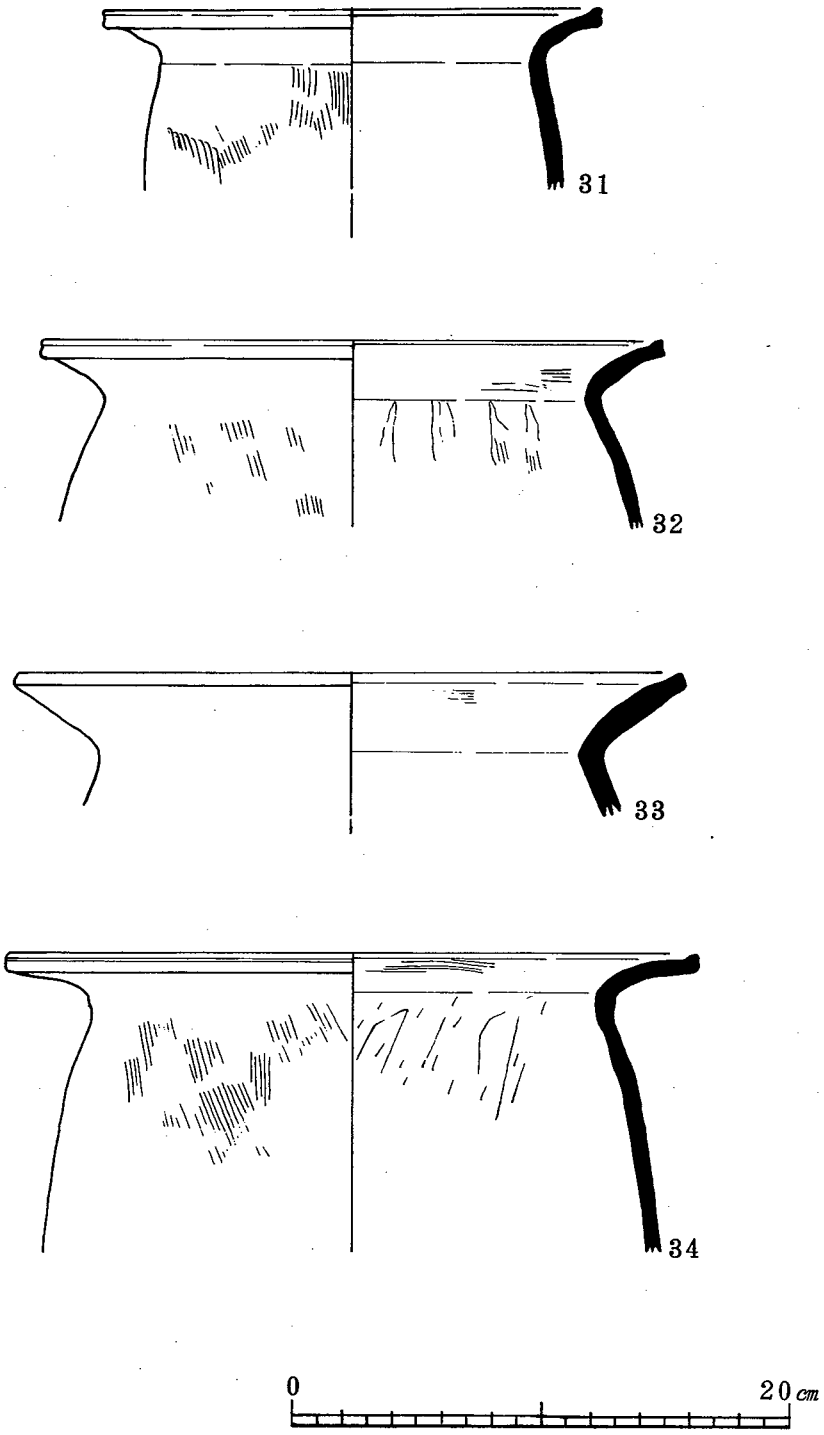


図19. 土拡ＳＫ－４出土遺物

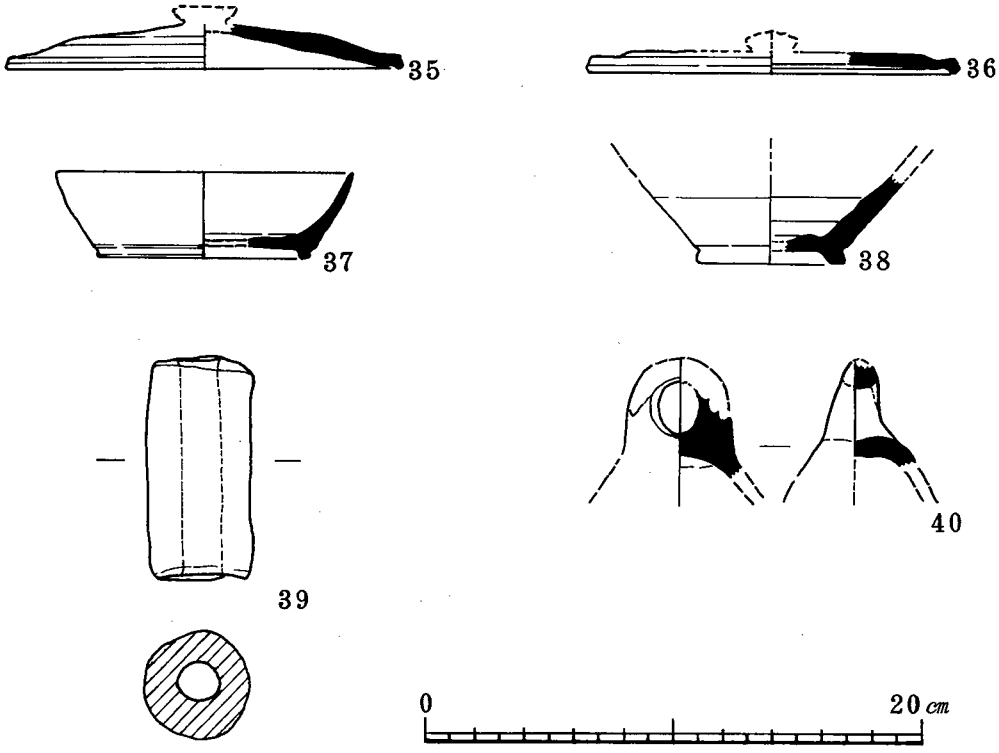


図20. 溝ＳＤ－13出土遺物

回転ヘラ削りの後、粗雑な不定方向のナデで、高台部は底端部に貼り付けた後、回転ナデが施されている。

・土師器甕（31～34）

いずれも口縁部から体部上位にかけてのみ残存しており、31が他に比べてやや小型である。形状はいずれも体部が頸部から外下方に内弯しながら下がり、口縁部は頸部から外上方に外反しながら立ち上がり、端部内面に僅かなかえりを有する。端部はやや厚く、方形状を呈し、31・32は端面が凹面を成す。

色調はいずれも内面が淡茶褐色、外面は暗褐色で、法量は31が復元口径19.8cm、残存高7.2 cm、32が復元口径24.8cm、残存高7.2 cm、33が復元口径26.6cm、残存高5.7 cm、34が復元口径27.7cm、残存高11.9cmを測る。調整はいずれも口縁部内面が横方向の刷毛目を施した後、横方向のナデで、頸部以下は33の内外面及び31の内面が摩滅のため不明であるが、他は内面が縦方向のヘラ削り、外面は縦又は斜方向の刷毛目が施されている。

・須恵器坏蓋（35・36）

いずれも天井中央部が欠損しており、つまみ部分の形状は不明である。また36は35に比べてやや平らな感がある。残存部分の形状は天井部が浅い逆U字状を呈し、口縁部は天井部から外下方に外反しながら下がり、端部は下方に屈曲する。端部はやや厚く、端面は凹面を成す。

色調は35が内外面淡灰色、36は内外面濃灰色で、法量は35が復元口径15.8cm、残存高1.8 cm、36が復元口径14.8cm、残存高0.8 cmを測る。調整は内外面回転ナデで、36の天井部外面は回転ヘラ削りである。

・土師器皿（41・42）

いずれも底中央部が欠損しており、残存形状は底部が浅いU字状を呈し、口縁部は底部から外上方に内弯しながら立ち上がり、端部は外反する。また、42の方が外反の度合いがきつい。

色調は41が内面淡褐色、外面赤褐色、42が内外面淡茶褐色で、法量は41が復元口径15.8 cm、残存高2.9 cm、42が復元口径14.0cm、残存高3.6 cmを測る。調整はいずれも口縁部が横方向のナデ、底部は不定方向のナデである。

・土師器高坏（48）

脚柱部のみ残存しており、短脚で器壁が分厚い。柱部が断面台形状を呈し、外下方に外反しながら裾部へと続く。柱部外面はヘラによる面取りが施され、10面を成す。内面は指ナデを施すが平滑である。

色調は内外面淡赤褐色で、残存高は5.8 cmを測る。

・黒色土器椀（43）

内面が黒色、外面が淡黄褐色を呈し、既成の分類上、A類に属するものである。形状は底部がほぼ平坦で、口縁部は底部から外上方に内弯しながら立ち上がり、端部は丸い。高台は底端部に八の字型に付し、端面はほぼ平坦である。

法量は復元口径約15.8cm、器高4.9 cm、復元高台径9.8 cmを測り、調整は口縁部が横方向のナデ、底部は不定方向のナデで、内面のほぼ全体に不明瞭であるが、ヘラ磨きが施されている。

・須恵器用途不明土器（30・38）

いずれも壷類の底部と考えられるが、確証はない。30は底部、38は底部から体部下位にかけてのみ残存している。

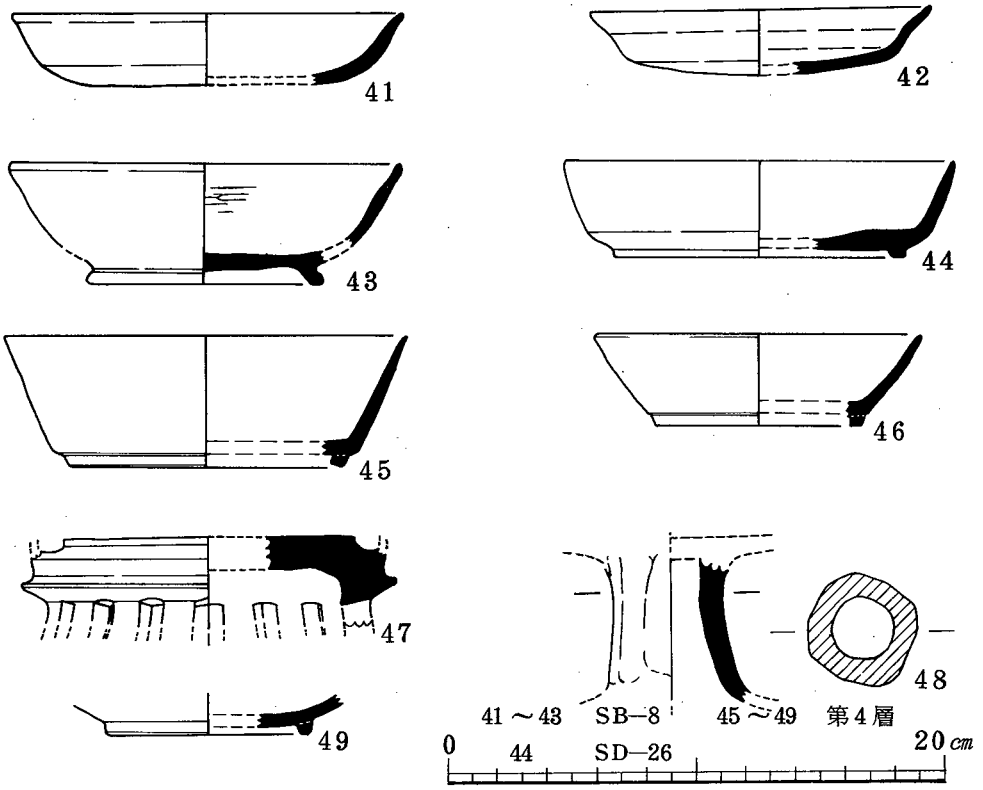


図21. 平安時代前期遺物

30の形状は底部が浅いU字状を呈し、底端部に八の字型に高台を付す。高台は重厚で断面鼓状を呈し、端面はやや丸みを帯びる。

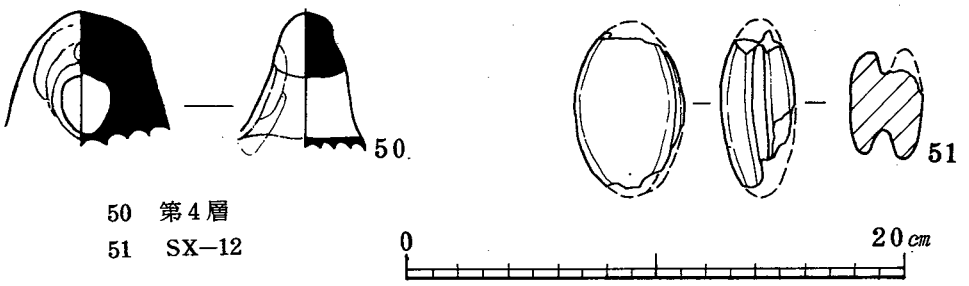
色調は内外面白灰色で、法量は残存高1.9 cm、復元高台径13.1cmを測る。調整は高台が回転ナデで、底部内外面は不定方向のナデである。

38の形状は底部が平坦で、体部は底部から外上方に直線的に立ち上がる。高台は底端部に八の字型に付し、やや分厚く、端面は平坦である。

色調は内外面淡灰色で、法量は残存高3.6 cm、復元高台径5.8 cmを測る。調整は内面及び高台が回転ナデ、体部外面は回転ヘラ削りで、底部外面に回転糸切り痕を有する。

・須恵質円面硯（47）

脚部上位以上のみ残存しており、形状は陸部がほぼ平坦で、海部はU字状を呈す。脚部は陸・海部から外下方に下がり、上位に突線を有し、中位にヘラを用いて丁寧に面取りした長方形スカシをもつ。



50　第4層
51　SX−12

図22. 漁　　撈　　具

色調は陸部が濃灰色、他の部位は淡灰色で、法量は復元最大径15.4cm、復元陸部径12.0cm、残存高3.5 cmを測る。調整は陸部内面がヘラによるナデで他の部位は回転ナデである。

・緑釉陶器（49・81〜83）

本調査においては4点出土しているが、いずれも小細片で、図示し得たのは1点のみである。

底端部のみ残存しており、底部はほぼ平坦で、断面五角形状の高台を付す。外面高台外部に施釉部分を有し、釉色は淡緑色、素地は白灰色である。法量は復元高台径8.2 cm、残存高1.7 cmで、調整は内外面回転ナデで、高台部端部にヘラ削りが施されている。

・漁撈具（39・40・50・51）

39は土師質管状土錘で円筒形を呈す。棒状のものに粘土を巻きつけて成形した後、粗雑な不定方向のナデによって調整されている。色調は淡灰褐色で、法量は最大長8.9 cm、最大幅4.3 cm、孔径1.5 cmを測る。

51は土師質有溝土錘で平面楕円形を呈し、両側辺にU字状の溝を有する。手づくね手法による成形で、溝部分は押し当て手法によるものである。色調は黄褐色で、法量は残存長6.2 cm、最大幅4.5 cm、最大厚2.9 cmを測る。

40は土師質飯蛸壷形土器で釣手部のみ残存している。形状は円形を呈し、手づくね手法により成形した後、縦方向の指ナデにより調整されている。色調は淡赤褐色で、法量は残存高4.5 cm、残存幅5.0 cm、孔径1.8 cmを測る。

50は土師質大型蛸壷形土器で釣手部のみ残存している。形状は不整円形を呈し、手づくね手法により成形した後、やや粗雑な縦方向の指ナデによって調整されている。色調は淡赤褐色で、法量は残存高4.8 cm、残存幅6.9 cm、孔径2.5 cmを測る。

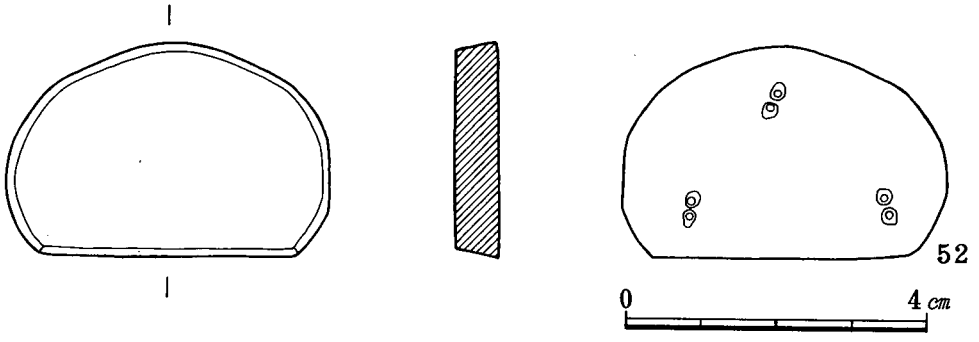


図23. 石　　帯（丸鞆）

・丸　鞆（52）

貴族や官人が衣服の装飾として用いた腰帯飾具の一種である。

第４層より出土した平面蒲鉾形を呈す雑石製丸鞆で、石材は不明である。表面及び側面は丁寧に研磨され光沢をもち、裏面はやや摩滅の感があり、多少ザラつきを有する。裏面に３ヶ所のかがり穴を有し、穴の形状は不整円形である。色調は緑白色で、法量は最大長2.8㎝、最大幅4.3㎝、最大厚0.6㎝、孔径0.15㎝を測る。

6.　中・近世（図24～26）

主として第３層をベースとする遺構が多く、ＳＤ－８、ＳＥ－２などがそれである。これらの遺構や第３層より瓦器類を中心に土師器、陶磁器などが出土しており、小皿、皿、椀、羽釜、甕、東播系練鉢、備前焼擂鉢などの器種が確認されている。その他、銅製壷などの金属容器も出土している。

・小　皿（53～55・69～74）

53・54及び69～71は土師質、55及び72～74は瓦質のもので、法量については表３に示した。

形状は底部が平坦か凹面を成すものが多いが、54・55は浅いＵ字状を呈し、55は凹凸が著しい。口縁部は底部から外上方に内弯しながら立ち上がり、端部は丸い。但し、73は端部はやや外反し鋭い。

調整は口縁部が横方向のナデ、底部は不定方向のナデで、71が底部内面、53～55・73が底部外面にそれぞれ指圧痕がみられる。色調は土師質のものが暗赤褐色か淡茶褐色、瓦質のものは黒灰色をそれぞれ呈す。

・坏・皿（56・75）

56は土師質坏、75は瓦質皿で、共に底中央部が欠損している。法量については表３に示した。

56の形状は底部が平坦で、口縁部は底部から外上方に内弯しながら立ち上がり、端部は丸い。調整は口縁部が横方向のナデ、底部は不定方向のナデで、口縁部下位外面に指圧痕がみられる。また、色調は内外面灰白色である。

75の形状は底部が浅いU字状を呈し、口縁部は底部から外上方に内弯しながら立ち上がり、端部はやや外反し、丸い。調整は口縁部が横方向のナデ、底部は不定方向のナデで、口縁部下位から底部にかけて指圧痕がみられる。また、色調は黒灰色である。

・瓦器椀（57～61・76・77）

76は完形で、その他は底中央部が欠損している。形状はいずれも深浅の差はあるものの、U字状の底部で、口縁部が底部から外上方に内弯しながら立ち上がり、端部は比較的丸い。

調整は口縁部が横方向のナデ、底部が不定方向のナデで、口縁部下位から底部にかけて指圧痕がみられる。また、いずれの内面にも不明瞭ながら螺旋状暗文がみられ、58には更に輪状の暗文が施されている。色調は黒灰色が淡灰色で、法量については表４に示す通りである。

No.	分　類	口　径（復元口径）	器　高（残存高）	No.	分　類	口　径（復元口径）	器　高（残存高）
53	土師器	7.7	1.3	69	土師器	6.8	1.3
54	土師器	8.8	1.6	70	土師器	7.8	1.7
55	土師器	7.8	1.5	71	土師器	7.8	0.8
56	土師器	10.8	2.7	72	瓦　器	6.4	1.3
57	瓦　器	11.8	2.4	73	瓦　器	8.0	1.5
58	瓦　器	12.8	2.4	74	瓦　器	7.8	1.2
59	瓦　器	11.8	3.1	75	瓦　器	9.8	1.7
60	瓦　器	14.8	4.0	76	瓦　器	10.5	2.9
61	瓦　器	12.8	3.4	77	瓦　器	12.8	3.3

表３．小皿・皿・坏・椀法量表（単位cm）

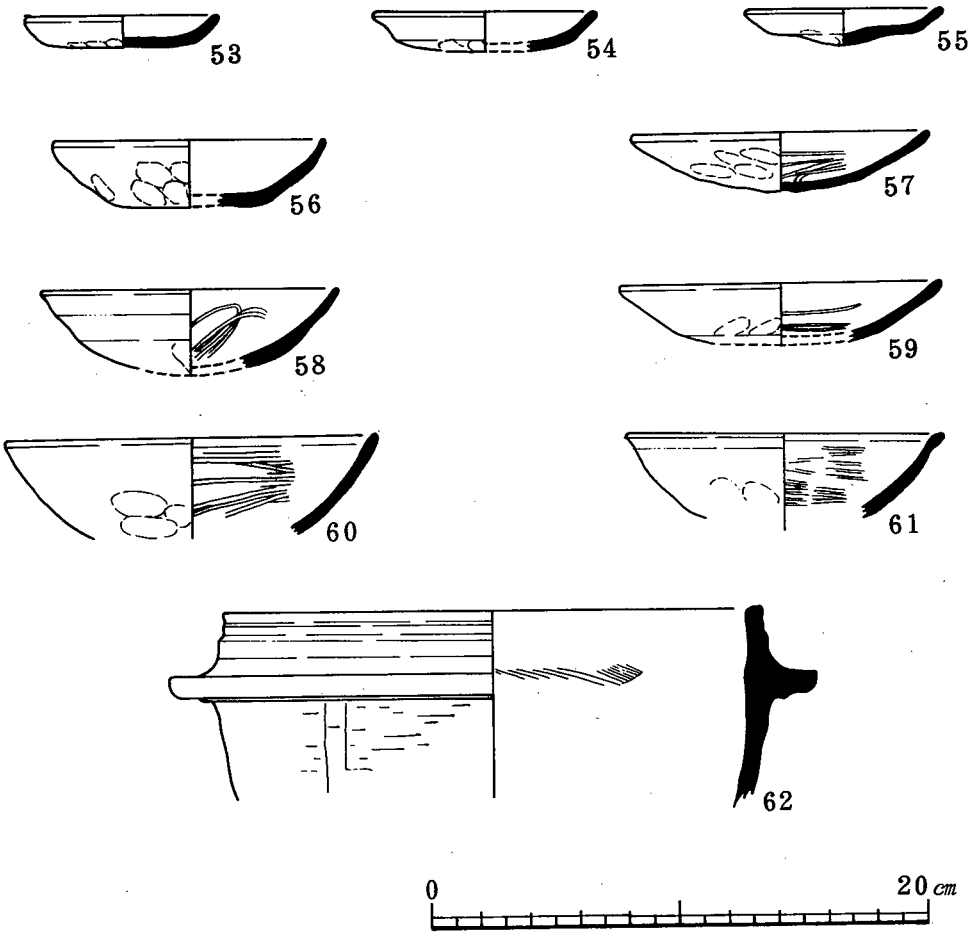


図24. 溝ＳＤ－８出土遺物

・瓦器羽釜（62・78・79）

いずれも口縁部から体部上位にかけてのみ残存しており、形状は口縁部が鍔部から内上方に内弯しながら立ち上がり、端部はほぼ平坦である。体部は鍔部から内下方に内弯しながら下がり、鍔部はやや外上方向きで、端部は丸い。いずれも口縁部外面に段を有するが、62・78が２段、79が３段となっている。

調整は鍔部から体部外面にかけてがヘラ削り、内面の口縁部中位から体部にかけては横又は斜方向の刷毛目、他部位は横方向のナデである。色調はいずれも内外面暗灰褐色で、法量は62が復元口径21.4cm、残存高7.9 cm、復元鍔径26.0cm、78が復元口径23.0cm、残存高9.4 cm、復元鍔径28.2cm、79が復元口径21.8cm、残存高4.2 cm、復元鍔径28.0cmをそれぞれ測る。

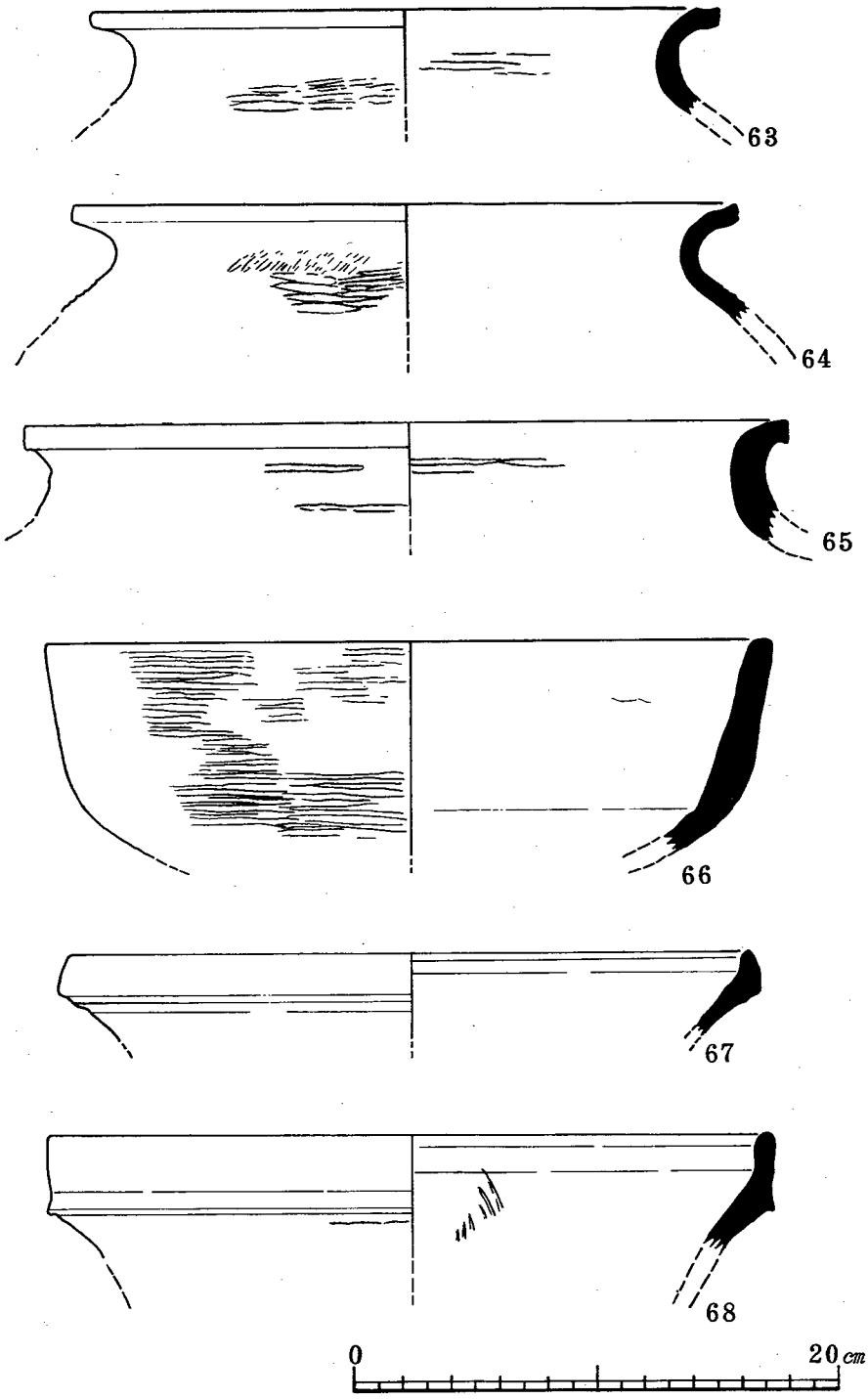


図25. 溝ＳＤ－８出土遺物

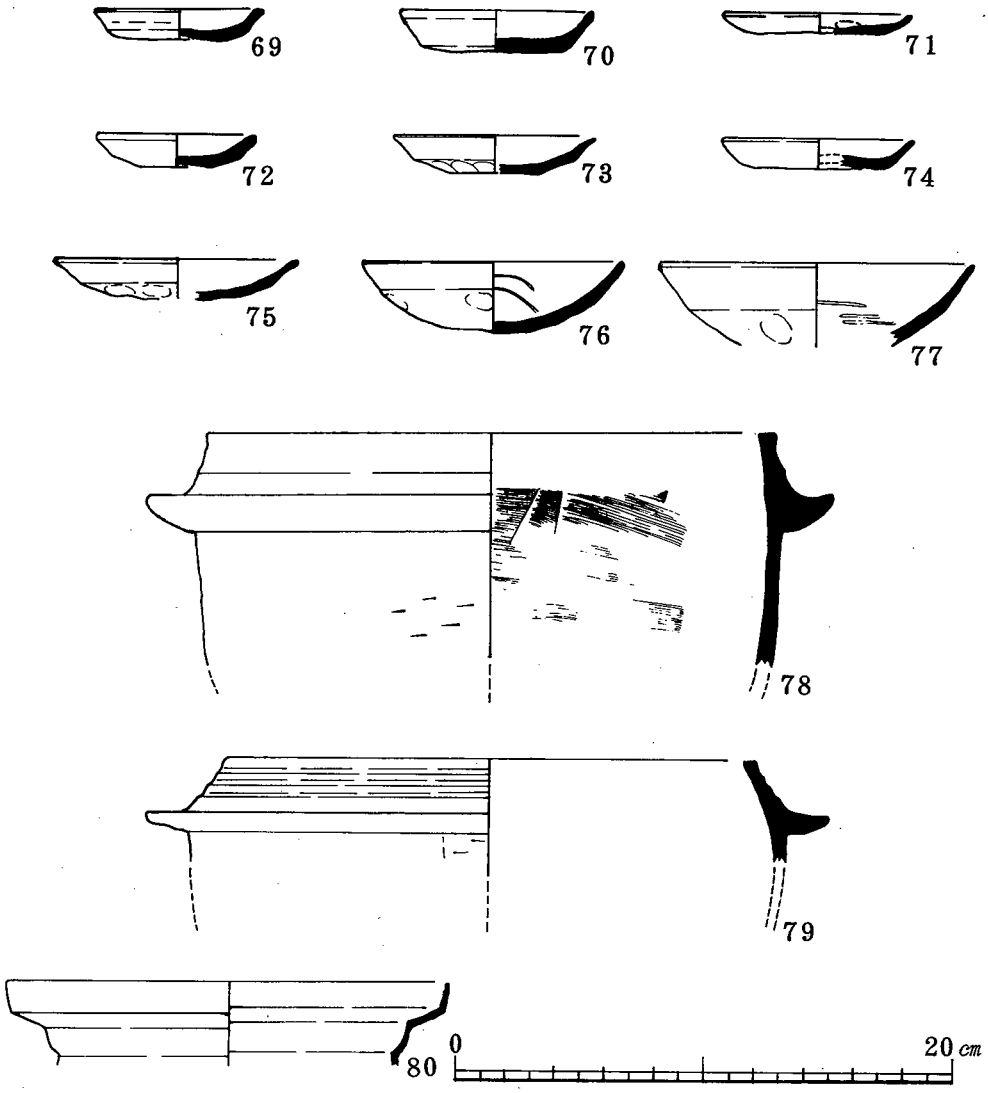


図26. 第3層出土遺物

・土師質甕（63～65）

口縁部から頸部下位にかけてのみの残存であるが、胴張りが著しく、口縁部が極端に外反し、体部外面に横方向の粗いタタキ目を施すという湊焼の形態的特徴を示す器種である。

65は他に比べて口縁部外反の度合いが少なく、重厚である。また端部の形状についても、63・64は内面に僅かな突起部分を有するのに対し、65は外面に有するという差異がみられる。色調は淡灰褐色か暗褐色で、法量は63が復元口径26.0cm、残存高4.3 cm、64は復元口径27.6cm、残存高5.1 cm、65は復元口径31.8cm、残存高5.1 cmをそれぞれ測る。

・土師質鉢（66）

口縁部から底部上位にかけてのみ残存しており、分厚い器壁をもつ鉢型土器である。口縁部は直線的に外上方へ立ち上がり、端部は台形状で端面は平坦である。

調整は内外面横方向のナデで平滑に仕上げられており、外面には横方向の丁寧な磨きが施され、光沢をもつ。色調は内外面淡赤褐色で、法量は復元口径29.6cm、残存高8.8 cmを測る。

・東播系練鉢（67）

口縁部のみ残存しており、形状は口縁部が直線的に外上方へ立ち上がり、端部は断面三角形状を呈す。調整は内外面回転ナデで、色調は淡灰色、法量は復元口径28.6cm、残存高3.6 cmを測る。

・備前焼擂鉢（68）

口縁部のみ残存しており、形状は口縁部が外上方に立ち上がり、端部はくの字型に屈曲し、外面屈曲部位に稜をもつ。

調整は内外面回転ナデで、内面の一部にオロシ目を有する。色調は内外面暗赤褐色で、法量は復元口径30.0cm、残存高5.0 cmを測る。

・銅製品（80）

形状から判断して青銅製壺と推測できるが、確証はない。口縁部のみの残存で、二重の受口状を呈し、稜はやや鋭い。色調は淡緑色で、法量は復元口径17.9cm、残存高3.4 cmを測る。

第4章　結　　語

本調査区域における人間の足跡を証する最古の遺物は、旧石器時代に遡るものと考えられるものの、時期の判明した遺構に限っては、古墳時代前期以前に遡ることはない。

本調査で検出された遺構によって構成される集落は、断続的な立地様相を示し、古墳時代前期、古墳時代後～末期、平安時代前期、中世以降の各群に大別できる。これらの群の中で、調査区域内という狭い視野範囲に限って概観すれば、平安時代前期が主流をなすようである。また、中世以降のものを除く3時期の群については、その時期範囲内における時期的序列が明確でないのも特徴である。

古墳時代前期以前については、遺構の存在をみないだけでなく、遺物もその大半が後世の遺構や包含層からの出土であるため、諸相を察するに不明瞭な点が多く、考古学的裏付けも困難であるということで、前述した所見のみに留めておくとして、古墳時代前期以降についての概要をまとめておきたい。尚、須恵器による編年的考察に関しては、中村浩氏の陶邑編年[①]に基づくものとする。

古墳時代前期に属すると判明できた遺構はＳＢ－９、ＳＤ－101 、ＳＤ－405 であるが、いずれも散在するため、相互の関連は摑み難い。ＳＤ－405 については、明確な時期比定をなし得なかったが、ＳＢ－９、ＳＤ－101 からの出土遺物は、形態的特徴から、庄内期後半に属するものと考えられる。また、ＳＢ－９の柱穴内より出土した炭化米などから、同時期における農耕（稲作）集落の存在が窺えるが、規模や性格を把握するには資料的に不十分である。

古墳時代後～末期に属すると考えられる遺構は、ＳＤ－203 、ＳＤ－21である。前者からは、陶邑編年のⅡ型式４～５段階に、後者からはⅡ型式６段階に属すると考えられる須恵器が出土しており、それぞれ６世紀後半、７世紀初頭に比定することができる。本調査地周辺における調査で、６世紀後半代に属する集落の一端が確認[②]されており、ＳＤ－203を含めた広範な生活圏の存在が想定できるが、有機的関連は不明である。また、ＳＤ－21については、時期比定は可能なものの、ほぼ単一的存在のため、その機能、性格についての詮索は避けたい。

平安時代前期に属すると考えられる遺構は、他の時期に比べると圧倒的に多いため、集落の想定がある程度具体化できるように思われる。同時期の遺構の空間的つながりを求めるには、遺物による時期的序列がほとんどみられないということで、遺構の配置企画に基

づく同一方向性という所見から、集落構成を復原していくのが有効手段であろう。前述に準じた手順を用いると、Ｖ－Ｖ′からⅥ－Ⅵ′にかけて存在するＳＢ－３、ＳＢ－４、ＳＫ－４と、それらを包摂するＳＡ－１によって集落の一端が構成されることが想定できる。また、ＳＤ－13、ＳＤ－26などの遺構を含めた集落圏存在の可能性はあるが、現時点での断言は避けることにする。これらの遺構の時期比定は、出土須恵器による解釈が妥当と思われ、ＳＫ－４出土須恵器坏の中で、同時期より若干古い型式の要素をもつ器種もみられるが、陶邑編年のⅣ型式４段階を中心とする前後の時期内に該当するものと考えられる。ＳＢ－８については、ＳＢ－3，4などの群から離れて存在しており、また、周辺に同時期の遺構がほとんどみられないことから、他遺構との関連性、共存性についての考察は困難である。出土遺物は第４層のものを含めて、土師器甕、須恵器坏などの日常雑器類が主流をなすが、同集落の性格を考える上で、本調査で検出された緑釉陶器、円面硯、石帯は重要である。これらは窯跡を除いては、和泉地方における出土例が比較的少ないものである。いずれも平安京周辺地域においては、普遍的な出土傾向を示すものの、それ以外の地域での出土分布はかなり疎で、寺院址、官衙址に比較的多く、これらの遺跡との関連性の検討が今後の課題である。また、石帯（丸鞆）については、『日本後記』に『禁銙帯、以支銙銭也』[③]という記述があり、延暦15年（796)に従来の金属製銙から石製銙（石帯）にとって変わる様子が窺える。そして、一時期の着用停止期間を有するものの、貞観12年（870）まで用いられたとされており、石帯（丸鞆）の使用期間は、大まかに 796年～ 870年の間に限定でき、同集落の時期比定の１つの指標となるものと言えよう。

中世以降については、溝あるいは井戸といった遺構が散在する程度で、集落様相を明確にするには至らなかった。調査区域内においては、同時期の遺構群の中核をなすのはＳＤ－８であるが、長期間にわたって営まれた溝であるため、遺物の時期的範囲が広く、時期比定はかなり困難である。溝内出土の瓦器類に関しては、その大半が細片のため、時期比定に用いる資料にすることが不可能であるが、和泉地方の在地土器である湊焼の系譜をもつ甕の出土は、若干なりとも時期決定に寄与するものである。出土した甕は、堺市内出土の湊焼甕編年試案[④]によれば、１段階に属すると考えられ、13世紀から14世紀前半にかけての年代が与えられ、ＳＤ－８の存続期間の一時期を決定づける遺物である。また、瓦器類衰退期以降における時期的考察に、湊焼という在地の土器編年を用いることは有効的手段であり、和泉地方における中、近世遺跡の実年代観にも大きく影響を及ぼすものである。

以上、遺構を４時期群に区分し、概要を示したが、調査区域が限定されているため、集

出土遺跡名	緑釉陶器	円面硯	石帯
堺市・大和川今池	○		
堺市・田園	○		
堺市・四ツ池	○	○	
堺市・鈴の宮		○	
堺市・西浦橋	○		
堺市・鶴田池東		○	○
泉大津市・豊中		○	
泉大津市・古池	○		
和泉市・府中	○		
和泉市・万町北		○	
岸和田市・山直北	○		
貝塚市・堀	○		
貝塚市・加治神前畠中	○	○	○
泉南市・海会寺	○		
阪南町・田山		○	

表4．和泉地方緑釉陶器・円面硯・石帯出土地名表

落の一端を垣間見たに過ぎず、その性格や各遺構の機能を確証するには至らなかった。これらの詳細は、周辺地域における積極的な調査と、資料の増加を待って、全容の解明に向けて、更に検討を進めていく必要があるように思われる。

（参考文献）

① 陶邑Ⅲ　大阪府教育委員会　1978年

② 畠中遺跡発掘調査報告書　㈶大阪府埋蔵文化財協会　1986年

同調査において、6世紀後半代の竪穴式住居址が数棟検出されている。

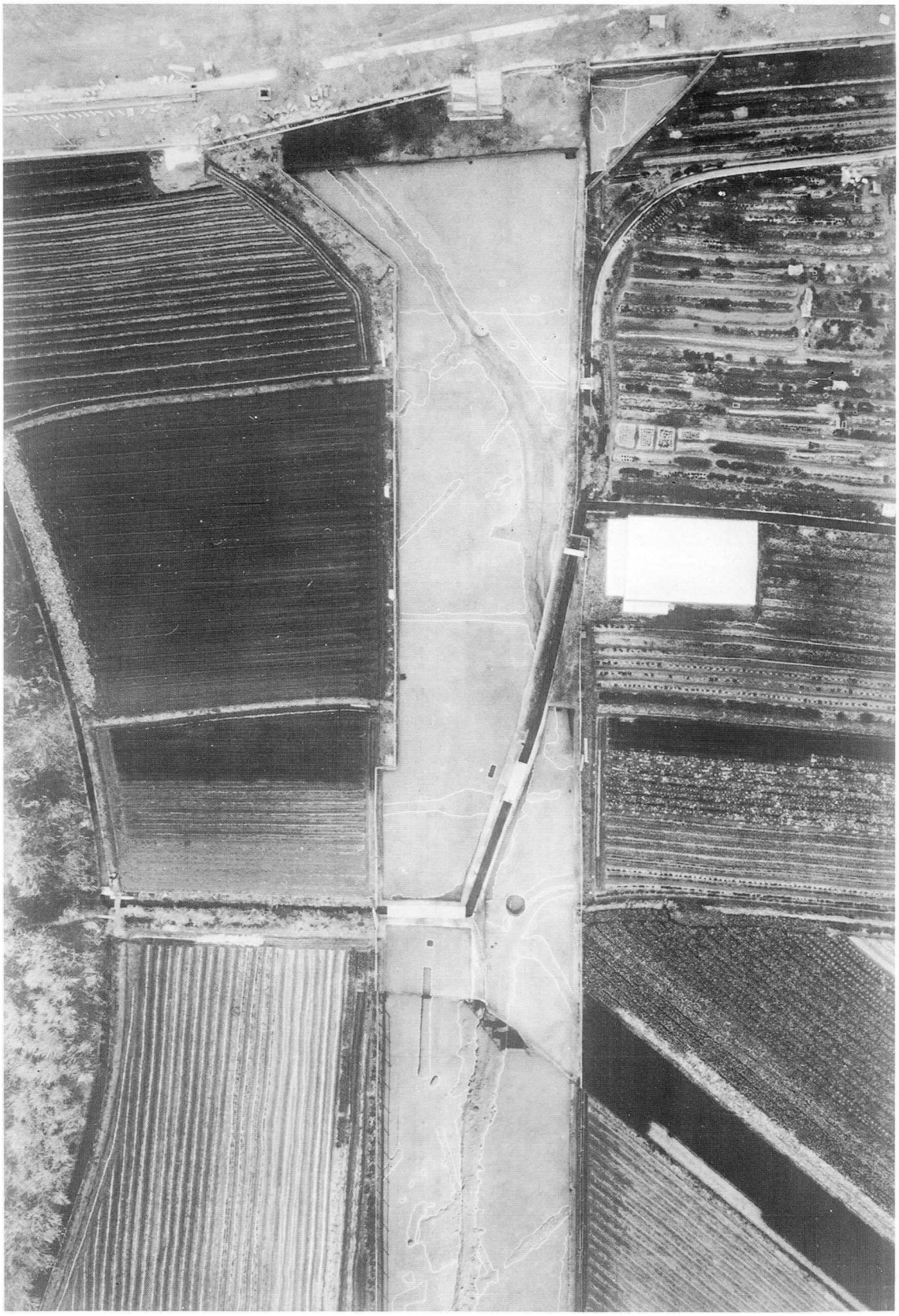
③ 新訂増補・国史大系『日本後記』　吉川弘文館　1934年

④ 堺市文化財調査報告・第20集　堺市教育委員会　1984年

同書に掲載されている堺環濠都市遺跡発掘調査報告（市之町東4丁・ＳＫＴ19地点）において、堺市内出土の湊焼甕編年試案が発表されており、9段階に分類されている。

図　　版

図版1（遺構）

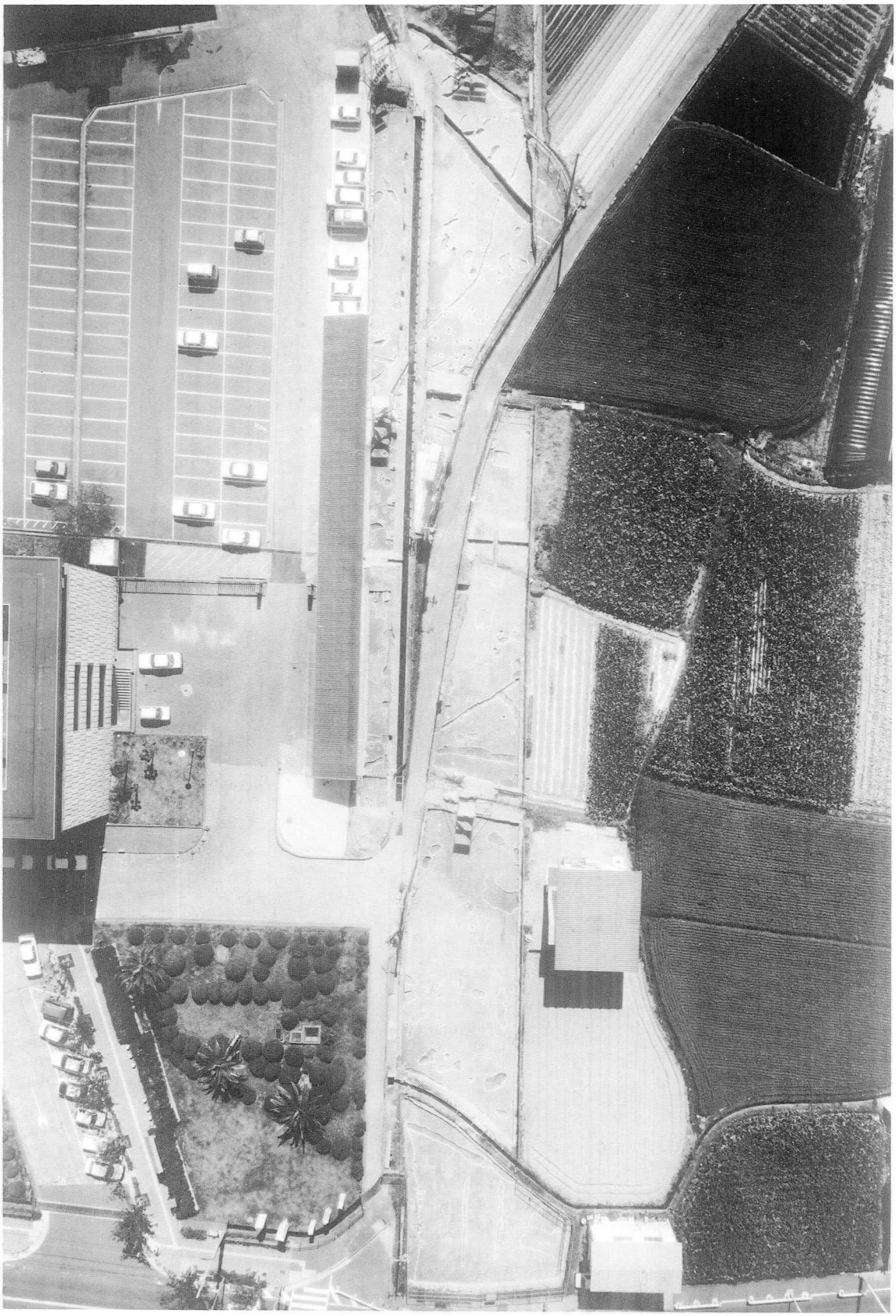


全景（航空写真）

図版2（遺構）

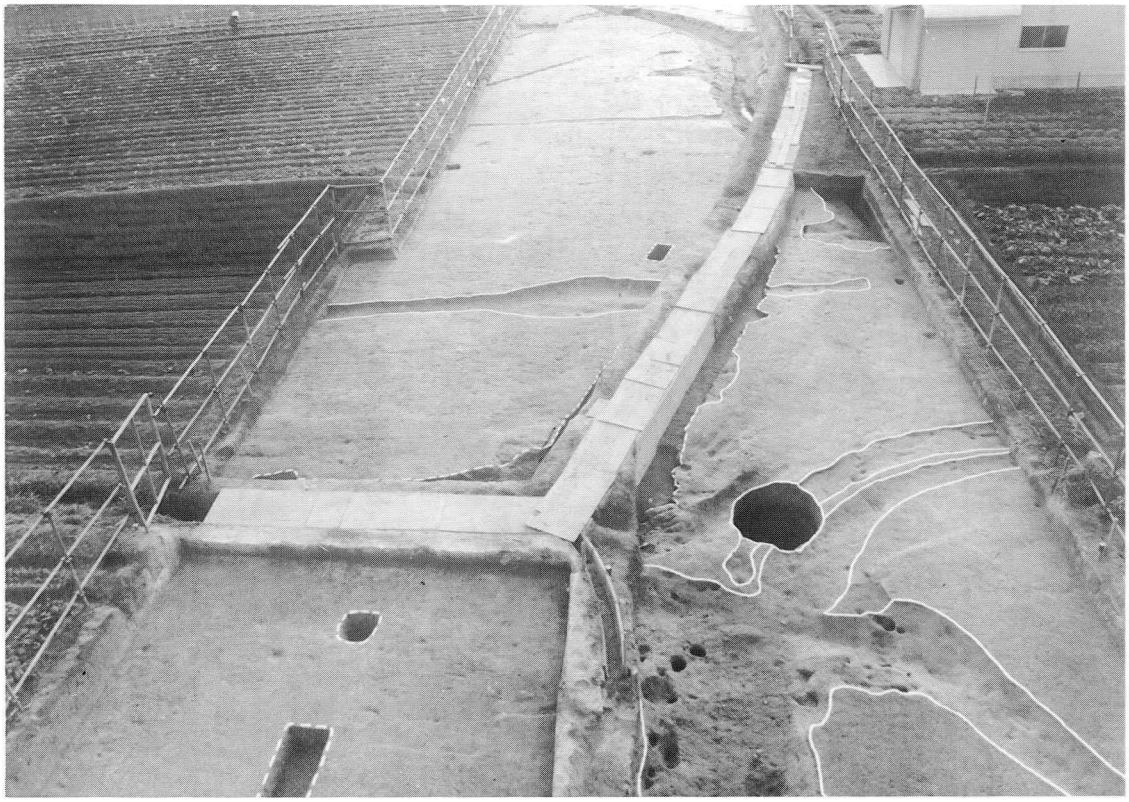
全景（航空写真）

図版3（遺構）



全景（航空写真）

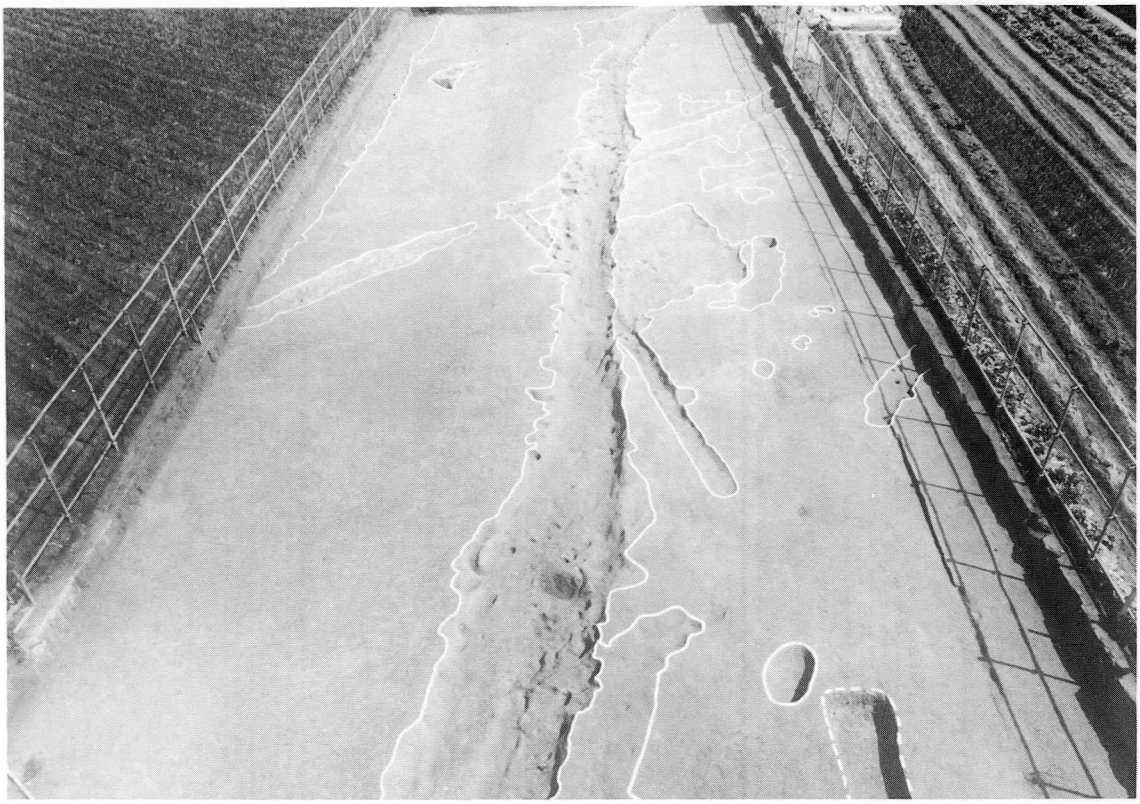
1. 掘立柱建物（SB−1）及び溝（SD−3）付近全景　（南から）



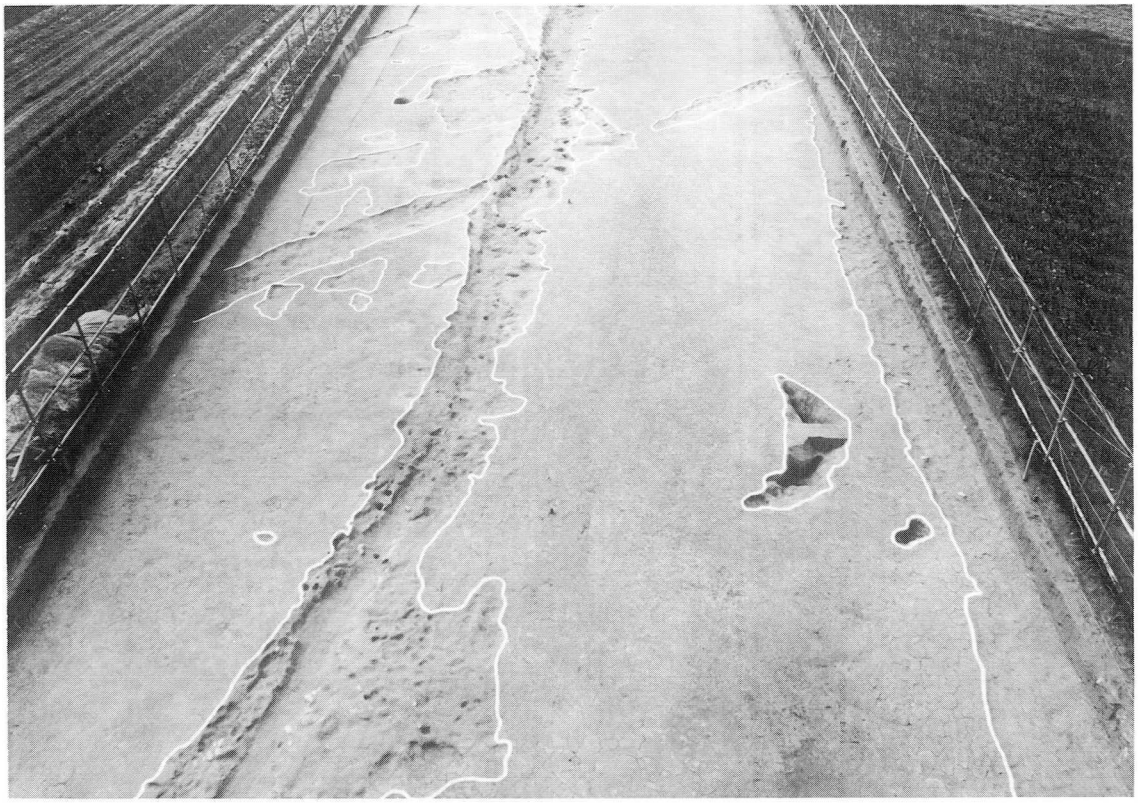
2. 溝（SD−3）及び井戸（SE−2）付近全景　（北から）

1. 掘立柱建物（SB−1）　（南から）

2. 井戸（SE−2）　（南から）

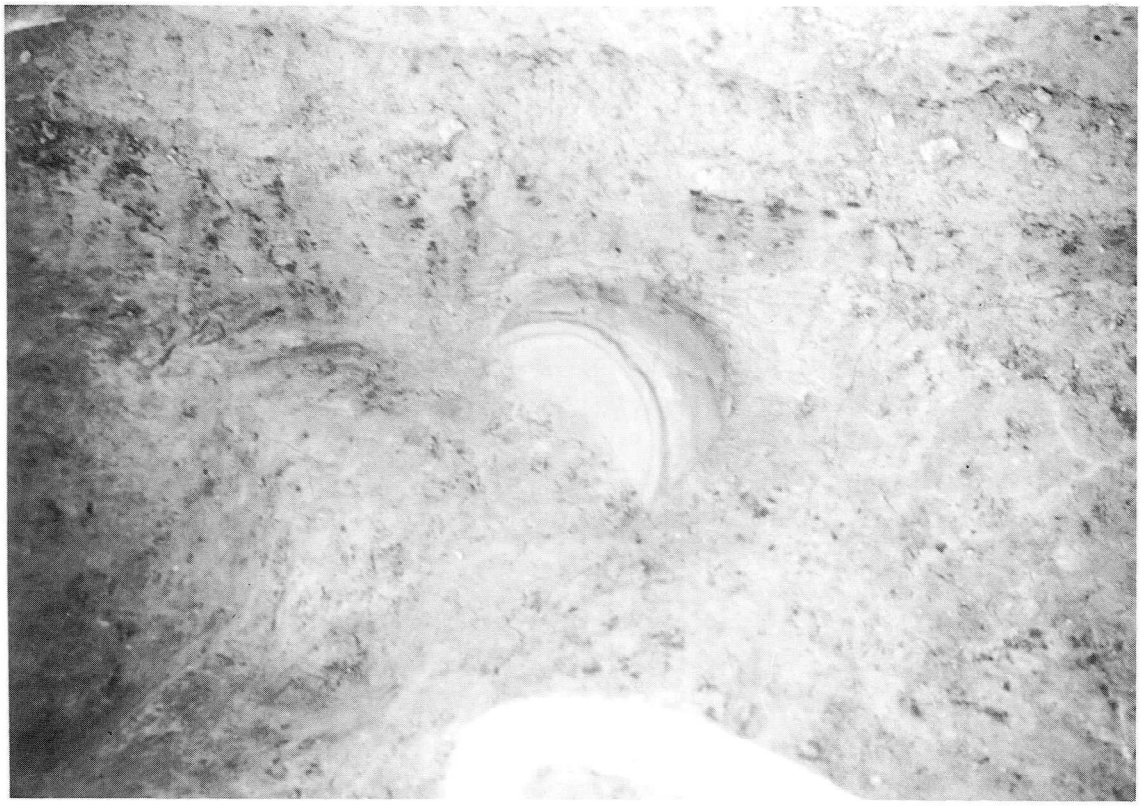


1. 溝（SD−8）付近全景　（南から）

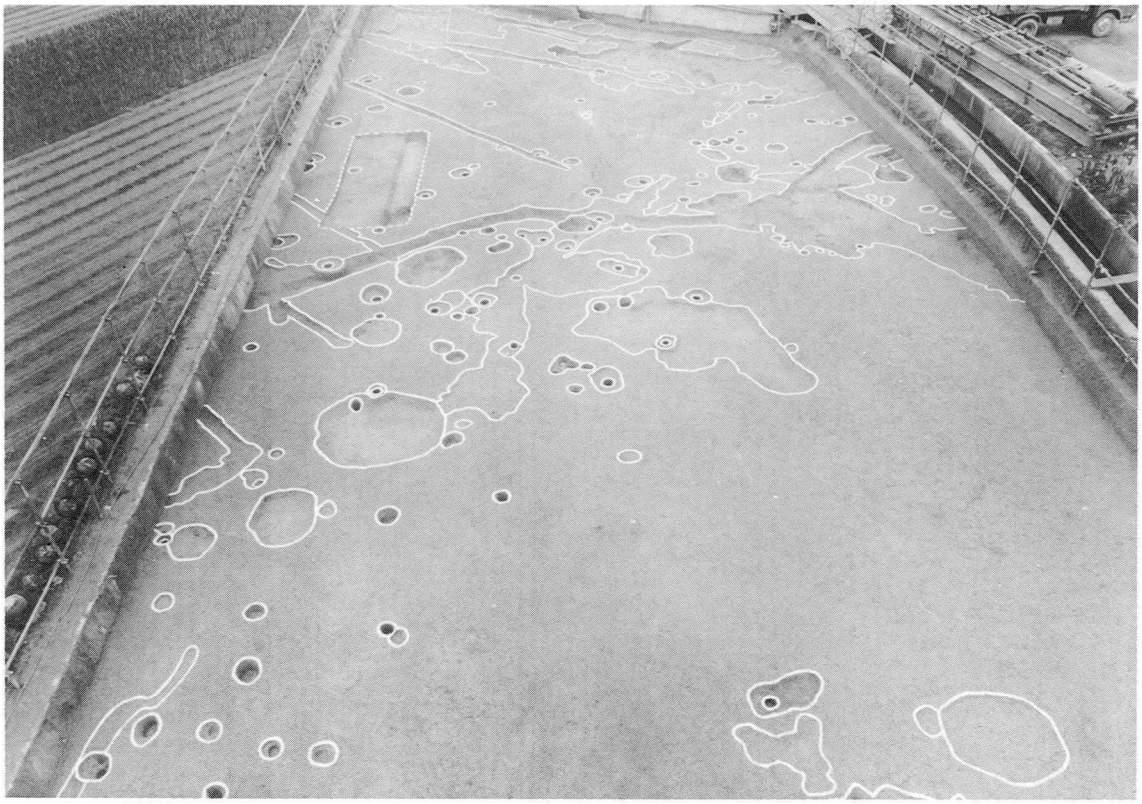


2. 溝（SD−8及びSD−13）付近全景　（北から）

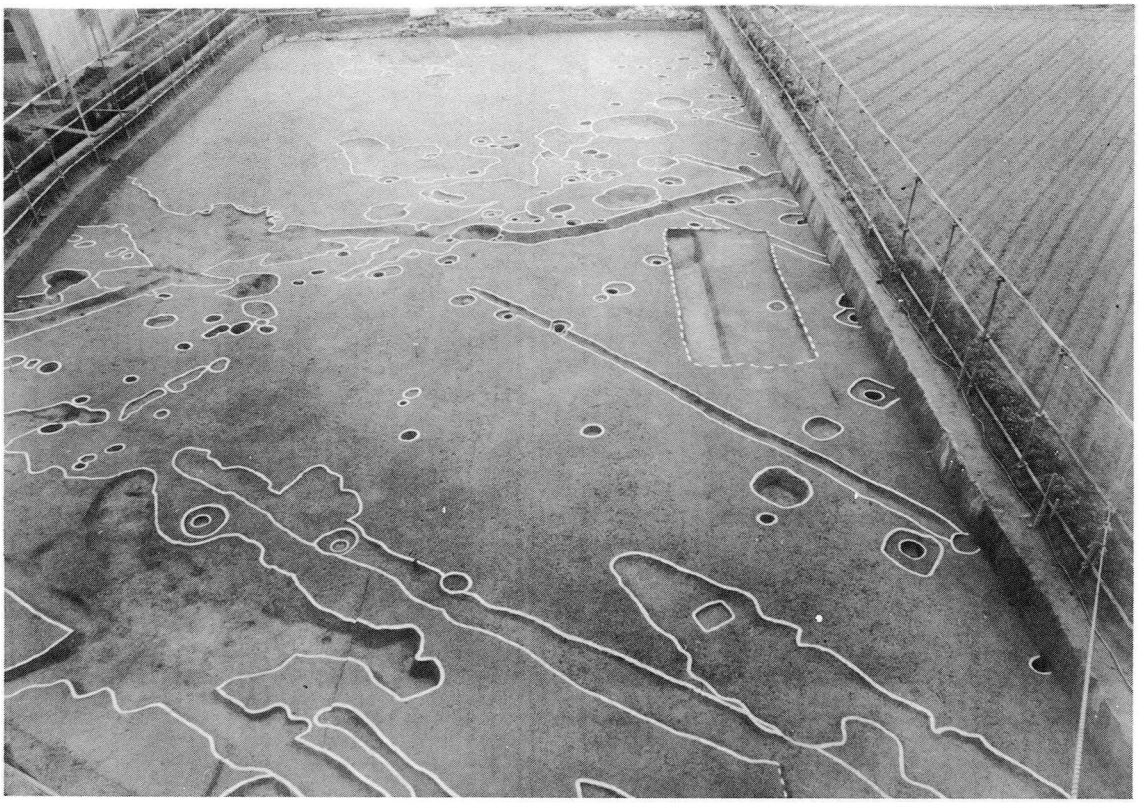
1. 溝（SD−13）遺物出土状況　（東から）



2. 溝（SD−26）遺物出土状況　（東から）



1. 掘立柱建物（SB−2及びSB−3）付近全景　（南から）



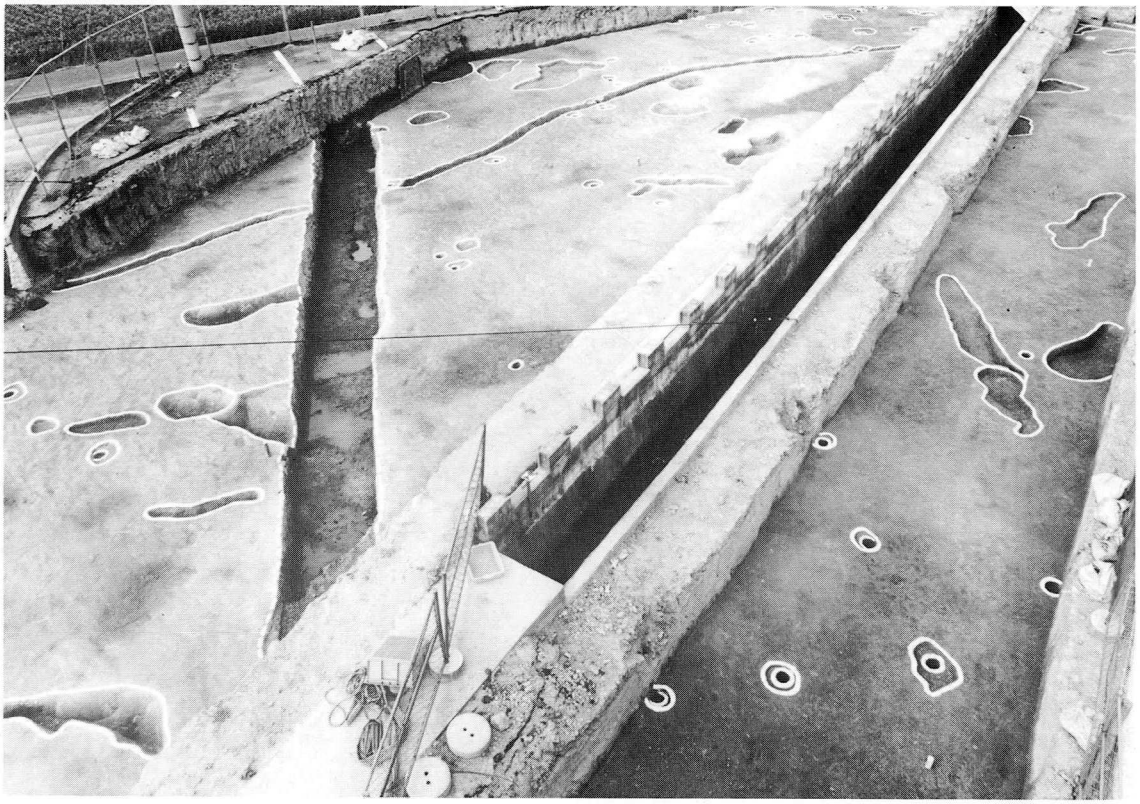
2. 掘立柱建物（SB−2及びSB−3）付近全景　（北から）

1. 掘立柱建物（SB−2及びSB−3）　（南から）

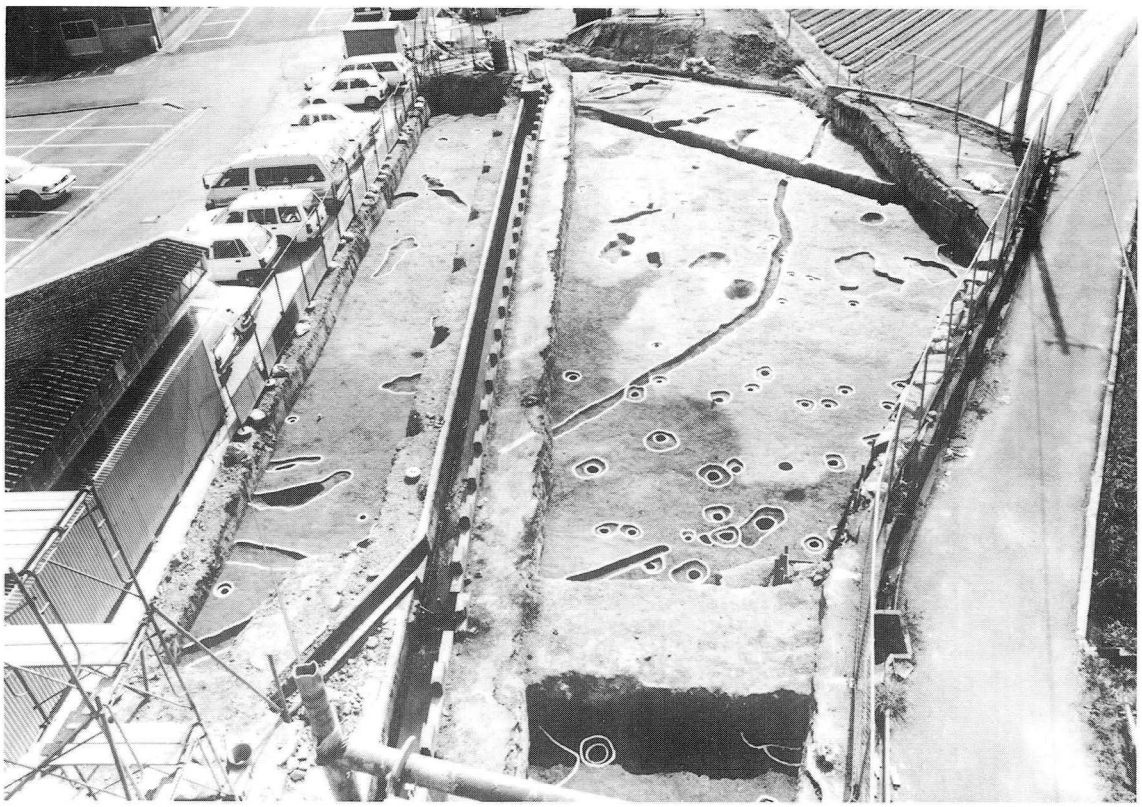
2. 掘立柱建物（SB−4）　（北から）

1. 土坑（SK−4）遺物出土状況　（東から）

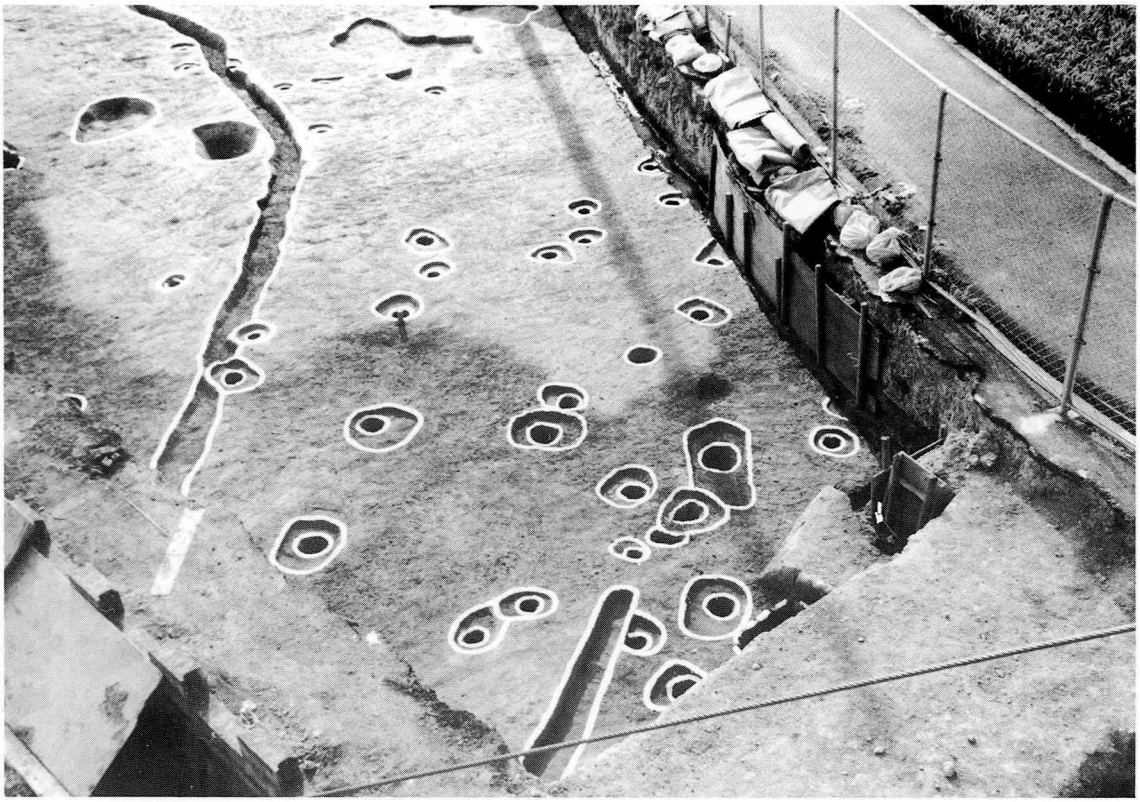
2. 土坑（SK−4）遺物出土状況　（西から）



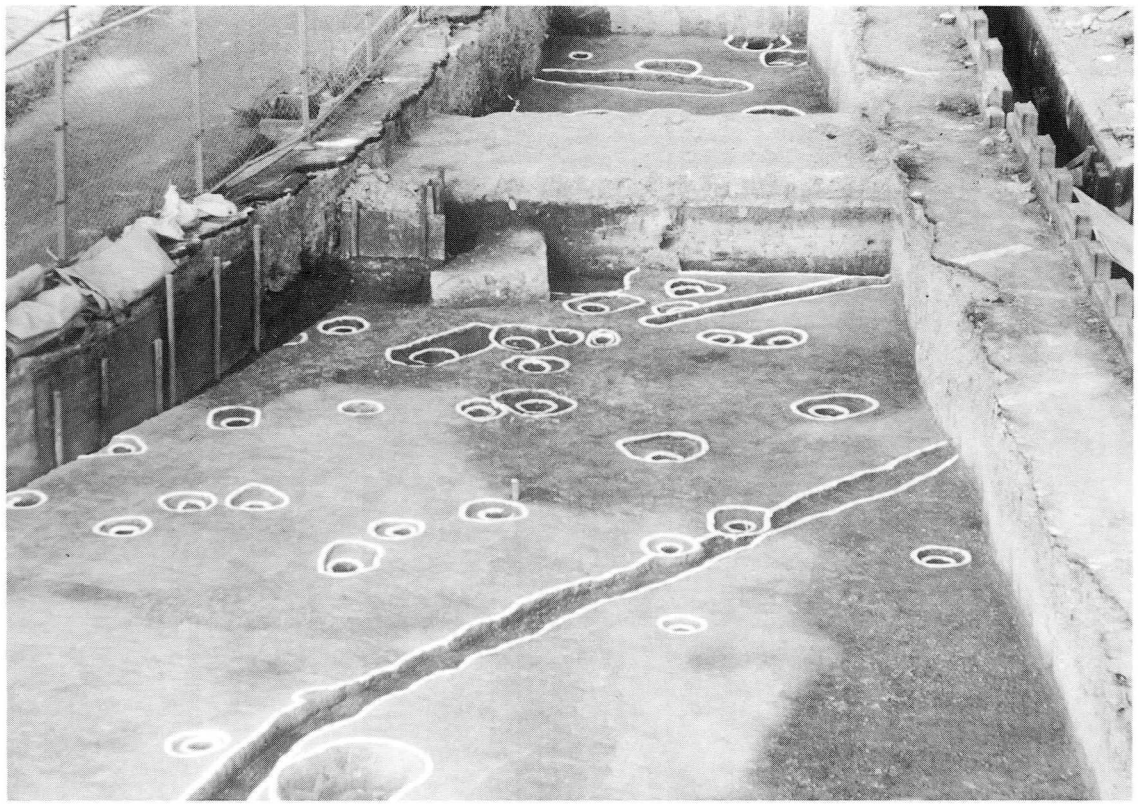
1. 掘立柱建物（SB−6）付近全景　（南から）



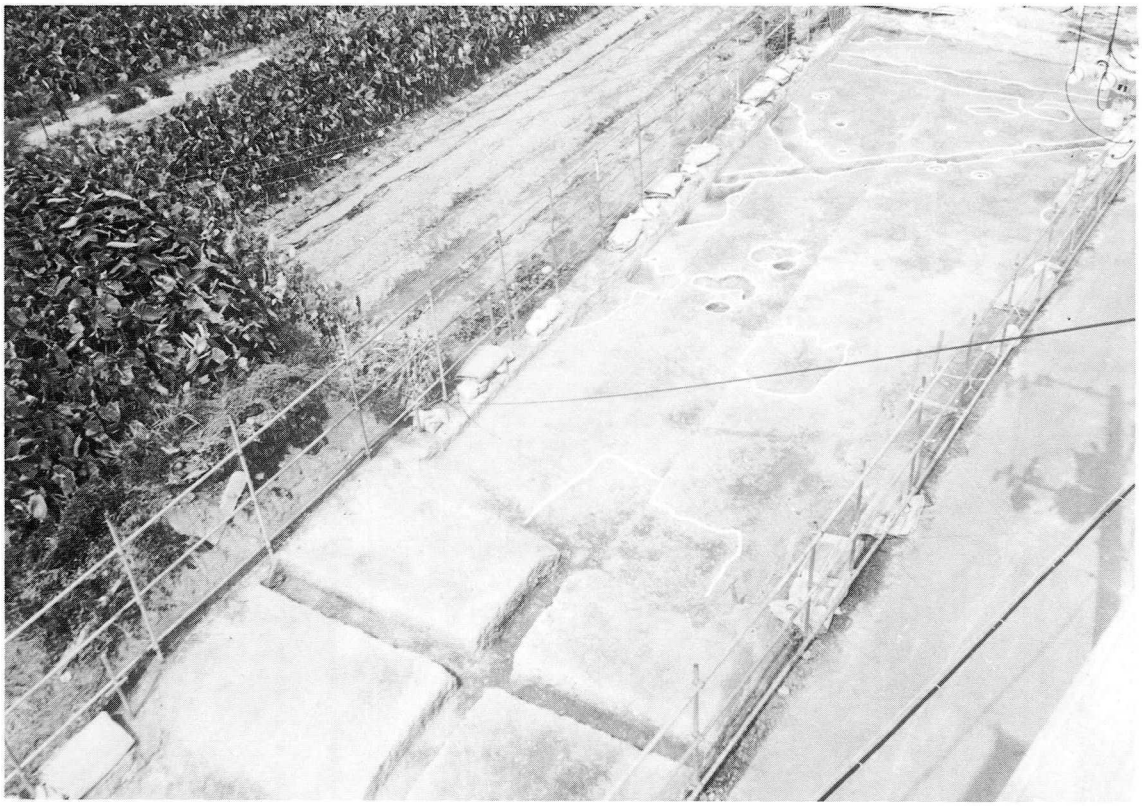
2. 掘立柱建物（SB−7）付近全景　（北から）



1. 掘立柱建物（SB−7）及び溝（SD−405）　（北から）

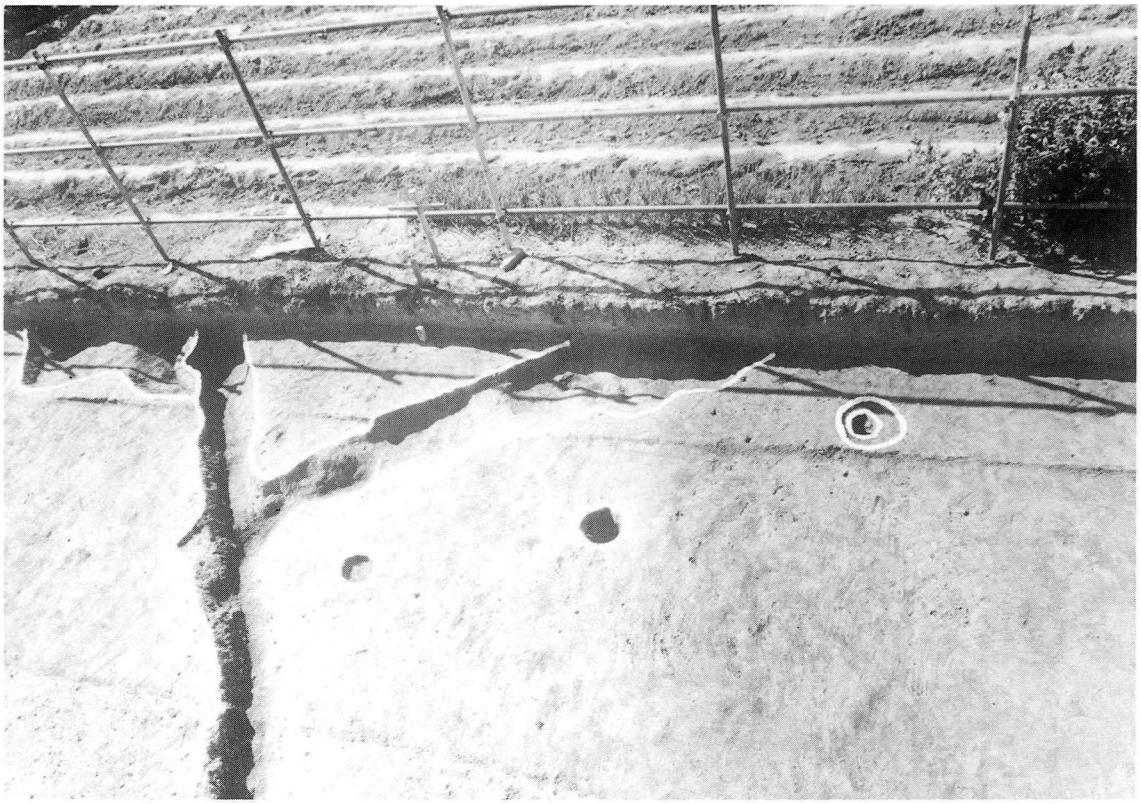


2. 掘立柱建物（SB−7）及び溝（SD−405）　（南から）



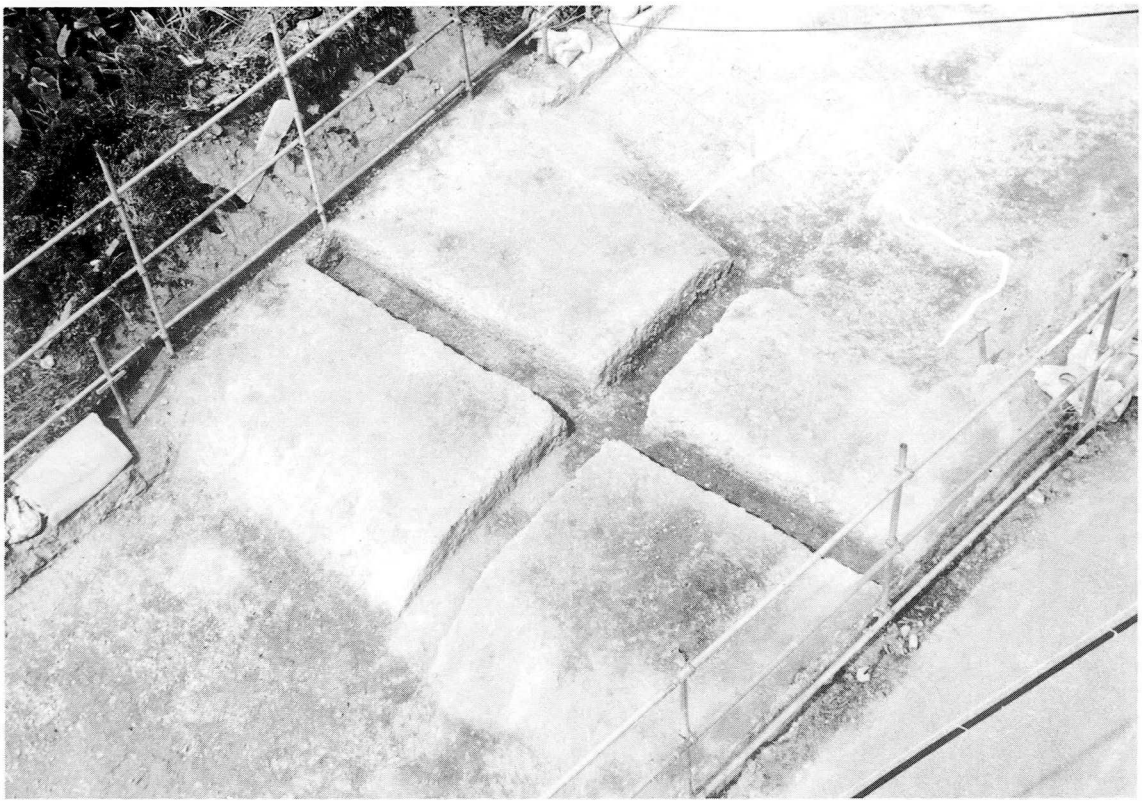
1. 土壇付近全景　（南から）

2. 掘立柱建物（SB−9）付近全景　（北から）



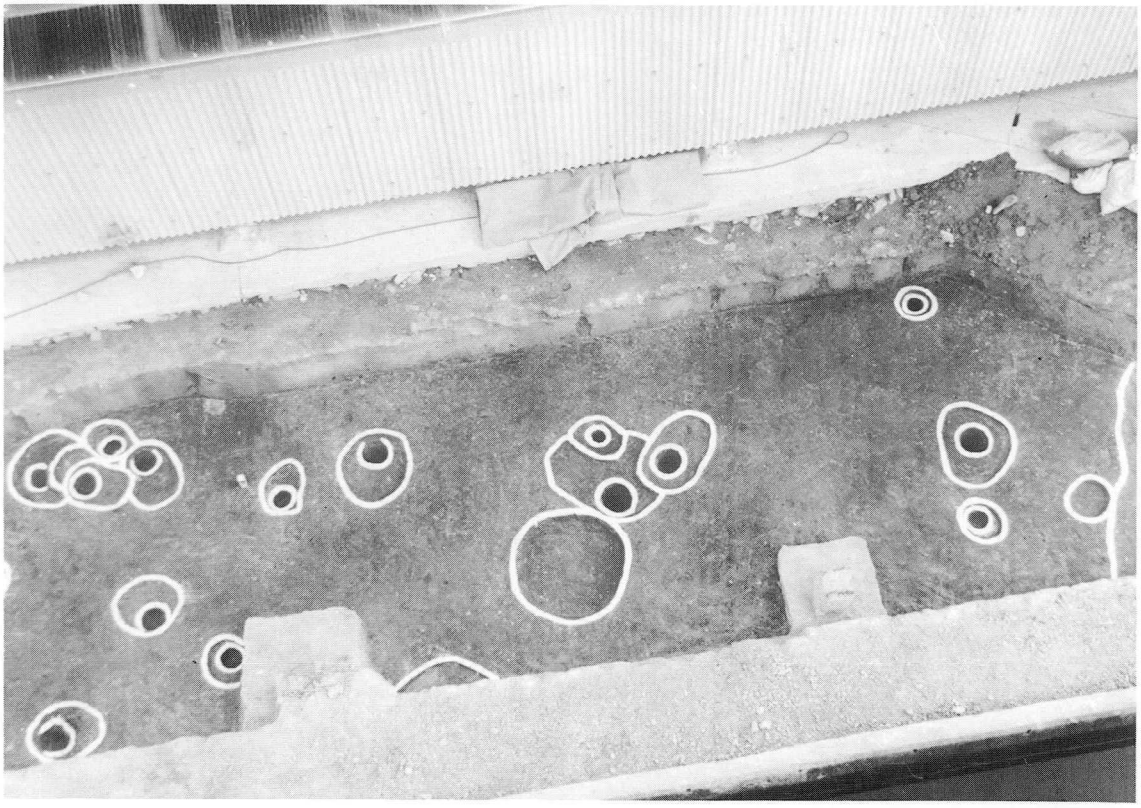
1. 掘立柱建物（SB−9）　（東から）

2. 柱穴（Pit −104）遺物出土状況　（東から）

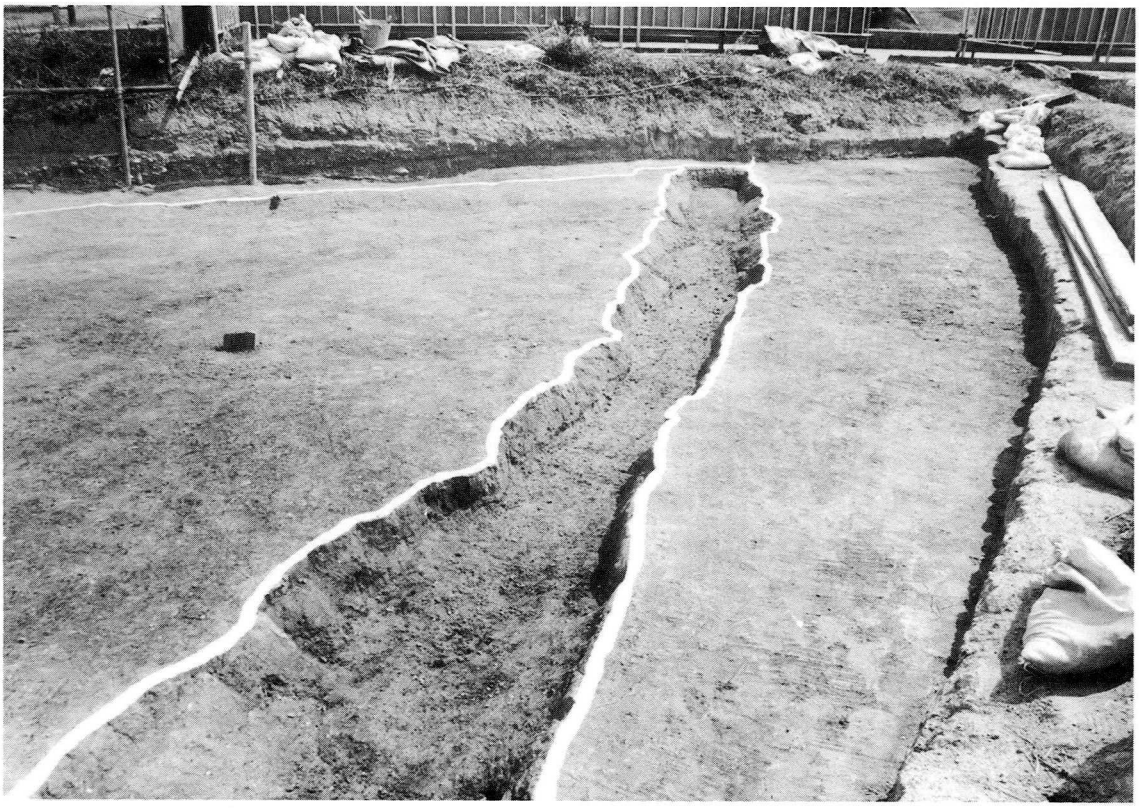


1. 土　壇　（南から）

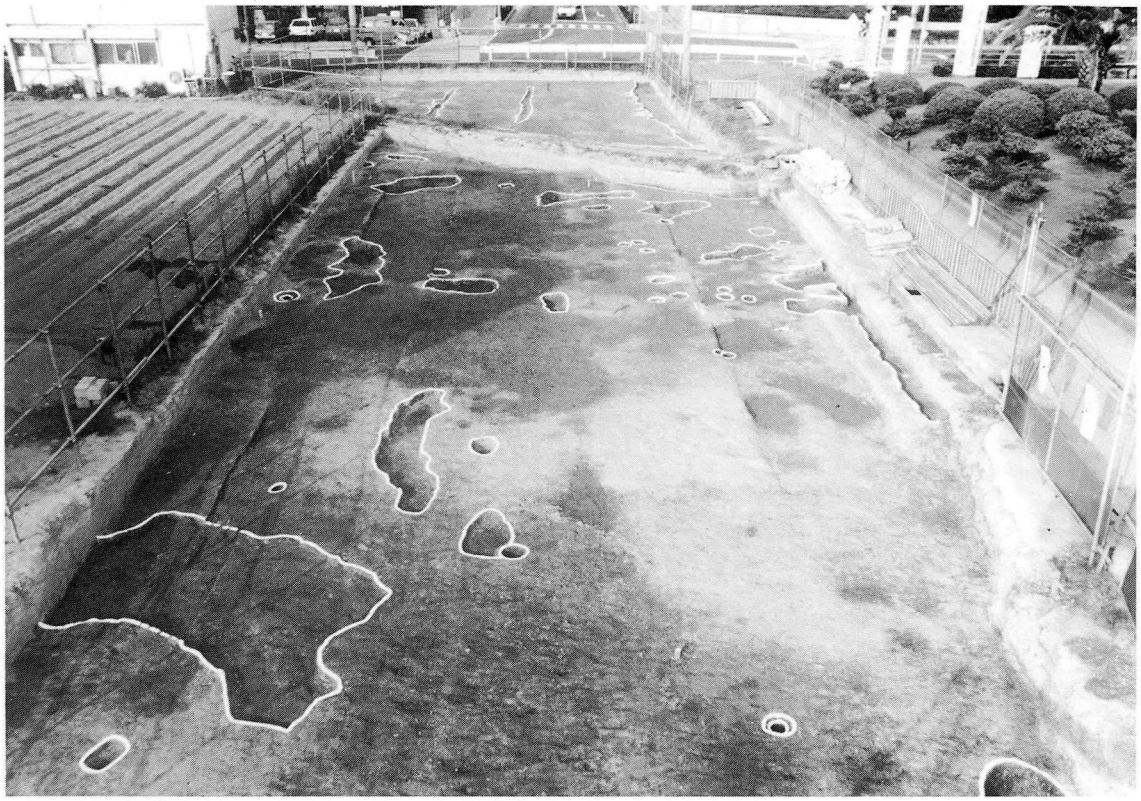
2. 古道確認立ち割り部分　（西から）



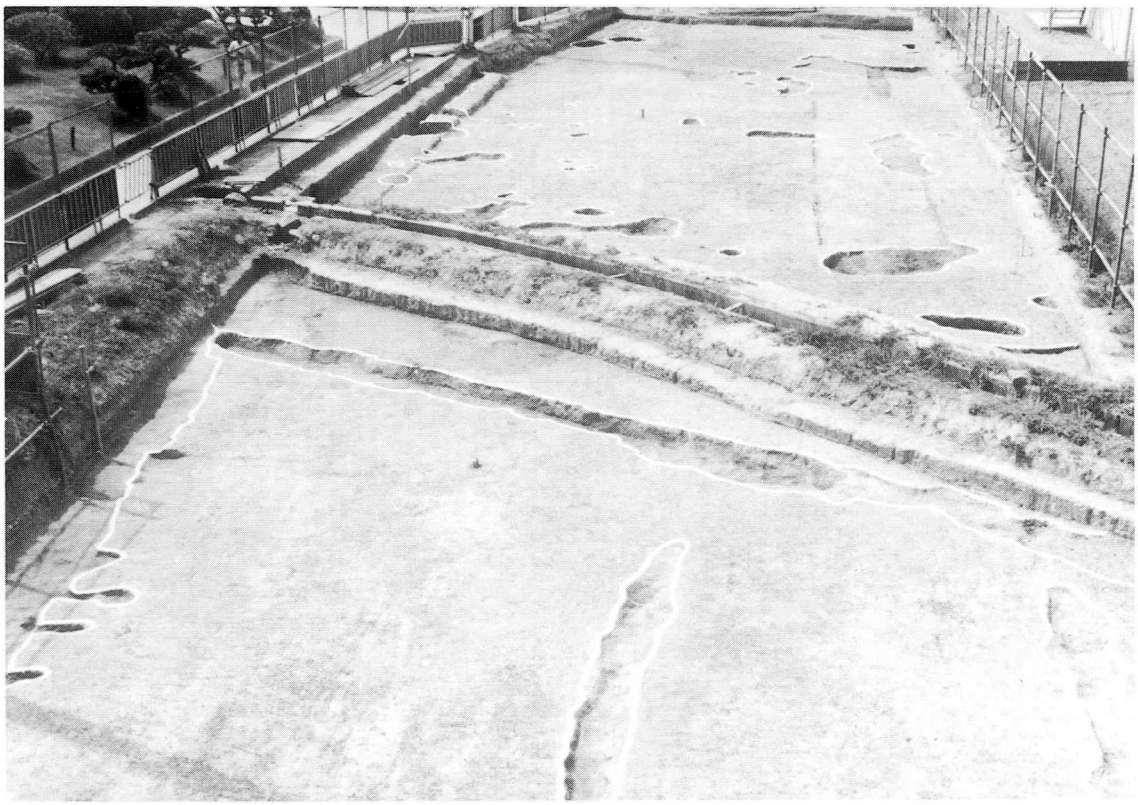
1. 掘立柱建物（SB−8）　（西から）



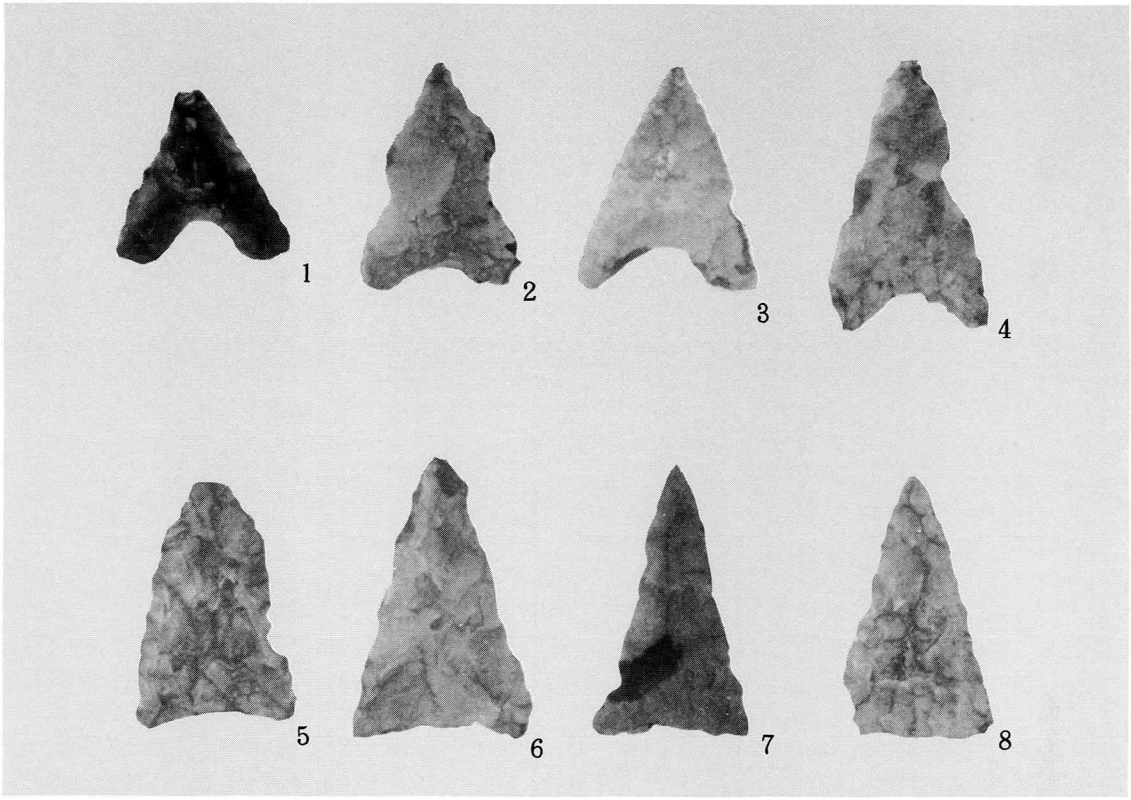
2. 溝（SD−101）　（西から）



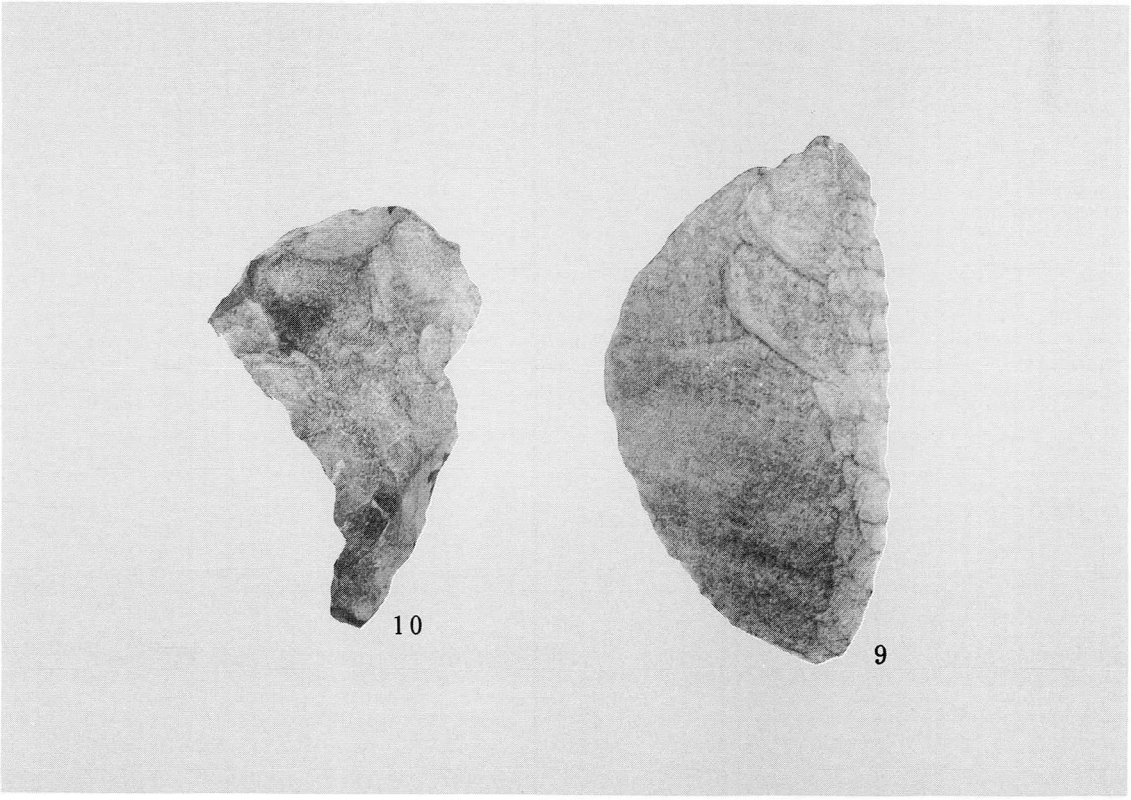
1. 溝（SD−101）付近全景　（南から）



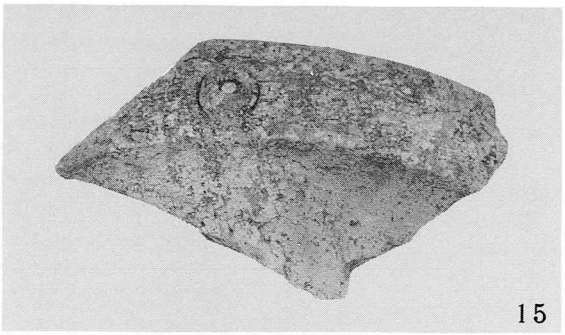
2. 溝（SD−101）付近全景　（北から）

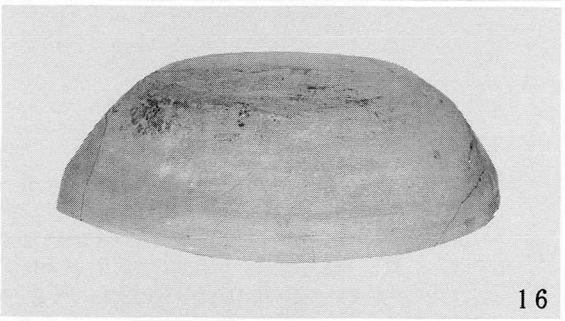


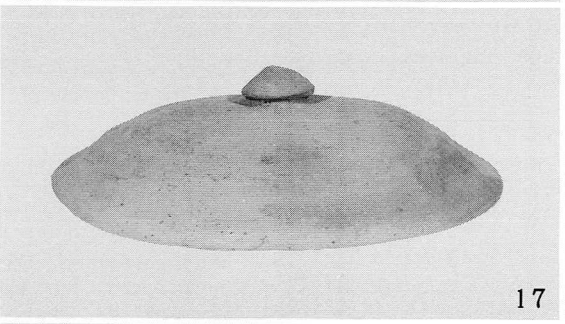
1. 石　鏃

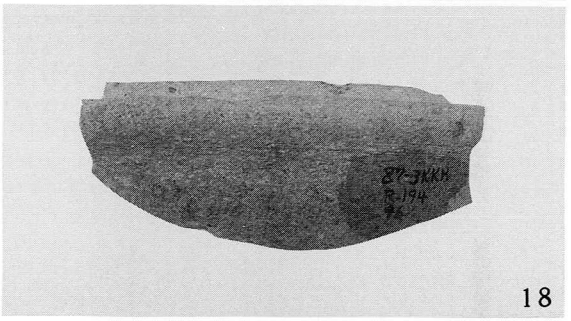


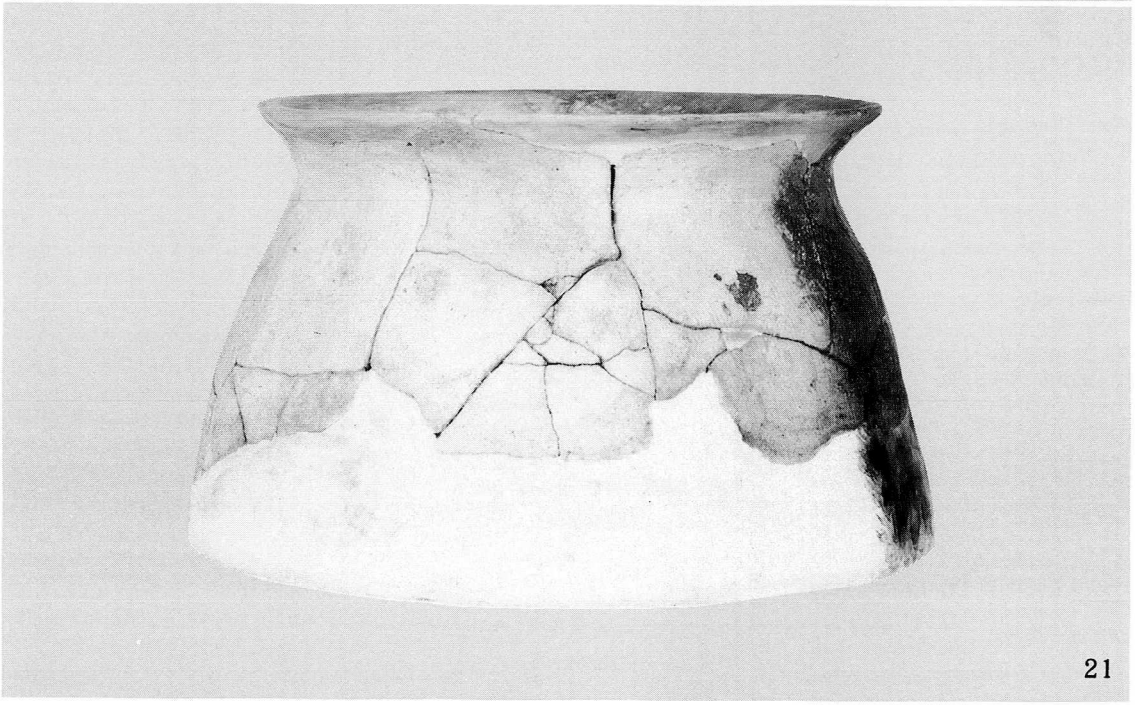
2. 削器・石錐



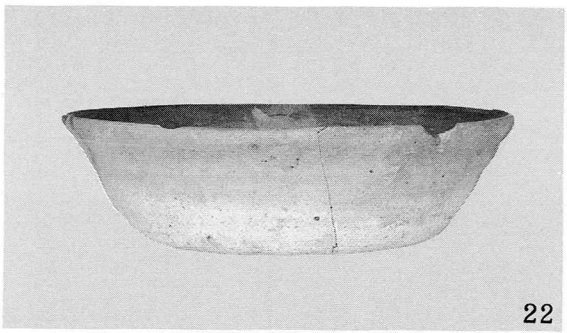


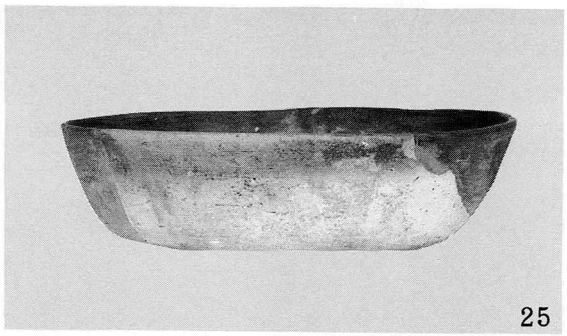


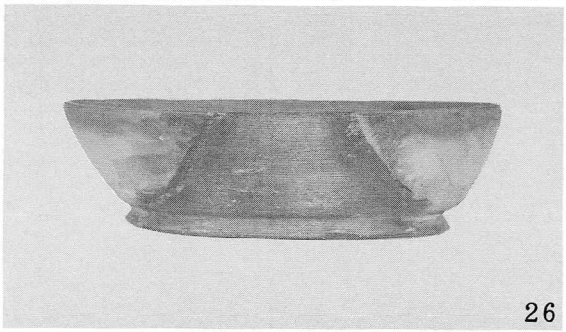


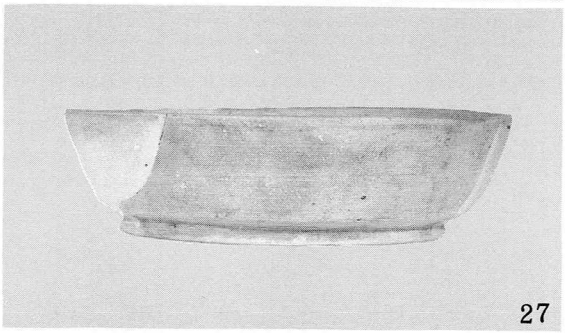


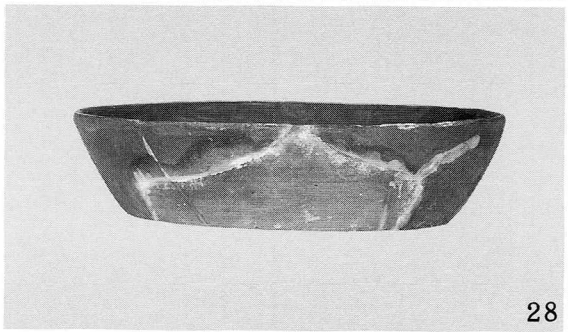
古墳時代前期、古墳時代後期～飛鳥時代出土遺物

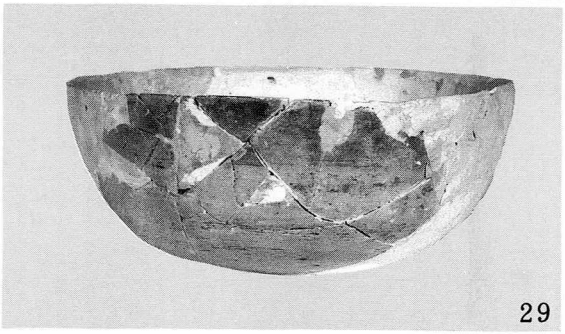


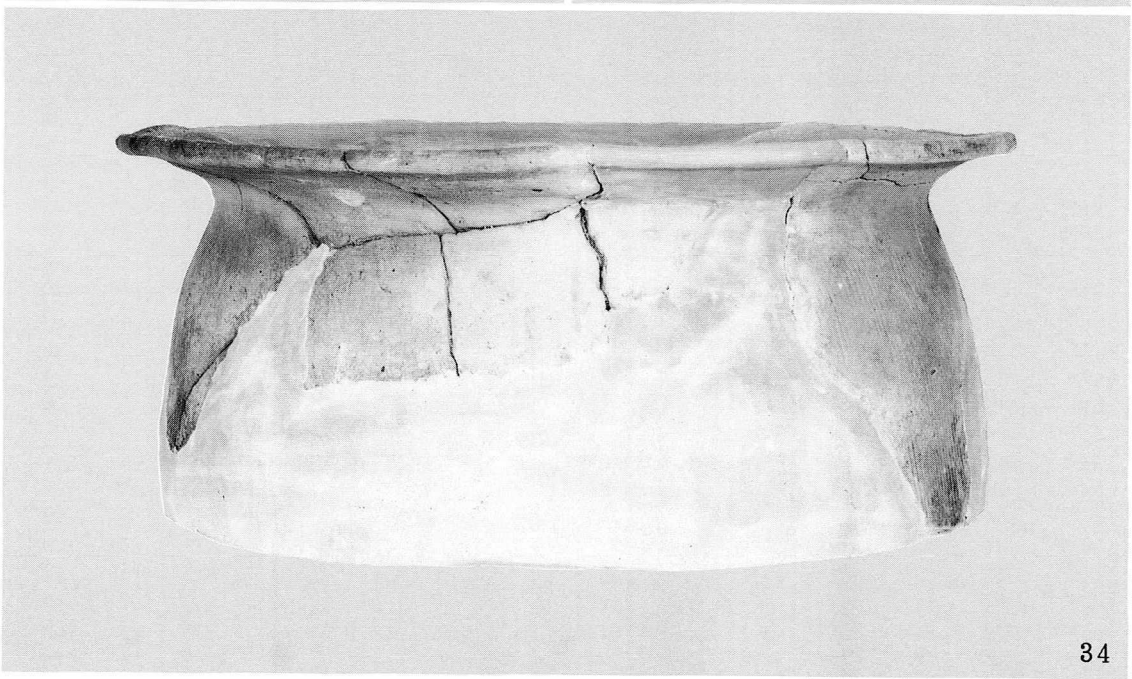




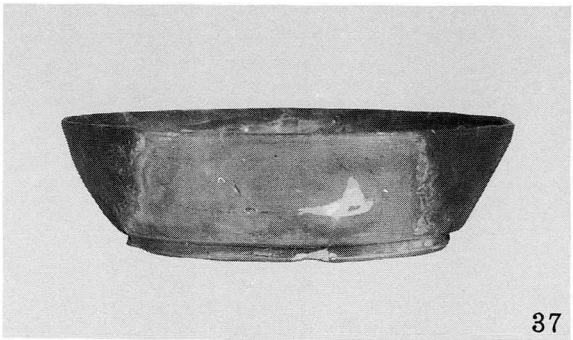


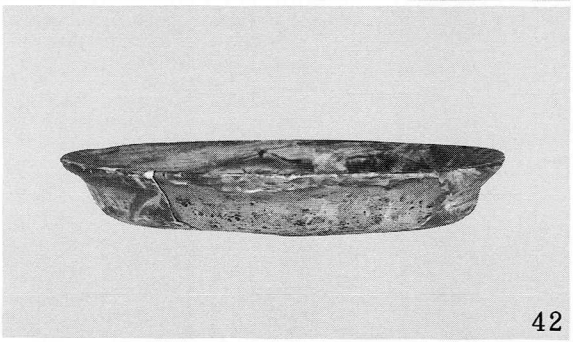


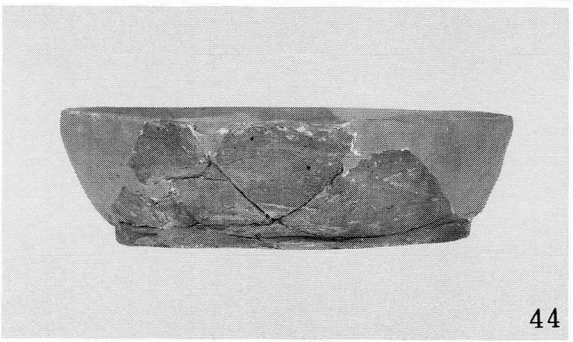


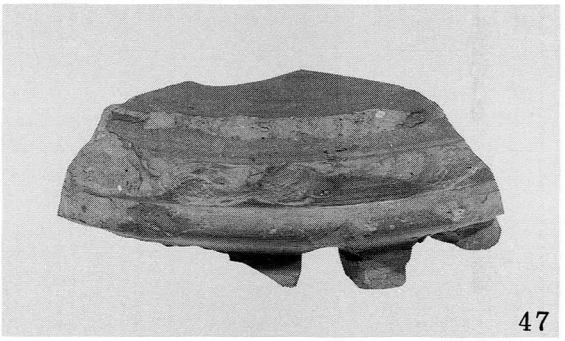


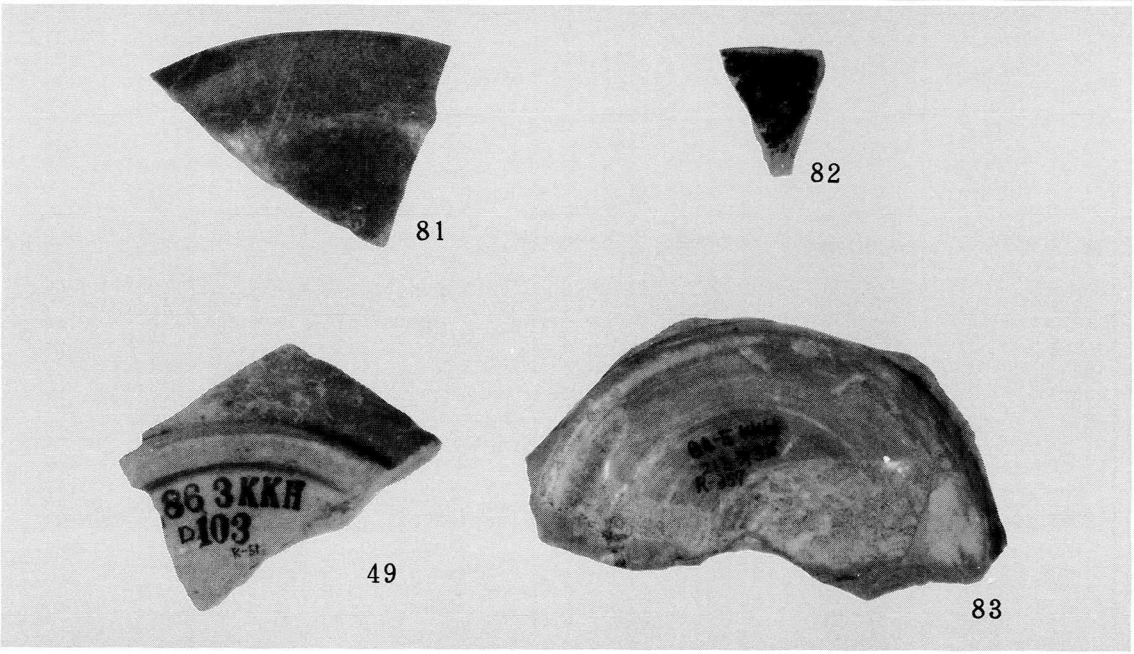
土壙（SK－4）出土遺物







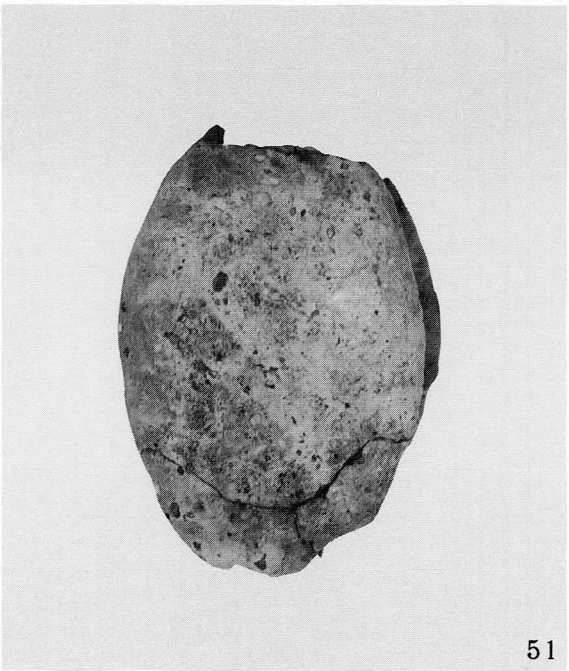


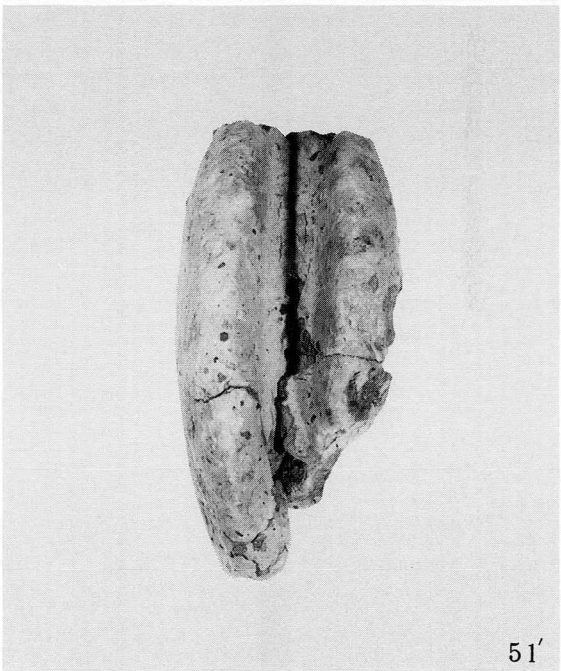


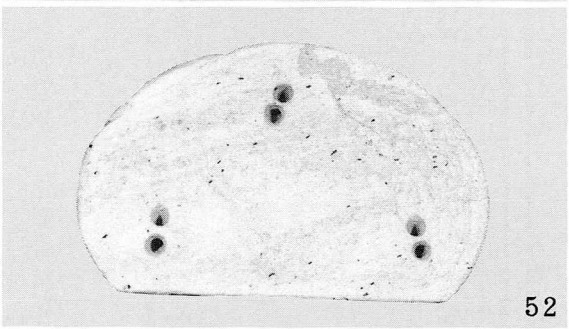
平安時代前期出土遺物

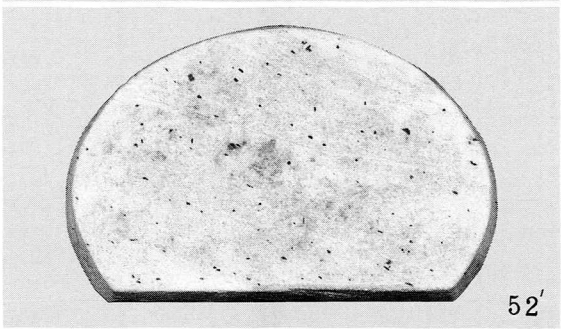
50

50′

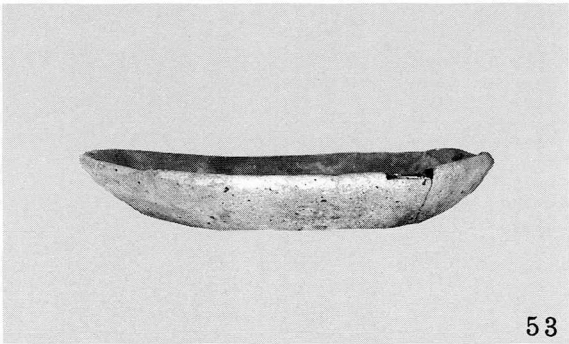

51

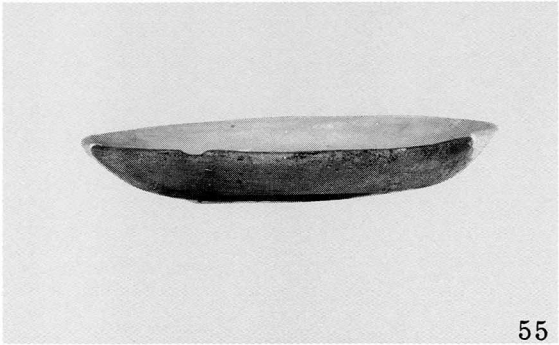

51′

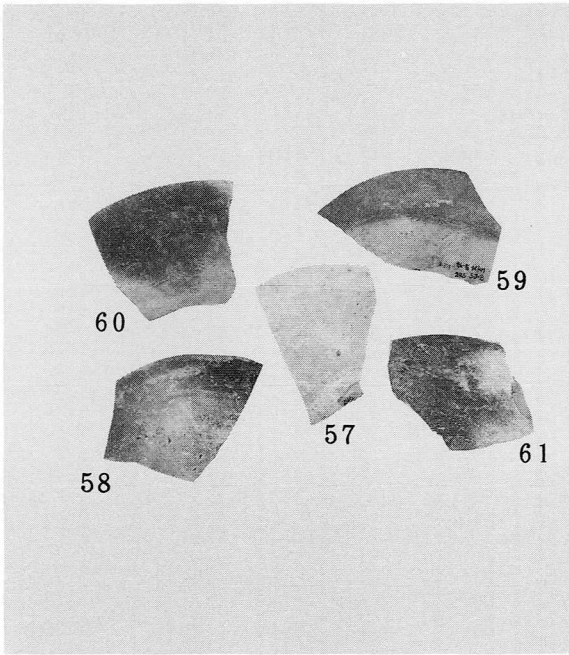

52

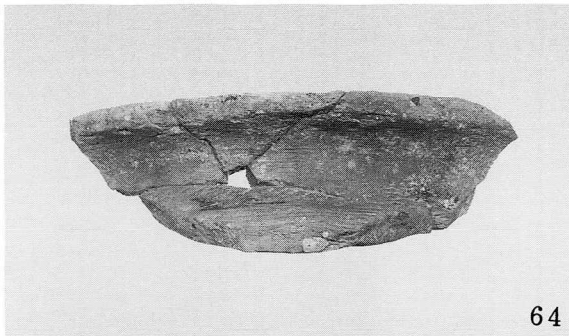

52′

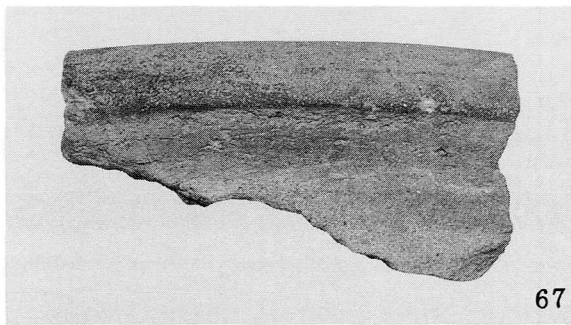
平安時代前期出土遺物

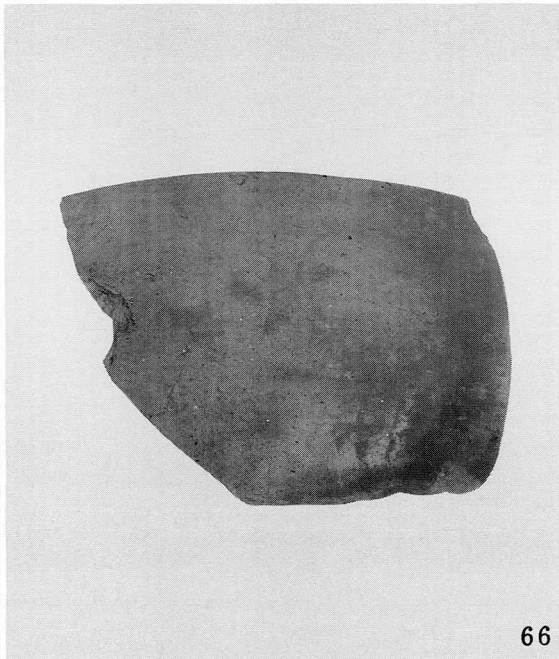




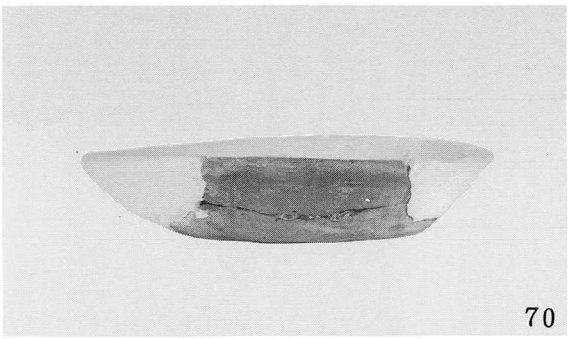


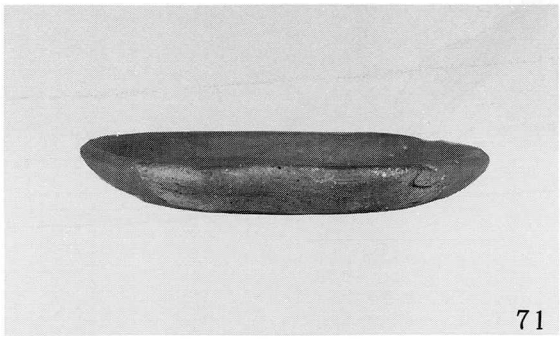


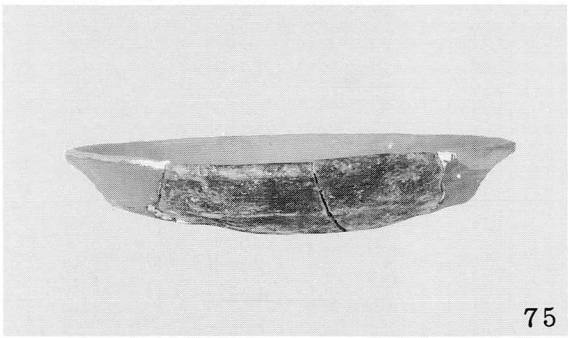


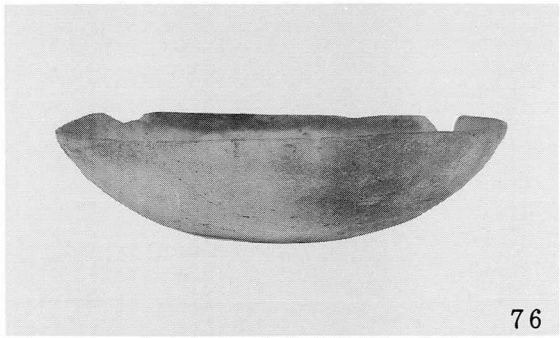


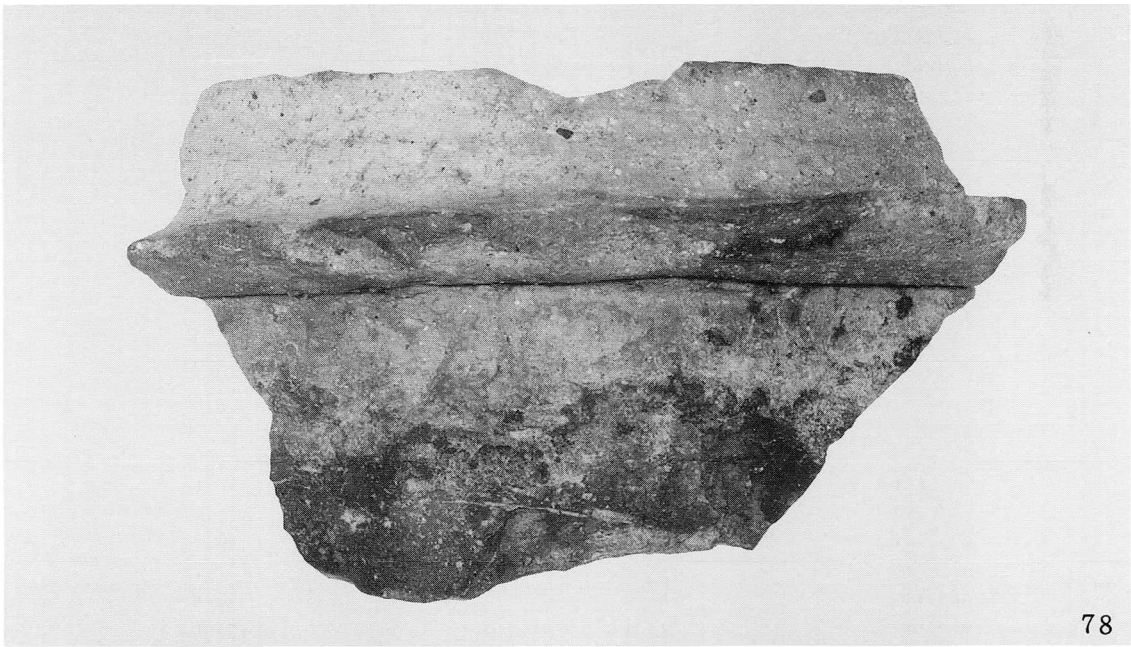
溝（SD−8）出土遺物

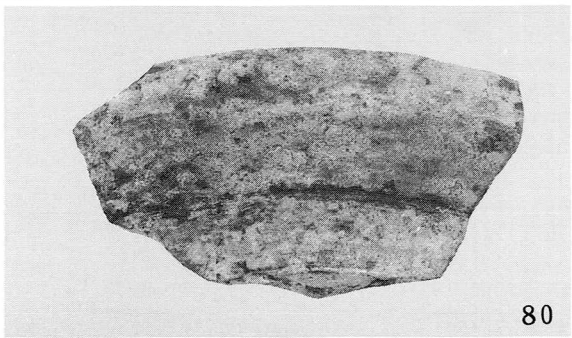

70

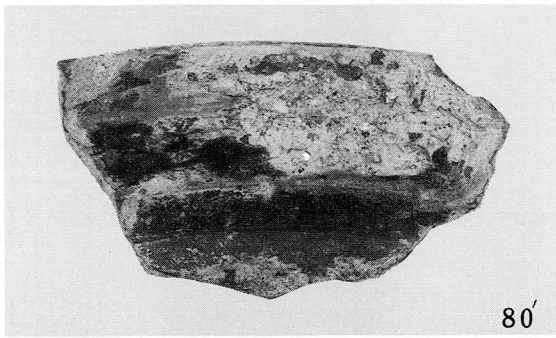

71


75

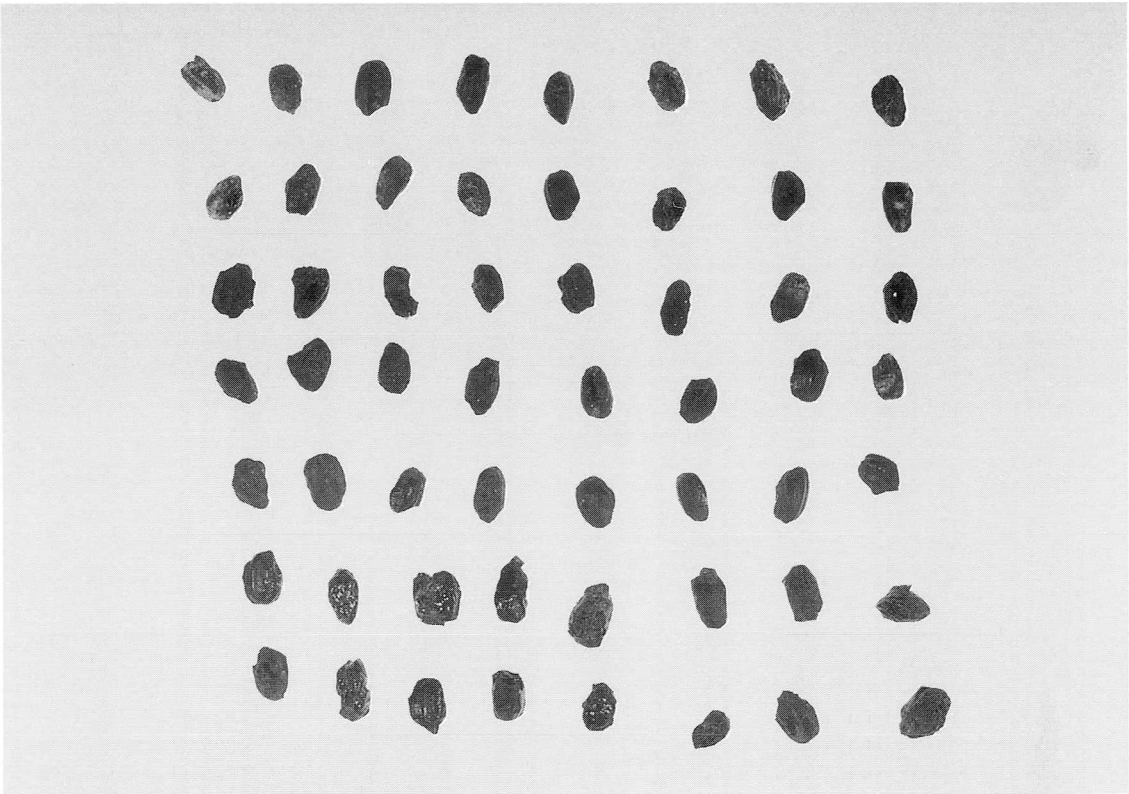

76


78


80


80′

第3層出土遺物



1. 掘立柱建物（SB−9）柱穴内出土炭化米

2. 掘立柱建物（SB−9）柱穴内出土炭化米